

改訂版
古の日本(倭)の
歴史

第5部

古墳時代後期
(継体天皇～崇峻天皇)

飛鳥時代
(推古天皇～持統天皇)

藤田泰太郎

第5部 概略

1

第5部 古墳時代後期・飛鳥時代

1.古墳時代後期(6世紀、継体天皇～崇峻天皇)

継体天皇は応神天皇の5世孫であり、父は彦主人王である。近江国高嶋郷三尾野で誕生したが、幼い時に父を亡くしたため、母の故郷である越前国高向で育てられて、男大迹王として5世紀末の越前地方を統治していた。506年に武烈天皇が後嗣を定めずに崩御したため、大連・大伴金村、物部麁鹿火、大臣・巨勢男人らが協議して、越前にいた男大迹王にお迎えを出した。男大迹王は心中疑いを抱き、河内馬飼首荒籠に使いを出し、大連大臣らの本意を確かめてから即位の決心をした。翌年、河内国樟葉宮において即位し、武烈天皇の姉にあたる手白香皇女を皇后とした。継体は、即位19年後の526年、ようやく大倭(後の大和国)に都を定めることができた。(百済本記を基にして継体紀から年号が定まる。また、継体天皇は直接に以降の皇統に繋がることを確認されている。)

継体天皇6年(512年)、大伴金村は、高句麗によって国土の北半分を奪われた百済からの要求を入れて任那4県を割譲し、百済と結んで高句麗、新羅に対抗しようとしたが、かえって任那の離反、新羅の侵攻を招いた。527年、ヤマト王権の近江毛野は6万人の兵を率いて、新羅に奪われた南加羅・喙己吞を回復するため、任那へ向かって出発した。この計画を知った新羅は、筑紫の有力者であった磐井へ贈賄し、ヤマト王権軍の妨害を要請した。磐井は挙兵し、火の国と豊の国を制圧するとともに、倭国と朝鮮半島とを結ぶ海路を封鎖して朝鮮半島諸国からの朝貢船を誘い込み、近江毛野軍の進軍を阻んで交戦した。継体天皇は大伴金村・物部麁鹿火・巨勢男人らに将軍の人選を諮問したところ、麁鹿火が将軍に任命された。528年、磐井軍と麁鹿火率いるヤマト王権軍が、筑紫三井郡にて交戦し、激しい戦闘の結果、磐井軍は敗北した。その後531年、継体天皇は皇子(安閑天皇)に譲位し、その即位と同日に崩御した。『百済本記』では、天皇と皇子が同時に亡くなったとし、政変で継体以下が殺害された可能性(辛亥の変説)を示唆している。継体陵とされる今城塚古墳からの出土と思われる阿蘇ピンク石(当時石棺に使用)が発見されている。

大伴金村は、安閑、宣化、欽明天皇の時代にも大連として権勢を保ち、屯倉の設置などに励んだ。しかし、欽明天皇の代に入ると天皇と血縁関係を結んだ蘇我稲目が台頭し、金村の権勢は衰え始める。さらに欽明天皇元年(540年)には新羅が任那地方を併合するという事件があり、物部尾輿などから外交政策の失敗(先の任那4県の割譲時に百済側から賄賂を受け取ったことなど)を糾弾され失脚して隠居する。これ以後、大伴氏は衰退した。

2

雄略朝以来、倭は百済と同盟関係にあり、高句麗の南下と高句麗の影響を受けた新羅の侵攻に対抗してきた。512年、倭国は任那4県を百済に割譲した。また、513年、百済より五経博士が渡来、538年、百済の聖名王により仏教が公伝した。古墳石室も竪穴式石室に代わって、朝鮮風の横穴式石室が主流となった。554年、聖名王が新羅で戦死する。そしてついに、562年には任那が新羅によって滅亡させられる。かくして、古来(縄文時代前期)より維持してきた南朝鮮の倭国の領土をすべて失うことになる。このことは、任那・伊都国連合の出自と思われる崇神・応神天皇を掲げる皇統にとり由々しき事態であり、ヤマト王権は、任那滅亡以来、度々任那の回復を図るがことごとく失敗した。

6世紀半ばに大陸から伝わった仏教を受け入れるかどうかを巡り、反対(排仏)派の物部尾輿と、導入(崇仏)派で渡来系の子孫ともいわれる蘇我稲目が争った(崇仏論争)。552年、百済の使者から仏教の説明を受けた欽明天皇は「これほど素晴らしい教えを聞いたことはない」と喜び、群臣に「礼拝すべきか」と問うたところ、蘇我稲目は賛成し、物部尾輿は「外国の神を礼拝すれば国神の祟りを招く」と反発した。そこで天皇が稲目に仏像を預けて礼拝させたところ、疫病が流行したため、尾輿は「仏教を受け入れたせいだ」と主張。寺を燃やし、仏像は難波に流し捨てたという。第2段階は585年、稲目の息子にあたる馬子は寺院を建立し、仏像を祀っていたが、疫病が流行したため、尾輿の息子にあたる守屋が敏達天皇に仏教受容をとりやめるよう進言。馬子の建てた寺に火をつけ、仏像を流し捨てる。用明天皇即位後も両氏は仏教を巡って対立するが、やがて諸豪族を率いた馬子が守屋を討ち滅ぼし(衣摺の戦い)、寺院の建立も盛んに行われるようになった。これ以後、邪馬台国以来権力を振るった、さしもの物部氏も権勢に陰りがみられるようになり、蘇我氏の全盛が始まる。戦い後、馬子は泊瀬部皇子を皇位につけた(崇峻天皇)。この間、581年には、中国は文帝により長い分裂の時代を終えて再び統一され、国号を隋とし中央集権体制をひいた。崇峻天皇は傀儡で政治の実権は馬子が持ち、これに不満な天皇は馬子と対立した。592年、馬子は東漢駒に崇峻天皇を暗殺させた。その後、馬子は豊御食炊屋姫を擁立して皇位につけた(推古天皇)。天皇家史上初の女帝である。

2. 飛鳥時代(6世紀末～8世紀初頭、推古天皇～元明天皇)

推古天皇を中心とした三頭政治(聖徳太子(厩戸皇子)は皇太子となり、蘇我馬子と共に天皇を補佐)が始まり、天皇を中心とした中央集権体制を目指した。593年、太子は四天王寺を建立する。594年、仏教興隆の詔を発した。595年、高句麗の僧慧慈が渡来した。馬子は日本最初の本格的な伽藍配置をもつ飛鳥寺を建立する。598年、隋が高句麗に侵攻。600年、新羅征討の軍を出し、調を貢ぐことを約束させる。601年、太子は斑鳩宮を造営した。602年、再び新羅征討の軍を起した。同母弟・来目皇子を将軍に筑紫に2万5千の軍衆を集めたが、来目皇子の死去のため、遠征は中止となった。603年、冠位十二階を定めた。氏姓制ではなく才能を基準に人材を登用し、天皇の中央集権を強める目的であった。604年、十七条憲法を制定した。607年、小野妹子と鞍作福利を使者とし随に国書を送った。翌年、返礼の使者である裴世清が訪れた。607年、太子は法隆寺を建立する。612年、隋の煬帝、高句麗に遠征するも敗退。618年、李淵が隋の煬帝を殺害し、唐を建国。620年、太子は馬子と議して『国記』、『天皇記』などを選んだ。622年、斑鳩宮で倒れ、そのまま逝去。皇極の御代になると、蘇我氏の専横が目立つようになる。蘇我蝦夷は入鹿を勝手に大臣にする。642年、百済が新羅の諸城を攻める。643年、新羅が唐に援軍を請う。同年、入鹿は蘇我氏と対立してきた聖徳太子の子、山背大兄王を斑鳩に襲撃した。王は、自分の拳兵によって戦が起き、人々が死ぬのは忍びないとして、自害。この事件により蘇我氏の権勢はますます高まり、蝦夷の横暴と若い入鹿の強硬な政治姿勢に次第に朝廷の中で孤立を深めていった。

645年、中大兄皇子・中臣鎌足ら、蘇我入鹿を宮中で暗殺する(乙巳の変)。蘇我蝦夷は自殺し、蘇我本家が滅亡。翌646年、皇子は難波の宮で改新の詔を宣する(大化の改新)。薄葬令、品部廃止の詔が出される。646年、冠位19階を制定する。653年、遣唐使を送る。中大兄皇子、幸徳らを難波宮に残し、飛鳥に移る。658年、唐が高句麗へ派兵。660年、唐・新羅が百済を滅ぼす。661年、中大兄皇子が称制す。663年、百済復興を目指し、新羅軍を撃破すべく2万7千の軍を派遣するも、唐軍に白村江の戦で大敗する(百済の役)。664年、冠位26階を制定。兵士・民部・家部の制「甲氏の宣」を施行。唐の使者郭務悰が来日。対馬、壱岐、筑紫に防人を配置し、筑紫に水城を築き、唐・新羅の来襲に備える。667年、中大兄皇子、大津の宮に遷都。唐・新羅が高句麗へ侵攻。668年、天智が即位。高句麗が滅亡する。670年、全国的に戸籍を作る(庚午年籍)。671年、近江令を施行。太政官制開始。天智天皇没する。

672年、古代日本最大の内乱である壬申の乱が起る。天智天皇の太子・大友皇子に対し、皇弟・大海人皇子(後の天武天皇)が地方豪族を味方に付けて反旗をひるがえしたものである。反乱者である大海人皇子が朝廷軍に勝利し大友皇子が自殺という、類稀な内乱であった。翌673年、天武は飛鳥浄御原宮で即位し、唐に対抗できる国家体制の確立を図る。681年、飛鳥浄御原令の編纂を開始し、草壁皇子を皇太子とする。681年、『帝紀』『旧辞』などの筆録・編集開始(『日本書記』)の詔。「禁式92条」の制定。日本および天皇の称号を用いる。藤原不比等、天武・草壁を補佐。684年、天武が後の藤原京を巡行、八色の姓の制定。685年、四十八階冠位制を施行。686年、

天武が没する。689年、草壁皇子が没する。690年、持統が即位する。飛鳥浄御原管制を施行。戸令により、庚寅年籍を作る。694年、藤原京へ遷都。696年、高市皇子が没する。697年、持統が譲位し、文武が即位。701年、大宝律令を施行。703年、持統が没する。707年、藤原不比等の官僚として活躍を認め200戸の封土を与える。文武が没し、元明が即位。710年、平城京に遷都。712年、太朝臣安萬侶が『古事記』を献上。713年、諸国に『風土記』の編纂を命じる。714年、首皇子が立太子になる。715年、元明が譲位して、元正が即位。718年、養老律令が完成。720年、舎人親王らが『日本書記』を奏上。藤原不比等没する。721年、元明が没する。724年、元正が譲位し、聖武が即位する。

3. 飛鳥・白鳳文化の開化と日本の国家体制の確立と都城の建設

倭国は百済と同盟関係を組み、高句麗の南下とその影響を受けた新羅の侵攻に当たり、512年には百済に任那4県を割譲した。また、538年、百済の聖名王により仏教が公伝した。しかし、554年、聖名王が新羅で戦死する。ついに、562年には任那が新羅によって滅亡させられる。658年、唐が高句麗へ派兵。660年、唐・新羅が百済を滅ぼす。さらに、667年、唐・新羅が高句麗へ侵攻。668年、高句麗が滅亡する。この任那、百済さらに高句麗の滅亡により、五月雨的に、南朝鮮の倭人の帰来、仏僧・知識人・工人が倭国に避難、渡来した。かくて、推古朝を頂点として大和を中心に仏教文化の飛鳥文化が開花した。飛鳥文化の時期は、一般に仏教渡来から大化の改新までをいう。朝鮮半島の百済や高句麗を通じて伝えられた中国大陸の南北朝の文化の影響を受けた、国際性豊かな文化でもある。多くの大寺院が建立され、仏教文化の最初の興隆期であった。それに続く、白鳳文化とは、645年(大化元年)の大化の改新から710年(和銅3年)の平城京遷都までの飛鳥時代に華咲いたおおらかな文化であり、法隆寺の建築・仏像などによって代表されるものである。なお、白鳳とは『日本書紀』に現れない元号(逸元号などという)の一つである(しかし『続日本紀』には白鳳が記されている)。天武天皇の頃には使用されたと考えられており、白鳳文化もこの時期に最盛期を迎えた。

ヤマト王権は大化の改新以降、強大な唐に対抗できる国家体制を確立しようとした。この時代は、刑罰規定の律、行政規定の令という日本における古代国家の基本法を、飛鳥浄御原令、さらに大宝律令で初めて国家体制を敷いた重要な時期と重なっている。681年、天武は『日本書記』の編纂開始の詔を出し、日本および天皇の称号を用いた。日本は任那の同義語であり、ヤマト王権は天皇家の故地である任那の滅亡にともなう新しい時代に対応して、国家的自立と自負を表明するため、「任那」の栄光の記憶を復活し、しかも「日の御子」の治める国にふさわしく「日本」という国号を立てたのではあるまいか。天武朝では新しい国家の首都である藤原京の造営が始まったが、この宮が日本で最初の都市といえる。それまで、天皇ごと、あるいは一代の天皇に数度の遷宮が行われていた慣例から3代の天皇(持統・文武・元明)に続けて使用された宮となったことが大きな特徴としてあげられる。政治機構の拡充とともに壮麗な都城の建設は、国の内外に律令国家の成立を宣するため必要だったと考えられる。藤原京は宮を中心に据え条坊を備えた最初の宮都建設となった。藤原京から平城京への遷都は文武天皇在世中の707年に審議が始まり、708年には元明天皇により遷都の詔が出された。唐の都「長安」や北魏洛陽城などを模倣して建造され、710年に遷都された。さらに、712年、『古事記』、太朝臣安萬侶によって献上される。720年、舎人親王らにより日本の正史である『日本書記』が奏上される。

- 507年(繼体元) 繼体天皇、河内の樟葉宮で即位。
- 511年(繼体5) 山背筒城宮へ遷都。
- 512年(繼体6) 百済に伽耶の4県割譲。
- 513年(繼体7) 百済より五経博士渡来、伽耶の己モンと多沙を割譲。
- 518年(繼体12) 弟国宮へ遷都。
- 526年(繼体20) 磐余玉穗宮へ遷都。
- 527年(繼体21) 近江毛野ら倭国軍の伽耶派遣を阻み、筑紫国造磐井の反乱起こる。
- 528年(繼体22) 物部麁鹿火が磐井を斬殺し、乱を鎮圧。磐井の子葛子が屯倉を献上。
- 531年(繼体24) 繼体没する。
- 534年(安閑元) 倭国勾金橋宮へ遷都。
(北魏分裂、鄴を都とする東魏建国)
- 535年(安閑2) 諸国に屯倉を設置。安閑没し、宣化即位。
(長安を都とする西魏が建国)
- 536年(宣化元) 檜隅廬入野宮へ遷都。
- 538年(宣化3) 百済の聖名王により仏教伝来。
(百済、泗泚城に遷都)
- 539年(宣化4) 宣化没し、欽明即位。
- 540年(欽明元) 磯城島金刺宮へ遷都。秦人・漢人の戸籍を作る。
- 550年(欽明11) (北齊建国)
- 551年(欽明12) 百済、高句麗より漢山城を奪回。しかしよく翌年、新羅に奪われる。
- 552年(欽明13) 百済の聖名王より仏教公伝。崇仏・廃仏派の争い起こる。
- 554年(欽明15) 百済が救援を要請。百済より医、歴博士らが渡来、五経博士交代。
(百済聖名王、新羅で戦死)
- 555年(欽明16) 吉備に白猪屯倉を設置。
- 556年(欽明17) 備前児嶋郡に屯倉を設置。倭国高市郡に韓人大身狭屯倉、高麗人小身狭屯倉を設置。紀国に海部屯倉を設置。
(任那日本府が新羅によって滅亡)
- 562年(欽明23) 白猪屯倉の田部の増置、名籍を作成。
- 569年(欽明30) 白猪屯倉の田部の丁籍を検定。
- 571年(欽明32) 欽明没する。
- 572年(敏達元) 敏達即位し、百済大井宮に遷都。蘇我馬子、大臣になる。
- 574年(敏達3) 白猪屯倉の田部の増置、名籍を作成。
- 581年(敏達10) 蝦夷の族長が来朝し、服属儀礼を行う。
(楊堅が隋を建国し、高句麗・百済が朝貢する)
- 584年(敏達13) 蘇我馬子石川の宅に仏像を建造。
- 585年(敏達14) 敏達が没し、陽明が磐余池辺双槻宮で即位。
崇仏派の蘇我馬子と排仏派の物部守屋の間の対立が激化。

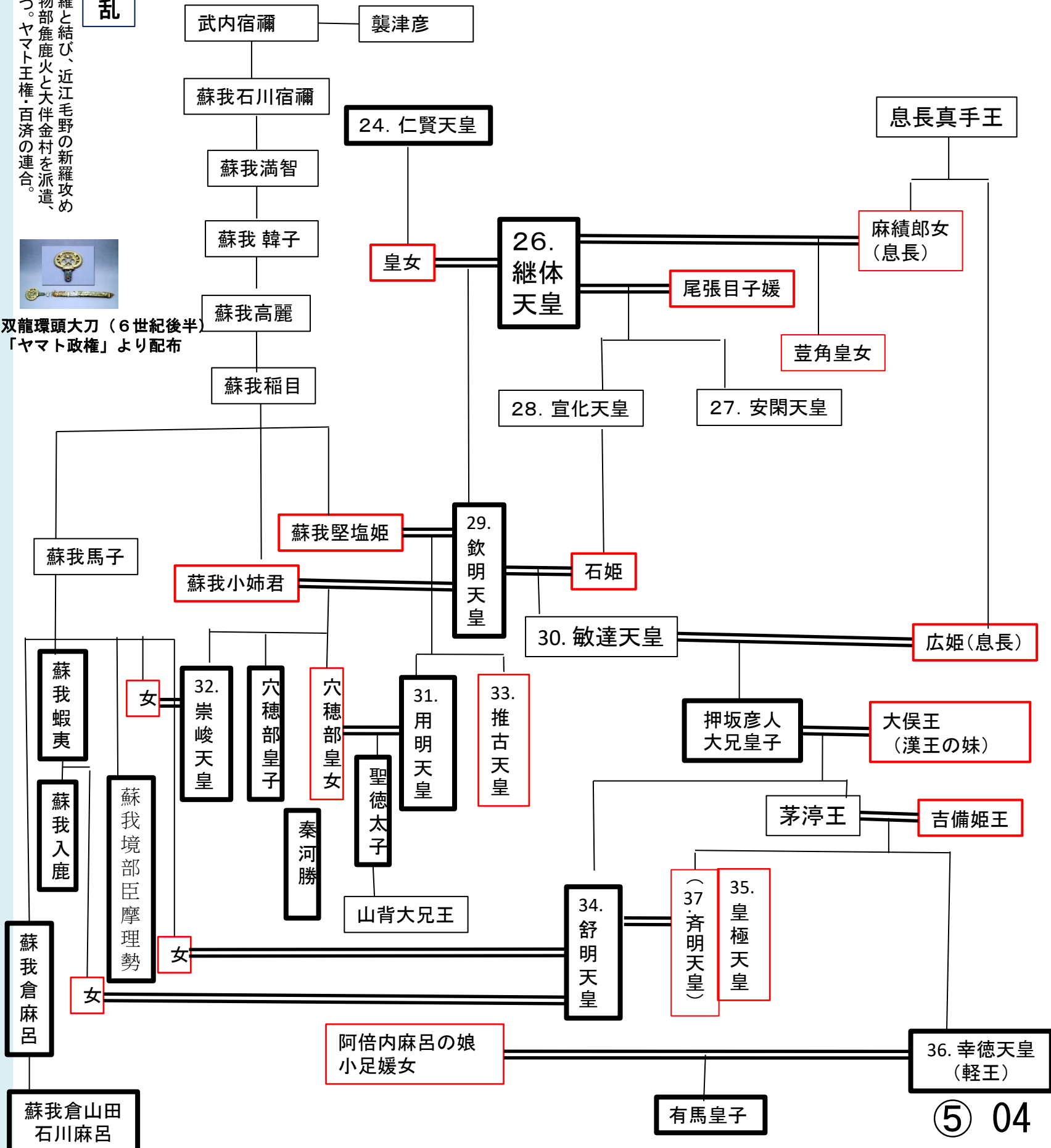
磐井の乱

磐井、新羅と結び、近江毛野の新羅攻めを妨害。物部麁鹿火と大伴金村を派遣、磐井を討つ。ヤマト王権・百済の連合。



双龍環頭大刀(6世紀後半)「ヤマト政権」より配布

葛城氏に代わって蘇我氏台頭



- 586年(用明元) 穴穂部皇子が殯宮で炊屋姫皇后(後の推古天皇)を奸しようとするが、美輪君逆によって阻止さる。
- 587年(用明2) 用明没する。仏教に帰依せんことを群臣に諮る。物部氏と蘇我氏対立し、蘇我馬子、物部守屋を滅ぼす(丁未の役)。用明天皇没する。崇峻が倉梯の宮で即位。
- 588年(崇峻元) 百済が仏舎利、僧、寺工を献上。飛鳥寺の造作を開始 同年、崇峻天皇即位。
- 589年(崇峻2) (隋が陳を滅ぼし、中国を統一)
- 592年(崇峻5) 蘇我馬子が崇峻を暗殺。推古が豊浦宮で即位する。
- 593年(推古元) 厩戸皇子(聖徳太子)が皇太子に立てられ、摂政となる。四天王寺を建立。
- 594年(推古2) 三宝(仏・法・僧)隆盛の詔を出す。
- 595年(推古3) 慧慈(エジ)が高句麗より来日。
- 596年(推古4) 飛鳥寺(法興寺)完成。
- 598年(推古6) (隋、高句麗侵攻)
- 600年(推古8) 新羅に派兵。初の遣隋使を送る。(『隋書』によれば、倭国より遣使)
- 601年(推古9) 斑鳩宮を建立。
- 602年(推古10) 新羅派遣軍を組織するが、来目皇子の病気で中止。観勒が百済より来航し、暦法、天文遁甲や方術等を伝える。
- 603年(推古11) 小墾田宮へ遷都。秦河勝が蜂岡寺(広隆寺)の造作を開始。冠位十二階制定を制定。(隋、2代皇帝煬帝が即位)
- 604年(推古12) 憲法十七条を制定。
- 607年(推古15) 『日本書紀』によれば、小野妹子らの遣隋使を送る。「日出る処の天子……」の国書を持参)
- 608年(推古16) 隋の裴世清、来日。高向玄理、南淵請安、僧旻らの遣隋使を送る。
- 610年(推古18) 僧曇徴が高句麗より来日。
- 612年(推古20) (隋の煬帝、高句麗に遠征)
- 614年(推古22) 犬上小田鍬らの遣隋使を送る。
- 618年(推古26) (隋の煬帝が殺害さる。李淵が唐を建国)
- 620年(推古28) 厩戸の皇子、蘇我馬子が「天皇紀」「国記」を編纂。
- 622年(推古30) 厩戸の皇子没する。
- 623年(推古31) 新羅の使者が来日。626年(推古33) 蘇我馬子没する。(李世民が即位)
- 628年(推古35) 推古没する。
- 629年(欽明元) 欽明が即位。
- 630年(欽明2) 初の遣唐使送る。岡本宮への遷都。
- 632年(欽明4) 唐の使者、高表仁が来日。
- 636年(欽明8) 岡本宮や焼亡し、田中宮へ遷都。
- 637年(欽明9) 蝦夷が反乱。
- 639年(欽明11) 百済宮・百済大寺(吉備池廃寺)の造作開始。
- 640年(欽明12) 百済宮への遷都。
- 641年(欽明13) 欽明没す。

継体天皇

『古事記』、『日本書紀』によると継体天皇は応神天皇5世の子孫であり、父は彦主人王である。近江国高嶋郷三尾野(現在の滋賀県高島市あたり)で誕生したが、幼い時に父を亡くしたため、母の故郷である越前国高向(たかむく、現在の福井県坂井市丸岡町高棕)で育てられて、男大迹王として5世紀末の越前地方(近江地方説もある)を統治していた。

『日本書紀』によれば、506年に武烈天皇が後嗣定めずして崩御したため、大連・大伴金村、物部麁鹿火、大臣巨勢男人らが協議した。越前にいた応神天皇の5世の孫の男大迹王にお迎えを出した。男大迹王は心の中で疑いを抱き、河内馬飼首荒籠(かわちのうまかいのおびとあらこ)に使いを出し、大連大臣らの本意を確かめて即位の決心をした。翌年58歳にして河内国樟葉宮(くすばのみや)において即位し、武烈天皇の姉(妹との説もある)にあたる手白香皇女を皇后とした。

継体は、ようやく即位19年後の526年、大倭(後の大和国)に都を定めることができたが、その直後に百済から請われて救援の軍を九州北部に送った。しかし新羅と結んだ磐井によって九州北部で磐井の乱が勃発して、その平定に苦心している。日本書紀の記述では継体が507年に即位してから大和に都をおくまで約20年もかかっており、皇室(実態はヤマト王権)内部もしくは地域国家間との大王位をめぐる混乱があったこと、また、継体(ヤマト王権)は九州北部の地域国家の豪族を掌握できていなかったことを示唆している。

531年に、皇子の勾大兄(安閑天皇)に譲位(記録上最初の譲位例)し、その即位と同日に崩御した。『日本書紀』では、『百済本記』を引用して、天皇及び太子と皇子が同時に亡くなったとし、政変で継体以下が殺害された可能性(辛亥の変説)を示唆している。

越前を統治していた男大迹王は百済の武寧王と親交を結び、503年に武寧王から人物画像鏡を贈られている。(英雄たちの選択、NHK)



福井県の足羽(あすわ)神社に立つ継体天皇の像。継体天皇は越前(福井県)で育ったといわれる。

継体天皇と阿蘇ピンク石

継体天皇の真の陵とされる今城塚古墳に関わって阿蘇ピンク石が発見されたと報道されている。「石橋の材料 実は継体天皇の石棺 高槻古墳から破片流出」という記事が、11月11日に各紙(産経新聞、奈良新聞など)に報道されている。長さ110センチのピンク石、石橋で使われていたが付近の寺跡に置かれていたとのことだった。「この石棺は無かったのではないか、破片しか出てこないじゃないか」と聞いたことがあるが、逆転の見事な発見である。

(継体天皇と阿蘇ピンク石、奈良・桜井の歴史と社会、Net)



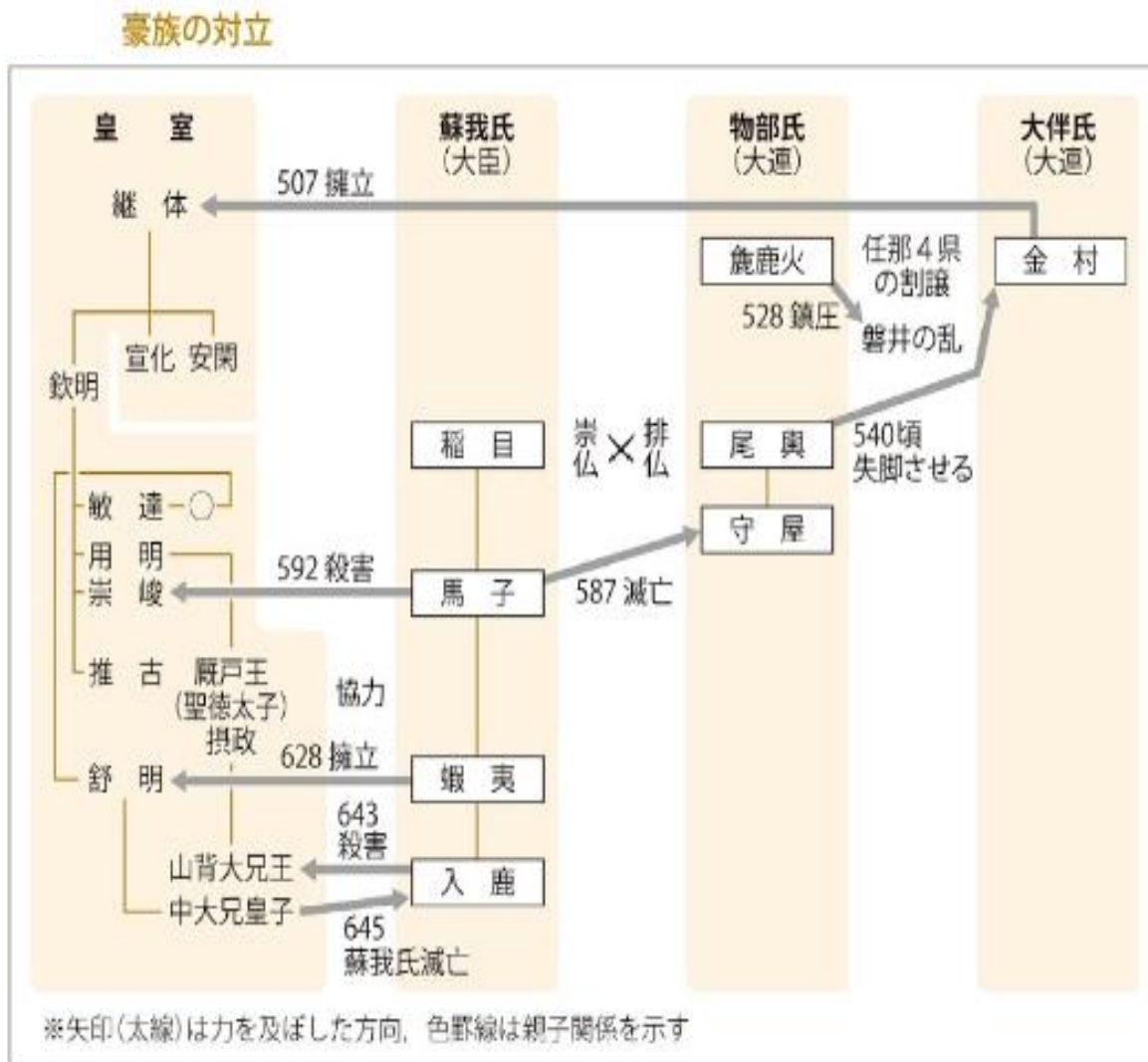
東乗鞍古墳の阿蘇ピンク石石棺

継体

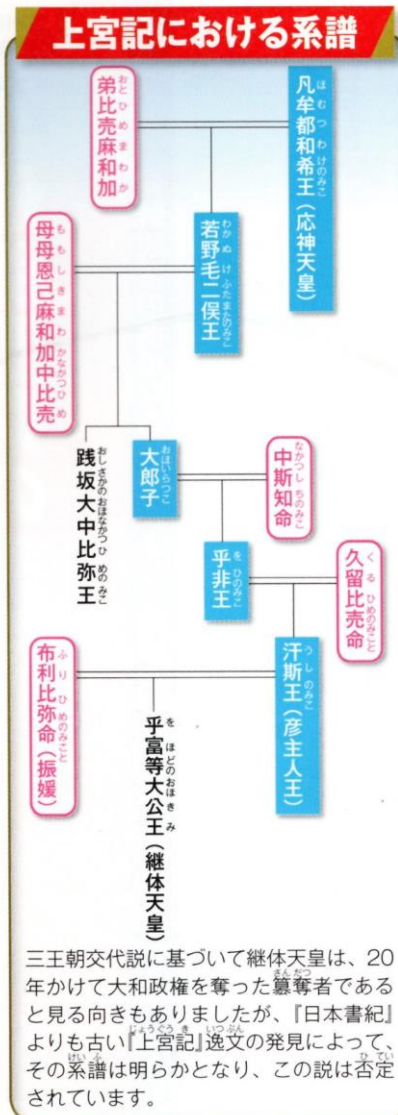
継体の擁立

古墳時代後期

継体の擁立



(いっきに学び直す日本史 古代・中世・近世 教養編、安藤)



古事記・日本書紀、西東社



古墳文化の終焉期 (古墳時代後期の主な古墳)

6世紀には竪穴式石室に代わって、朝鮮風の横穴式石室が主流となり、九州では石室壁画や石棺に彩色や彫刻を施す装飾古墳も登場した。

一方、朝鮮半島を経由して中国の死生観も流入した。すなわち、死後には黄泉の国で生前の豊かな生活を送ることを意図して、家形石棺使われ、食器類なども副葬されるようになった。

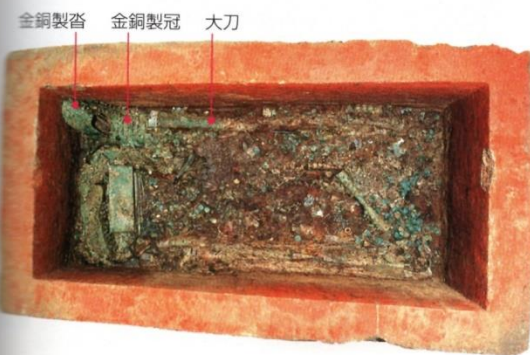
古墳時代後期

古墳文化の終焉



家形石棺

横穴式石室
奥の玄室には、朱塗りの家形石棺が安置されていた。



金銅製盃 金銅製冠 大刀

石棺内部
水銀朱で塗りこめられ、副葬品で埋めつくされていた。出土品はすべて国宝である。

豪華な副葬品が多数出土 藤ノ木古墳

奈良県斑鳩町にある円墳で、6世紀後半の築造と推定される。横穴式石室をもち、内部には家形石棺が安置されていた。精巧で豪華な金銅製の馬具や装身具などが副葬され、大王家に連なる人物の墓とみられている。



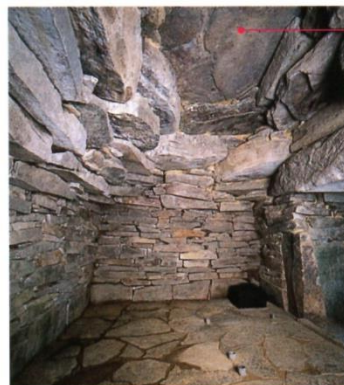
金銅製鞍金具(後輪)
獅子・竜・鬼面・鳳凰・象などが透かし彫りされ、明らかに大陸文化の影響がみられる。



金銅製冠
多数の鳥を配した樹木形の立ち飾りをもつ。立ち飾りの形は百済に由来するとされる。



日岡古墳
石室に多色の同心円文、蕨手文を中心とした彩色壁画がある。



ドーム型の天井部

須曾蝦夷穴古墳
高句麗の影響を受け、石室の天井部は板石を積み上げたドーム型になっている。



酒巻14号墳出土の馬形埴輪。
鞍の後ろの旗は、高句麗の影響を受けたものとされる。



短甲

島内地下式横穴墓群21号墓
南九州に特有の地下式横穴墓。地中に掘られた墓室には、遺骨、短甲などがおさめられていた。



虎塚古墳
石室内の白粘土の壁に、ベンガラ(酸化鉄)で幾何学文や武器・武具などが描かれている。



吉見百穴
200基以上の横穴墓群。丘陵の斜面を掘削して墓をつくった。



この一つ一つが円墳

岩橋千塚古墳群
約600基の大規模な群集墳。大半は円墳で、早い時期に横穴式石室を採用し、大部分がこの形式となっている。

(図説 古代史、成美堂出版)

磐井の乱 (いわいのらん)

527年(継体21年)に朝鮮半島南部へ出兵しようとした近江毛野(近江国野洲郡小篠原村の豪族)率いるヤマト王権軍の進軍を筑紫君磐井がはばみ、翌528年(継体22年)11月、物部麤鹿火によって鎮圧された反乱、または王権間の戦争。この反乱もしくは戦争の背景には、朝鮮半島南部の利権を巡るヤマト王権と、親新羅だった九州豪族との主導権争いがあったと見られている。

磐井の乱に関する文献史料は、ほぼ『日本書紀』に限られているが、『筑後国風土記』逸文(「釈日本紀」巻13所引)や『古事記』(継体天皇段)、『国造本紀』(「先代旧事本紀」巻10)にも簡潔な記録が残っている。

乱の経緯

527年(継体21)6月3日、ヤマト王権の近江毛野は6万人の兵を率いて、新羅に奪われた南加羅・喙己吞を回復するため、任那へ向かって出発した(いずれも朝鮮半島南部の諸国)。この計画を知った新羅は、筑紫(九州地方北部)の有力者であった磐井(日本書紀では筑紫国造磐井)へ贈賄し、ヤマト王権軍の妨害を要請した。

磐井は拳兵し、火の国(肥前国・肥後国)と豊の国(豊前国・豊後国)を制圧するとともに、倭国と朝鮮半島とを結ぶ海路を封鎖して朝鮮半島諸国からの朝貢船を誘い込み、近江毛野軍の進軍をはばんで交戦した。このとき磐井は近江毛野に「お前とは同じ釜の飯を食った仲だ。お前などの指示には従わない。」と言ったとされている。ヤマト王権では平定軍の派遣について協議し、継体天皇が大伴金村・物部麤鹿火・巨勢男人らに将軍の人選を諮問したところ、物部麤鹿火が推挙され、同年8月1日、麤鹿火が将軍に任命された。

528年11月11日、磐井軍と麤鹿火率いるヤマト王権軍が、筑紫三井郡(現福岡県小郡市・三井郡付近)にて交戦し、激しい戦闘の結果、磐井軍は敗北した。このとき磐井は物部麤鹿火に斬られた。同年12月、磐井の子、筑紫葛子は連座から逃れるため、糟屋(現福岡県糟屋郡付近)の屯倉をヤマト王権へ献上し、死罪を免ぜられた。

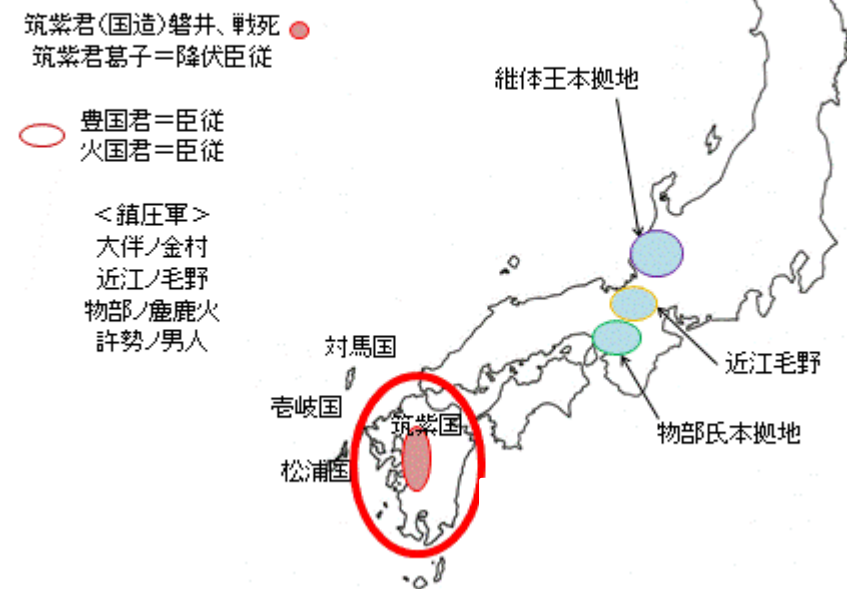
物部麤鹿火によって磐井の乱が平定された後、翌年の529年に、毛野はようやく任那の安羅に赴任し、新羅との間で領土交渉を行った。しかし、毛野は驕慢な振る舞いが多く、新羅・百済両国王を召し出そうとしたが、両者が応じず失敗。逆に両国から攻撃される始末であった。事態を重く見た朝廷から帰還の命令が出されたが、これを無視。乱後の529年3月、530年、再び召還されて応じるも、その帰途対馬で病死した。

(Wikipedia抜粋)



磐井氏一族は当時の主流だったお墓の守神「埴輪」ではなく、石で人や馬を形取った「石人・石馬」を作りました。(好奇心のままに道に迷ったら「両手がない石人」が！@磐井の乱 Net)

527年「筑紫君磐井の乱」



(6世紀～9世紀にかけての倭(大和)朝廷軍。継体朝の古代軍事豪族、Net)

大伴金村－任那4県の割譲

仁賢天皇11年(498年)仁賢天皇の崩御後に大臣・平群真鳥、鮪父子を征討し、武烈天皇を即位させて自らは大連の地位についた。武烈天皇8年(506年)武烈天皇の崩御により皇統は途絶えたが、応神天皇の玄孫とされる彦主人王の子を越前国から迎え継体天皇とし、以後安閑・宣化・欽明の各天皇に仕えた。

『日本書紀』によると継体天皇6年(512年)に高句麗によって国土の北半分を奪われた百済からの要求を入れて任那4県を割譲し、百済と結んで高句麗、新羅に対抗しようとしたが、かえって任那の離反、新羅の侵攻を招いた。継体天皇21年(527年)に発生した磐井の乱では物部麁鹿火を将軍に任命して鎮圧させた。

大伴金村は、安閑、宣化、欽明天皇の時代にも大連として権勢を保ち、屯倉(みやけ)の設置などに努めた。しかし、欽明天皇の代に入ると欽明天皇と血縁関係を結んだ蘇我稲目が台頭、金村の権勢は衰え始める。さらに欽明天皇元年(540年)には新羅が任那地方を併合するという事件があり、物部尾輿などから外交政策の失敗(先の任那4県の割譲時に百済側から賄賂を受け取ったことなど)を糾弾され失脚して隠居する。これ以後、大伴氏は衰退した。

(Wikipedia抜粋+コトバンク抜粋)



(日本書紀・古事記、西東社)

仏教の公伝

538年、百済の聖明王から金銅の仏像一尊と幡キヌガサ・経典が献上された。『日本書記』ではこの年をもって仏教の公伝と記している。

倭国への仏教の実際の伝来は2世紀初め、インドから海路で金官伽耶国に伝わり、そこから筑紫の伊都国に伝来した！



古事記・日本書記、西東社



明日香村教育委員会写真提供



『日本書記』見て歩き

飛鳥寺

奈良県明日香村にある、蘇我馬子建立の日本初の本格的寺院です。6世紀末に建立され、645年には大化の改新にまつわる重要な舞台となりました。12世紀に焼失し、当時から伝わるものとして現在は安居院に本尊の飛鳥大仏が安置されています。

任那の滅亡

【任那の窮状】

『日本書紀』の任那(みまな)についての記述。

新羅の侵攻により、徐々に倭国は朝鮮半島内の勢力圏を失っていきます。きつとこれを読めば、当時の朝鮮半島に支配域を持っていた古代日本人、天皇陛下らの無念の思いが痛いほど伝わってくることでしょう。

【日本への救援要請】

五月八日(552年)、百済・加羅・安羅は、中部徳率木苧今敦(ちゅうほうとくそつもくらこんとん)・河内部安斯比多(こうちべのあしひた)らを遣わして奏上し、「高麗(高句麗のこと)と新羅と連合して、臣の国と任那とを滅ぼそうと謀っています。救援軍を受けて不意を突きたいと思います。軍兵の多少についてはお任せします」といった。

(欽明天皇は)詔して、「今、百済の王、安羅の王、加羅の王、日本府の臣らと共に使いを遣わして、申してきたことは聞き入れた。また任那と共に心を合わせ、力を専らにせよ。そうすれば、きつと上天(あめ)の擁護の福を蒙り、天皇の靈威にあずかれるであろう」といわれた。

【任那の滅亡】

二十三年(562年)春一月、新羅は任那の官家(みやけ)を打ち滅ぼした。総括して任那というが、分けると加羅国(から)、安羅国(あら)、斯二岐国(しにき)、多羅国(たら)、率麻国(そつま)、古嵯国(こさ)、子他国(こた)、散半下国(さんはんげ)、乞金国(こっきん)、稔礼国(にむれ)の合わせて十国である。

夏六月、(天皇は)詔して、「新羅は西に偏した少し卑しい国である。天(きみ)に逆らい無道で、わが恩義に背き、官家をつぶした。わが人民を傷つけ、国郡(くにこおり)を損った。神功皇后は、聡明で天下を周行され、人民をいたわりよく養われた。新羅が困って頼ってきたのを哀れんで、新羅王の討たれそうになった首を守り、要害の地を授けられ、新羅を並み外れて栄えるようひきたてられた。神功皇后は新羅に薄い待遇をされたろうか。わが国民も新羅に別に怨があるわけでない。しかるに新羅は長戟(ながきほこ)、強弩(つよきゆみ)で任那を攻め、大きな牙、まがった爪で人民を虐げた。肝を割き足を切り、骨を曝し屍を焚き、それでも何とも思わなかった。任那は上下共々、完全に料理された。王土の下、王臣として人の粟を食べ、人の水を飲みながら、これをもれ聞いてどうして悼まないことがあろうか。太子・大臣らは助け合って、血に泣き怨をしのぶ間柄である。大臣の地位にあれば、その身を苦しめ苦勞するものであり、先の帝の徳をうけて、後の世を継いだら、胆や腸を抜きしたたらせる思いをしても奸逆をこらし、天地の苦痛を鎮め、君父の仇を報いることが出来なかったら、死んでも子としての道を尽くせなかったことを恨むことになろう」といわれた。

(『日本書紀』より、「(古代朝鮮半島の日本府)任那滅亡」、Net)



任那回復の戦い

欽明15年	聖明王が戦死	この間に新羅は任那諸国を次々に滅ぼしていった。
欽明23年	新羅が任那全域を併合	
7月	紀男麻呂宿禰を朝鮮へ派遣 [副将河辺瓊缶] 新羅軍は白旗を掲げ恭順の意を示したが、これは策略であった。倭軍は油断したところを攻撃され、大敗を喫する。	

【捕虜となった2将】

倭軍の副将であった河辺瓊缶は、愛人の甘美媛を連れてきていたのだが、命欲しさに新羅の将軍に媛を差し出し、非難を浴びる。



将軍のひとり調伊企羅は下半身裸にされた上、故国の方へ尻を向けて「大和の大軍よ、わが尻を食らえ」と言うよう命じられ、逆に北の方へ向けて「新羅の王よ、わが尻をくらえ!」と叫び、斬殺された。

任那回復を目指す戦いは失敗に終わる

蘇我氏の台頭

飛鳥時代

蘇我氏の台頭

蘇我満智

履中天皇2年、平群木菟宿禰や円大使主とともに執政官となる。『古語拾遺』によれば、雄略天皇代、増大する諸国からの貢物に対応すべく、新たに大蔵が興され、麻智が三蔵(斎蔵・内蔵・大蔵)を管理したという(三蔵検校)。この伝承は、蘇我氏が5世紀後半すでに朝廷財政を統括していた史実を伝えている。百済の高官、木菟満致と同一人物か(門脇禎二)

蘇我韓子

『日本書紀』によると、蘇我韓子は、465年3月、雄略天皇の命で紀小弓、大伴談、小鹿火宿禰とともに大将に任じられ、新羅が百済地域に進出して城を奪い対馬海域を押さえて倭国と高句麗との交易を妨害しはじめたことに対し、新羅征伐のために朝鮮半島へ渡った。新羅王を一時敗走させるほど奮戦した中で小弓は同月に死去してしまう。代わりにやってきたのが、小弓の息子紀大磐だが、大磐は父の兵馬を引きつぐに飽き足らず、小鹿火宿禰の兵馬と船官を配下に収めて、小鹿火宿禰と対立した。小鹿火宿禰は、大磐が韓子の兵馬も奪うつもりであると韓子に警告し、彼も大磐と対立するようになった。それを知った百済の王は、二人の仲を保とうと、大磐と韓子を百済との国境まで呼び出した。その道中、河にさしかかり馬に水を飲ませたところで、韓子が大磐を後ろから弓で射た。しかし矢は大磐の馬の鞍に当たり、とっさに大磐が射返したところ、その矢が当たった韓子は落馬して河でおぼれ死んだ、とされる。

蘇我氏全盛

稲目の代になると、過去に大臣を出していた葛城氏や平群氏は既に本宗家の滅亡により勢いをなくしており、蘇我氏は大連の大伴氏と物部氏にならぶ三大勢力の一角となり、やがて大伴金村が失脚すると、大連の物部(尾輿)と大臣の蘇我(稲目)の二大勢力となる。また、過去の葛城氏や後の藤原氏同様、娘蘇我堅塩媛、小姉君を欽明天皇に嫁がせることにより天皇家の外戚となっていく。

稲目は欽明天皇とほぼ同時期に没し、二大勢力の構図は次代の蘇我馬子まで引き継がれるが、用明天皇崩御後に後継者をめぐると争いがあつた。蘇我氏は、小姉君の子ながらも物部氏に擁立されていた穴穂部皇子を暗殺し、戦いで物部守屋を討ち滅ぼすと、その後は蘇我氏以外からは大連に任じられる者も出ず、政権は蘇我氏の一極体制となる。

ここから崇峻天皇の暗殺や、推古天皇への葛城県の割譲の要求、蝦夷による天皇をないがしろにするふるまい、蘇我入鹿による上宮王家(山背大兄王)の討滅、境部摩理勢の失脚などの専横ぶりが伝えられており、蘇我氏三代にわたって権力を欲しいがままにしたとされている。

しかし馬子の死後に、蘇我氏に対する皇族や諸豪族の反感が高まって蘇我氏の政治基盤が動揺し、それを克服しようとして入鹿による強権政治に繋がった、という見方も少なからずある。これは『日本書紀』等による蘇我氏に否定的な記述に対する反論である。

東漢氏(やまとのあやうじ)

(最先端の統治制度・技術をみにつけていた氏族)

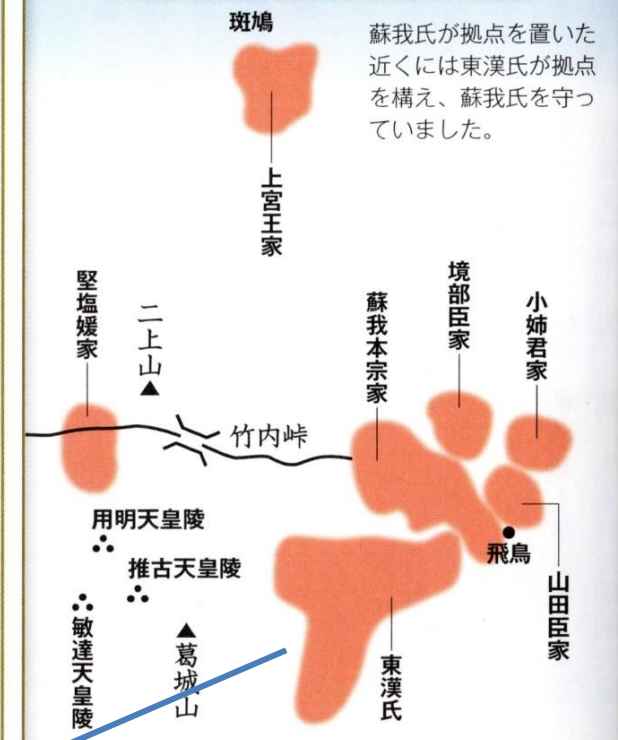
秦(はた)氏と並ぶ渡来系の有力大氏族。姓(かばね)は初め直(あたえ)。東漢は西漢(かわちのあや)に対する称であるが、同族ではない。応神天皇20年に後漢霊帝の裔という阿知使主(あちのおみ)が17県の党類を率いて渡来したと伝える。(コトバンク)

蘇我入鹿は聖徳太子の子の山背大兄王(やましるおおえのおう)を斑鳩に襲撃した。王は一旦は逃れるものの、自分の拳兵によって戦いが起き、人々が死ぬのは忍びないとして、斑鳩寺に戻り、妻子とともに自害して果てたのでした。(古事記・日本書記、西東社)

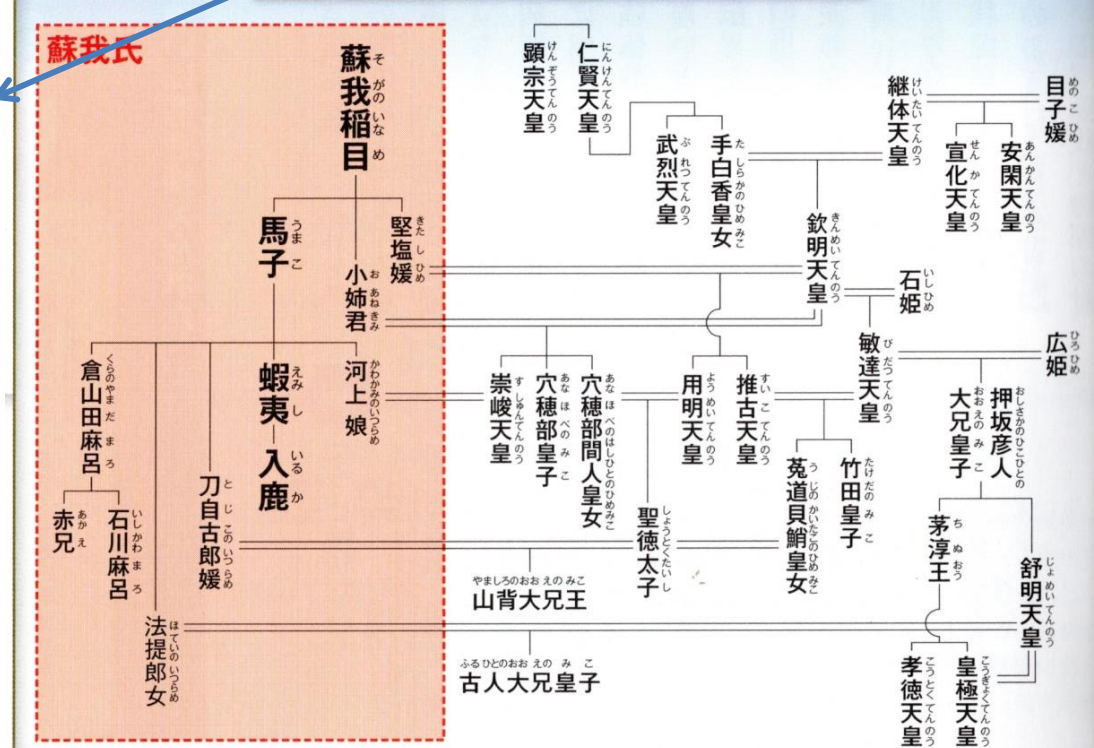
歴代大臣と大連

天皇	大臣	大連
雄略	平群臣真鳥	大伴連室屋 物部連目
清寧	平群臣真鳥	大伴連室屋
顕宗	平群臣真鳥	大伴連室屋
仁賢	平群臣真鳥	物部鹿鹿火
武烈	許勢男人	大伴連金村 物部鹿鹿火
継体	許勢男人	大伴連金村 物部鹿鹿火
安閑		大伴連金村 物部鹿鹿火
宣化	蘇我稲目宿禰 (阿倍大麻呂(大夫))	大伴連金村 物部鹿鹿火 物部尾輿
欽明	蘇我稲目宿禰	(大伴連金村) 物部鹿鹿火 物部守屋
敏達	蘇我馬子宿禰 (中臣勝海連(大夫))	物部守屋
用明	蘇我馬子宿禰 (中臣勝海連(大夫))	物部守屋
崇峻	蘇我馬子宿禰 (卿・大夫之并位亦如故)	
推古	蘇我馬子宿禰 蘇我臣蝦夷	

蘇我氏支族の配置



蘇我氏の系譜



古事記・日本書記、西東社

仏教を巡る蘇我・物部の争い(衣摺の戦い)

大陸から伝わった仏教を受け入れるかどうかを巡り、反対(排仏)派の物部尾輿(おこし)と、導入(崇仏)派で渡来系の子孫ともいわれる蘇我稲目が争った6世紀の崇仏論争。

「日本書紀」によれば、552年、百済の使者から仏教の説明を受けた欽明天皇は「これほど素晴らしい教えを聞いたことはない」と喜び、群臣に「礼拝すべきか」と問うたところ、蘇我稲目は賛成し、物部尾輿は「外国の神を礼拝すれば国神のたたりを招く」と反発した。そこで天皇が稲目に仏像を預けて礼拝させたところ、疫病が流行したため、尾輿は「仏教を受け入れたせいだ」と主張。寺を燃やし、仏像は難波に流し捨てたという。

第2段階は585年、稲目の息子にあたる馬子は寺院を建立し、仏像を祀(まつ)っていたが、疫病が流行したため、尾輿の息子にあたる守屋が敏達天皇に仏教受容をとりやめるよう進言。馬子の建てた寺に火をつけ、仏像を流し捨てる。用明天皇即位後も両氏は仏教を巡って対立するが、やがて諸豪族を率いた馬子が守屋を討ち滅ぼし、寺院の建立が盛んに行われるようになったという。

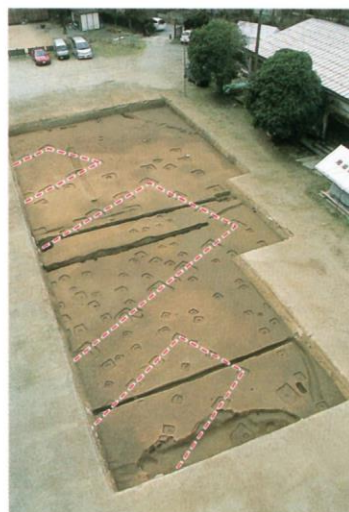
(蘇我氏と物部氏の仏教抗争、日本書紀の説に難あり? 朝日新聞デジタル)

飛鳥時代

蘇我・物部の争い



石舞台古墳
もとは上円下方墳であったと推定される。積み上げられた巨石を使用した玄室の長さは7.7m。7世紀前半につくられ、「日本書紀」にある、蘇我馬子の「桃園墓」といわれる。



島庄遺跡
『日本書紀』によると、蘇我馬子は「庭の中に小なる嶋を池の中に興く」大邸宅を「飛鳥河の傍」に建てたとされている。石舞台古墳近くにある島庄遺跡から、柱穴が一辺1mもある大型建造物跡が出土し、馬子邸宅跡と推定されている。

--- 7世紀前半の建造物跡
明日香村教育委員会資料

蘇我氏の全盛期を築いた豪腕政治家

蘇我馬子の登場

物部氏を滅ぼして実権を握った蘇我馬子は、日本最初の本格的な伽藍配置をもつ大寺院・飛鳥寺を建立する。さらに池をもつ庭園がある大邸宅を建てて、自らの強大な権力を示した。馬子の墓といわれる石舞台古墳は、その大きさから、ここに絶大な権力者が埋葬されたことを物語っている。

飛鳥寺釈迦如来像

推古天皇がつくらせた、現存する日本最古の仏像。蘇我馬子が建立した飛鳥寺(→P.103)の本尊。鎌倉時代の火災などで顔の上半分と右手の指以外は破損し、その後補修されている。

立ち上がれば、仏陀の身長と同じ一丈六尺(約4.8m)になる丈六仏(じょうろくぶつ)。



(図説 古代史、成美堂出版)

聖徳太子(厩戸皇子)

・574年、橘豊日皇子と穴穂部間人皇女との間に生まれた。橘豊日皇子は蘇我稲目の娘堅塩媛を母とし、穴穂部間人皇女の母は同じく稲目の娘・小姉君であり、つまり厩戸皇子は蘇我氏と強い血縁関係にあった。厩戸皇子の父母はいずれも欽明天皇を父に持つ異母兄妹であり、厩戸皇子は異母のキョウダイ婚によって生まれた子供とされている。幼少時から聡明で仏法を尊んだと言われ、様々な逸話、伝説が残されている。

・585年、敏達天皇崩御を受け、父・橘豊日皇子が即位した(用明天皇)。この頃、仏教の受容を巡って崇仏派の蘇我馬子と排仏派の物部守屋とが激しく対立するようになっていた。

・587年、用明天皇は崩御(死去)した。皇位を巡って争いになり、馬子は、豊御食炊屋姫(敏達天皇の皇后)の詔を得て、守屋が推す穴穂部皇子を誅殺し、諸豪族、諸皇子を集めて守屋討伐の大軍を起こした。厩戸皇子もこの軍に加わった。討伐軍は河内国渋川郡の守屋の館を攻めたが、軍事氏族である物部氏の兵は精強で、稲城を築き、頑強に抵抗した。討伐軍は三度撃退された。これを見た厩戸皇子は、白膠の木を切って四天王の像をつくり、戦勝を祈願して、勝利すれば仏塔をつくり仏法の弘通に努める、と誓った。討伐軍は物部軍を攻め立て、守屋は迹見赤檣に射殺された(衣摺の戦い)。軍衆は逃げ散り、大豪族であった物部氏は没落した。戦後、馬子は泊瀬部皇子を皇位につけた(崇峻天皇)。しかし政治の実権は馬子が持ち、これに不満な崇峻天皇は馬子と対立した。

・592年、馬子は東漢駒に崇峻天皇を暗殺させた。その後、馬子は豊御食炊屋姫を擁立して皇位につけた(推古天皇)。天皇家史上初の女帝である。厩戸皇子は皇太子となり、馬子と共に天皇を補佐した。同年、厩戸皇子は物部氏との戦いの際の誓願を守り、摂津国難波に四天王寺を建立した。

・594年、仏教興隆の詔を発した。

・595年、高句麗の僧慧慈が渡来し、太子の師となり「隋は官制が整った強大な国で仏法を篤く保護している」と太子に伝えた。

・600年、新羅征討の軍を出し、調を貢ぐことを約束させる。

・601年、斑鳩宮を造営した。

・602年、再び新羅征討の軍を起こした。同母弟・来目皇子を将軍に筑紫に2万5千の軍衆を集めたが、渡海準備中に来目皇子が死去した(新羅の刺客に暗殺されたという説がある)。後任には異母弟・当麻皇子が任命されたが、妻の死を理由に都へ引き揚げ、結局、遠征は中止となった。

・603年、いわゆる冠位十二階を定めた。氏姓制ではなく才能を基準に人材を登用し、天皇の中央集権を強める目的であったと言われる。

・604年、十七条憲法を制定した。

・605年、斑鳩宮へ移り住んだ。

・607年、小野妹子、鞍作福利を使者とし随に国書を送った。翌年、返礼の使者である裴世清が訪れた。日本書紀によると裴世清が携えた書には「皇帝 倭皇に問ふ」とある。これに対する返書には「東の天皇 西の皇帝に敬まひて白す」とあり、隋が「倭皇」とした箇所を「天皇」としている。

・615年までに三経義疏を著した。

・620年、厩戸皇子は馬子と議して『国記』、『天皇記』などを選んだ。

・622年、斑鳩宮で倒れた厩戸皇子の回復を祈りながらの厩戸皇子妃・膳大郎女が2月21日に没し、その後を追うようにして翌22日、厩戸皇子は亡くなった。

(Wikipedia抜粋)

三頭政治が生んだ政策



仏教文化年表

年	事項
欽明 13年10月	百済の聖明王を介して仏教が伝わる。
敏達 6年11月	百済王、経論・禅師・比丘尼などを送る。
敏達 8年10月	新羅、「任那の調」とともに仏像を送る。
敏達 12年	日羅を百済より召還する。
敏達 13年9月	百済より弥勒石造1体と仏像1体が送られる。
崇峻 元年	百済より、仏舎利がもたらされ、蘇我馬子は百済に修行僧を送る。
推古 3年5月	高句麗の僧慧慈が来日し、厩戸皇子の師となる
推古 3年	百済僧慧聰来日する。
推古 10年閏10月	百済僧観勒が来日し、曆本・天文地理書などをもたらす。
推古 13年4月	高句麗の大興王が日本の仏像製作に黄金を出資する。
推古 16年9月	東漢直福因ら、8人が隋に留学する。
推古 20年	百済の味摩之が来日し、伎楽を伝える。
推古 23年11月	高句麗の僧慧慈、帰国する。
推古 24年7月	新羅、仏像を贈る。
推古 31年7月	新羅、仏具一式・仏舎利などを贈る。

参考:『歴史群像シリーズ 飛鳥王朝史』(学習研究社)

古事記・日本書紀、西東社

推古朝による中央集権国家づくり

推古天皇のもと、蘇我馬子とともに国政のかじ取りを担った厩戸王(聖徳太子)は、遣隋使が見聞してきた隋の進んだ文化や制度を参考に、大王(天皇)中心の中央集権的国家体制を目指して、本格的な改革に着手していった。

603年に定められた冠位十二階は、従来の世襲制の氏姓制度に代わり、個人の功績によって人材を登用することを目的とした位階制度。大臣の蘇我本宗家と地方豪族を除く諸豪族を、朝廷の官僚として序列化した。

翌604年には、官僚として朝廷に仕える豪族が守るべき道徳的規範を示した「憲法十七条」が制定された。その第一条「和を以て尊しとなし」は今日に於いても、日本人の集団における規範原理としてしばしば指摘される。また、第3条の「君をば即ち天とす、臣をば即ち地(つち)とす」は、大王中心の国家秩序を表明したものである。

(図説 古代史、成美堂出版)

官僚としての心構えを説いた

憲法十七条

豪族を官僚として再編成しようとした厩戸王(聖徳太子)は、604年、官僚の道徳的規範として憲法十七条を制定したとされる。しかし、条文のなかに、当時使われていなかった語句があることなどから、憲法十七条は『日本書紀』編纂時の創作とする説もある。

一に曰く、和を以て貴しとなし、忤ふること無きを宗とせよ。(略)

二に曰く、篤く三宝を敬へ。三宝とは仏法僧なり。(略)

三に曰く、詔を承りては必ず謹め。君をば則ち天とす、臣をば則ち地とす。(略)

四に曰く、群卿百寮、礼を以て本とせよ。其れ民を治むるが本、要す礼にあり。(略)

五に曰く、響を絶ち、欲を棄て、明かに訴訟を弁めよ。(略)

六に曰く、悪を懲らし善を勸むるは、古の良き典なり。(略)

七に曰く、人各任く有り、掌ること濫れざるべし。(略)

八に曰く、群卿百寮、早く朝りて晏く退てよ。(略)

九に曰く、信は是れ義の本なり。(略)

十に曰く、心を絶ち、驕を棄て、人の違ふことを怒らざれ。人皆心あり。(略)

十一に曰く、功と過を明らかに察し、賞し罰ふることを必ず当てよ。(略)

十二に曰く、国司、国造、百姓に對することなけれ。国に君非し、民に兩の主なし。率士の兆民は、王を以て主となす。(略)

十三に曰く、語の官に任せる者は、同じく職掌を知れ。(略)

十四に曰く、群卿百寮、嫉み妬むこと有る無かれ。(略)

十五に曰く、私を背きて公に向くは、是れ臣が道なり。(略)

十六に曰く、民を使ふに時を以てするは、古の良き典なり。(略)

十七に曰く、それ事は独り断むべからず。必ず衆と論ふべし。(略)

憲法十七条(読み下し文)

誠実に働くこと、大王を絶対視すること、仏教を敬うこと、などが主な内容。

実力主義を掲げた新制度

冠位十二階

603年、百濟をはじめとする朝鮮三国の制度を参考にして、冠位十二階が制定された。官僚の地位を大徳から小智までの12に分け、個人の實力に見合った地位を授けるといふもの。功績により昇進することもできたが、世襲することはできない。豪族による地位の世襲を打破しようとする意図があったが、蘇我本宗家や地方豪族は制度の枠外とされた。



推古朝の官人の復元模型(大阪府立近つ飛鳥博物館)。



冠位十二階の冠の色
徳、仁、礼、信、義、智の6つの徳目を、それぞれ大小に分けて12階とし、冠の色で位階を識別した。
○数字は位階の高い順を表す。白の濃淡をどう表現したかは不明。

「聖徳太子」の再評価

古代史の英雄としてさまざまな伝説をもつ聖徳太子だが、「聖徳太子」という名前は後世につけられたもので、聖人として脚色された部分が多い。歴史上の人物として評価し直すため、近年の高校教科書では「厩戸王(聖徳太子)」という表記が一般的になっている。いずれは、聖徳太子という呼び名は教科書から消えるだろうといわれている。

(図説 古代史、成美堂出版)

飛鳥文化

飛鳥時代

飛鳥文化



不思議な形をした石造物が点在

飛鳥の石造物

飛鳥地方には、飛鳥時代につくられたといわれる石造物が点在する。多くは花崗岩でできていて、渡来文化の影響を受けているとされるが、つくられた目的や用途はわかっていない。

亀形・小判形石造物

2000年に発見された遺構。小判形石造物は水をためる水槽で、底から亀形石造物の顔部分に水が注がれ、尾部分から流れ出すしくみ。



酒船石

はじめ醸造施設と解釈されたことから「酒船石」の名がつけられた。石の上面に溝でつながれた円形のくぼみが刻まれており、液体を流すしかけと考えられる。



猿石

猿の顔に似ていることから「猿石」とよばれる。皇極天皇の母・吉備姫王の墓の柵内に4体が並んでいる。写真はその一つ「山王権現」。



男性は盃を口にあてていた。

石人像

男女2体を1つの石に彫った像。底から穴が通っていて、男女それぞれの口から水が噴き出るしくみになっている。

益田岩船

飛鳥地方最大の石造物で、高さは5mもある。用途は明らかになっていないが、占星台とする説、未完成の石室だとする説などがある。



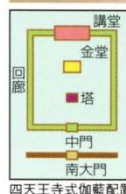
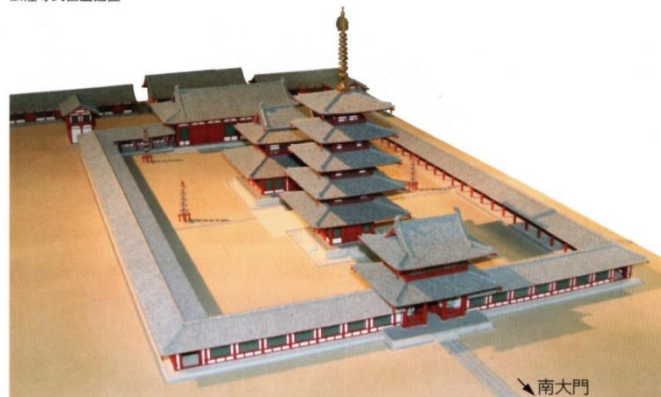
『日本書紀』見て歩き
四天王寺
大阪市天王寺区にあります。6世紀末、物部守屋追討の際、四天王に戦勝祈願した厩戸皇子が建立しました。1400年にわたって幾多の火災・戦災を清りぬけた寺は、太子の霊場、先祖供養の寺として現在も信仰されています。

四天王寺写真提供



法隆寺(奈良県斑鳩町)

607年建立
厩戸王(聖徳太子)が建立したと伝えられる寺院。斑鳩寺ともいう。四天王寺式の伽藍配置だったが670年に焼失、7世紀末ごろ再建されたといわれる(→P.99)。金堂と塔を東西に並べる伽藍配置(仏舎利信仰と仏像信仰が並列)で、世界最古の木造建築物として有名。



四天王寺(大阪府大阪市)

593年建立
厩戸王(聖徳太子)が物部守屋討伐の際、勝利したら寺院を建立すると誓願して建てられた。中門、塔、金堂、講堂を南北一直線上に並べる伽藍配置が特徴。現在の伽藍は戦後に再建されたもの。写真は復元模型(大阪府立近つ飛鳥博物館)。

古墳に代わる巨大な建造物 大寺院の出現

推古天皇の時代になり、渡来人の中で信仰されていた仏教が、蘇我氏や厩戸王(聖徳太子)の尽力で広く浸透していった。諸豪族は、古墳に代わる自身の権威の象徴として、次々と大寺院を建立した。これを氏寺という。伽藍の配置は釈迦の遺骨(仏舎利)を祀る仏塔をどのように扱うかで、年代により変化していった。



飛鳥寺(奈良県明日香村)

588年造営開始
日本初の本格的寺院。蘇我馬子が建立した蘇我氏の氏寺で、法興寺、本元興寺ともいう。一塔三金堂の形式は仏舎利信仰が中心だったことを表す。本尊の釈迦如来像(→P.87)は鞍作鳥の作品として知られる。現在の本堂は江戸末期に再建されたもの。写真は復元模型(奈良文化財研究所)。

飛鳥文化の仏像

当時の仏像は「北魏様式」と「南梁様式」に分類される。「北魏様式」は中国北朝の形式を受け継いだ鞍作鳥(止利仏師)の系統による仏像。力強く端正で、厳格な表情のなかに微笑をたたえる。「南梁様式」は中国南朝や百済の影響を受け、柔和で崇高な表情をしているのが特徴である。



北魏様式の仏像
飛鳥寺釈迦如来像、法隆寺金堂
釈迦三尊像が代表。



南梁様式の仏像
法隆寺百済観音像、広隆寺半迦
思惟像が代表。

法隆寺金堂壁画の焼失

かつて法隆寺金堂の壁は、白鳳期の再建時制作とされる壁画で飾られていた。日本の仏教絵画の代表として世界的にも有名だったが、1949年1月26日、壁面模写中の失火により、その大半が焼損してしまった。当時、金堂をはじめとする建築物や仏像は、空襲による焼失を防ぐため解体・疎開中だったため、金堂の全焼や仏像の焼損は免れることができた。まさに不幸中の幸いであった。

コラム

秦氏

出自

『新撰姓氏録』によれば秦の始皇帝の末裔で、応神14年百済から日本に帰化した弓月君(融通王)が祖とされるが、その伝承は論証されていないが、次の説に基づく。「秦人が朝鮮半島に逃れて建てた秦韓(辰韓)を構成した国の王の子孫。新羅の台頭によりその国が滅亡した際に王であった弓月君が日本に帰化した(太田亮)」。

歴史

日本へ渡ると初め豊前国に入り拠点とし、その後は中央政権へ進出していった。大和国のみならず、山背国葛野郡(現在の京都市右京区太秦)、同紀伊郡(現在の京都市伏見区深草)や、河内国讃良郡(現在の大阪府寝屋川市太秦)、摂津国豊嶋郡など各地に土着し、土木や養蚕、機織などの技術を発揮して栄えた。アメノヒボコ(天之日矛、天日槍)説話のある地域は秦氏の居住地域と一致するという平野邦雄の指摘もある。難波津の西成・東成郡には秦氏、三宅氏、吉氏など新羅系の渡来人が多く住み、百済郡には百済系の渡来人が住んだ。

山背国からは丹波国桑田郡(現在の京都府亀岡市)にも進出し、湿地帯の開拓などを行った。雄略天皇の時代には秦酒公(さけのきみ)が秦氏の伴造として各地の秦部・秦人の統率者となり、公の姓を与えられた。欽明天皇の時代には秦大津父(おおつち)が伴造となって、大蔵掾に任ぜられたといい、本宗家は朝廷の財務官僚として活動したらしいとされる。また、これ以降秦氏の氏人は造姓を称したが、一部は後世まで公姓を称した。

秦氏の本拠地は山背国葛野郡太秦が分かっているが、河内国讃良郡太秦にも「太秦」と同名の地名がある。河内国太秦には弥生中期頃の高地性集落(太秦遺跡)が確認されており、付近の古墳群からは5～6世紀にかけての渡来人関係の遺物が出土(太秦古墳群)している。秦氏が現在の淀川の治水工事として茨田堤を築堤する際に協力したとされ、現在の熱田神社(大阪府寝屋川市)が広隆寺に記録が残る河内秦寺(廃寺)の跡だったとされる調査結果もある。伝秦河勝墓はこの地にある。また、山背国太秦は秦河勝が建立した広隆寺があり、この地の古墳は6世紀頃のものであり、年代はさほど遡らないことが推定される[要出典]。秦氏が現在の桂川に灌漑工事として葛野大堰を築いた点から山背国太秦の起点は6世紀頃と推定される。

山背国においては桂川中流域、鴨川下流域を支配下におき、その発展に大きく寄与した。山背国愛宕郡(現在の京都市左京区、北区)の鴨川上流域を本拠地とした賀茂氏と関係が深かったとされる。秦氏は松尾大社、伏見稻荷大社などを氏神として祀り、それらは賀茂氏の創建した賀茂神社とならび、山背国でももっとも創建年代の古い神社となっている。秦氏の末裔はこれらの社家となった。関東にも渡来人がかなり入ってきたようであり、秦氏は相模原にも上陸し、現在の秦野市の地域に入植してその名を現在に留めている。平安遷都に際しては葛野郡の秦氏の財力・技術力が重要だったとする説もある。

(秦氏-秦氏の概要 Weblio辞書)

景教との関係

佐伯好郎は明治41年に、秦氏は原始キリスト教あるいは景教(ネストリウス派キリスト教)を信仰するユダヤ人一族であったとする説を発表した。秦一族が渡来する6世紀以前にすでに唐に東方キリスト教の「景教」が伝わっており、その寺院は大秦寺と呼ばれていたためである。また、秦の始皇帝の父親が碧眼であったと言われており、中東から移住してきたという説も存在し、現イラクやイラン(古代ペルシャ)、アラム地方、エラム地方にはゾロアスター教などユダヤ教やキリスト教の前身となる宗教が存在しており、古代のユダヤ人も住んでいた(バビロニアを参照)。ペルシャ、唐、日本の間ではシルクロードを通じて交易や人の移動があったと考えられるので、このような説が浮上してくる所以である。

(Wikipedia抜粋)

神道祭祀あるいは神社様式とユダヤ教祭祀・様式との類似点、あるいは聖徳太子が厩戸皇子といわれ、キリストの生誕を想起させること等の事は、原始キリスト教または景教を日本に持ち込んだ秦氏に因むものとの説があるが、詳細な検証が待たれる。

秦河勝は秦氏の族長的人物であったとされ、聖徳太子の側近として活躍した。



秦河勝・『前賢故実』より



広隆寺 弥勒菩薩

漢氏(あやうじ)

漢氏には東漢氏(やまとのあやうじ)と西漢氏(かわちのあやうじ)がある。

東漢氏は『記・紀』の応神天皇の条に渡来したと記されている漢人系の阿知使主を氏祖とする帰化系氏族集団である。東漢氏はいくつもの小氏族で構成される複合氏族で、最初から同族、血縁関係にあったのではなく、相次いで渡来した人々が、共通の先祖伝承に結ばれて次第にまとまっていったと思われる。阿知使主の末裔の漢氏は飛鳥に近い檜隈を拠点とした。

東漢氏は、先来の秦氏と同じく漢土由来の製鉄技術をもたらしたと考えられている。また、『記紀』等の記録から土木建築技術や織物の技術者が居た事を窺い知れる。東漢氏の一族に東文氏があり、7世紀から8世紀頃には内蔵省・大蔵省などの官人を輩出している。尚、阿智使主の直系の子孫は天武天皇より「忌寸」の姓を賜り、他の氏族とは姓で区別がなされることとなった。「掬」の代に東漢直姓を賜った。

また、東漢氏は軍事力にも秀で、蘇我氏の門衛や宮廷の警護などを担当している。『肥前国風土記』によれば、602年の新羅征討計画の際には兵器の製作を担当した。崇峻天皇暗殺の際にも東漢氏の東漢駒(東漢直駒)が暗殺の実行役となっており、蘇我氏の与党であったが、壬申の乱の際には、蘇我氏と袂を分かって生き残り、奈良時代以降も武人を輩出し平安時代初期には蝦夷征討で活躍した坂上氏の坂上苺田麻呂・田村麻呂親子が登場する。

西漢氏は河内に本拠を持っていた漢氏で西漢氏は王仁の後裔を称する。百済系の西文氏・西書氏との関連が示唆され、織物工芸に長けていた。西漢氏は王仁の後裔を称し、当初直(あたい)であったが、683年に連(むらじ)、2年後に忌寸(いみき)の姓(かばね)が下賜された。

(Wikipedia抜粋)



(於美阿志神社と檜隈寺は奈良県高市郡明日香村大字檜前にある東漢氏の氏神・氏寺である。東漢氏は飛鳥時代の蘇我氏を支えた渡来系の氏族として知られる。Ookuninushiden.com)

642年(皇極元) 皇極が即位、小墾田宮に遷都。
(百済が新羅の諸城を攻める。泉蓋蘇文が高句麗でクーデターを起こす。)

643年(皇極2) 飛鳥板蓋宮へ遷都。蘇我入鹿、斑鳩宮を襲い、山背大兄王(聖徳太子の子)を自殺させ、上宮王家を滅亡させる。
(百済が扶余豊璋らを倭に送る。新羅が唐に援軍を請う。)

645年(大化元) 中大兄皇子・中臣鎌足ら、蘇我入鹿を宮中で暗殺する。蘇我蝦夷自殺し、蘇我本家滅亡(乙巳の変)。軽皇子が即位、孝徳天皇となる。東国国司を派遣し、校田・造籍を命じる。難波豊碕宮へ遷都。
(唐が高句麗に総攻撃を開始)

646年(大化2) 改新の詔を宣する。(大化の改新) 薄葬令、品部廃止の詔が出される。

649年(大化5) 冠位19階を制定する。右大臣、蘇我倉山田石川麻呂自殺。

650年(白雉2) (唐の高宗が百済・高句麗に新羅との和平を命じる)

652年(白雉3) (百済・高句麗が新羅に侵攻)

653年(白雉4) 遣唐使を送る。中大兄皇子、幸徳らを難波宮に残し、飛鳥に移る。

654年(白雉5) 遣唐使を送る。孝徳天皇難波宮で没する。

655年(齊明元) 皇極天皇重祚し、齊明天皇となる。飛鳥板蓋宮が焼亡、飛鳥河原宮に遷都。

656年(齊明2) 後飛鳥岡本宮へ遷都。齊明、多武峰に両槻宮を建立する。

658年(齊明4) 阿部比羅夫が水軍を率いて蝦夷(日本海側・北海道)を討つ。有馬皇子(孝徳子)を謀反の罪で処刑。
(唐が高句麗へ派兵)

659年(齊明5) 遣唐使を送る。

660年(齊明6) (百済の鬼室福信らが救援と扶余豊璋の帰国を要請)
(唐・新羅が百済を滅ぼす)

661年(齊明7) 齊明、百済救援のため北九州へ、しかし朝倉宮で没する。中大兄皇子が称制す。

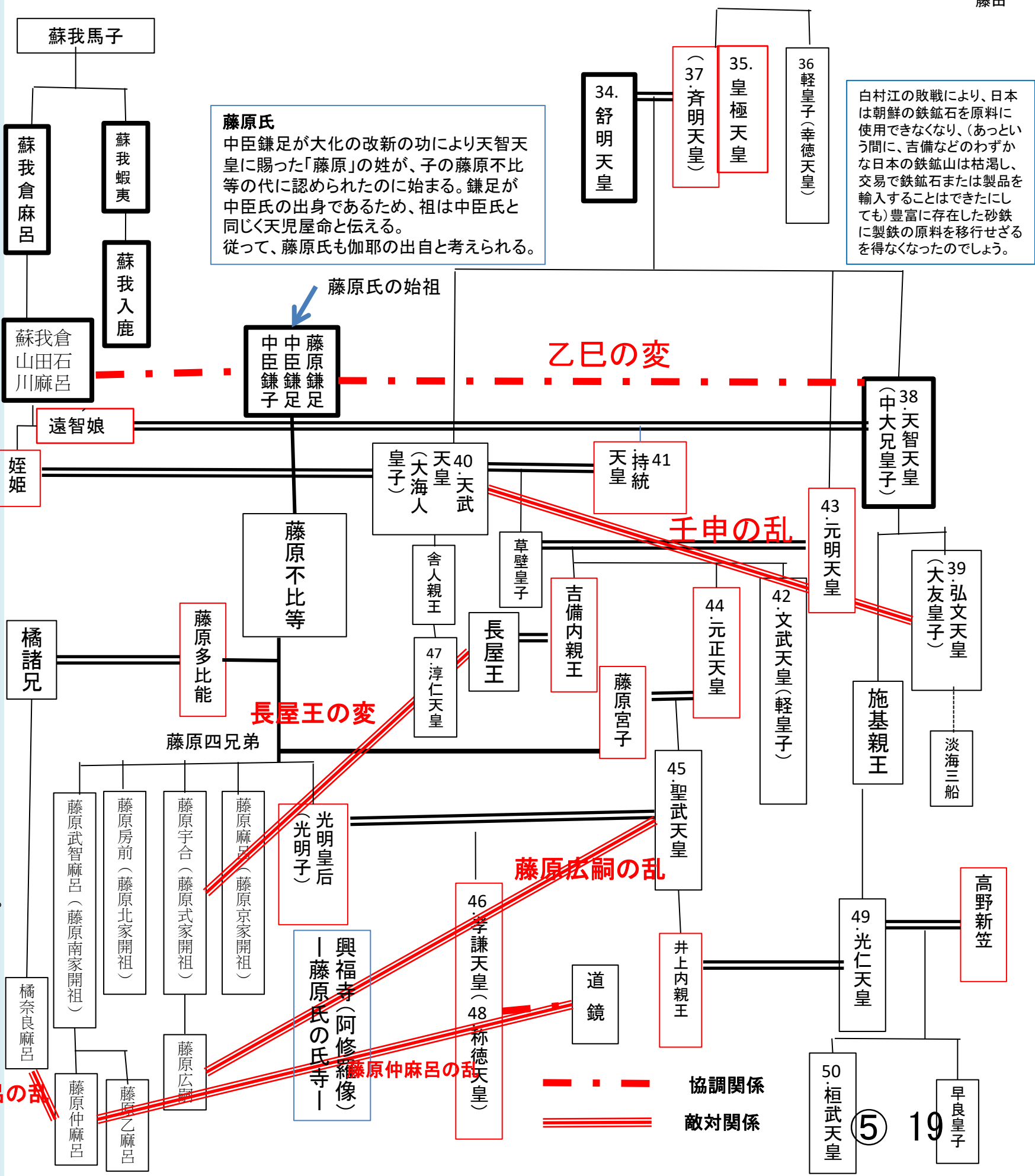
663年(天智2) 新羅へ2万7千の軍を派遣するも、白村江の戦(はくすきのえのたたかい)で大敗する。
(百済王子豊璋が謀反の疑いで鬼室福信を処刑)

664年(天智3) 冠位26階を制定。兵士・民部・家部の制「甲氏の宣」を施行。唐の使者郭務悰が来日。対馬、壱岐、筑紫に防人を配置し、筑紫に水城を築く。

665年(天智4) 大宰府周辺に朝鮮式山城を造営。唐の使者郭徳高が来日。

667年(天智6) 大津の宮に遷都する。
(唐・新羅が高句麗へ)

668年(天智7) 天智が即位する。
(高句麗が滅亡する)



飛鳥時代

- 669年(天智8) 新羅の使者が来日する。藤原の鎌足が没する。遣唐使送る。
- 670年(天智9) 全国的に戸籍を作る(庚午年籍)。(新羅が旧百済領に侵攻)
- 671年(天智10) 近江令を施行。太政官制開始。唐の使者郭務悰が来日 天皇没す。
- 672年(天武元) 大海人皇子が兵を起こす(壬申の乱)。近江朝廷軍大敗し、大友皇子自殺。
- 673年(天武2) 天武、飛鳥浄御原宮で即位。
- 675年(天武4) 部曲廃止の詔を發布。
- 676年(天武5) 封土制を改訂。(唐が安東軍護符を平壤から移転 新羅、朝鮮半島を統一)
- 681年(天武10) 飛鳥浄御原令の編纂を開始する。草壁皇子を皇太子とする。「帝紀」「旧辞」などの筆録・編集(日本書記)開始の詔。「禁式92条」の制定。日本と天皇の称号の使用。藤原不比等、草壁皇子を補佐。
- 684年(天武13) 天武が後の藤原京を巡行。八色の姓の制定。
- 685年(天武14) 四十八階冠位制を施行。
- 686年(朱雀元) 天武が没する。大津皇子の謀反事件。
- 689年(持統3) 草壁皇子が没する。庚寅年籍の作成開始。
- 690年(持統4) 持統が即位する。飛鳥浄御原管制を施行。戸令により、庚寅年籍を作る。(則天武后が即位)
- 694年(持統8) 藤原京へ遷都。
- 696年(持統10) 高市皇子が没する。
- 697年(文武元) 持統が譲位し、文武が即位。(渤海が建国する)
- 701年(大宝元) 粟田真人らを30年ぶりに遣唐使として送る。大宝律令を施行。この頃、国号日本制定か？
- 703年(大宝2) 持統が没する。
- 707年(慶雲元) 藤原不比等に200戸の封土を与える。文武が没し、元明が即位。
- 708年(和銅元) 武蔵国から銅を献上する。改元する。和同開珎を発行する。
- 710年(和銅3) 平城京に遷都する。
- 712年(和銅5) **古事記、太朝臣安萬侶によって献上さる。(唐、玄宗即位)**
- 713年(和銅6) 諸国に「風土記」の編纂を命じる。
- 714年(和銅7) 首皇子が立太子になる。
- 715年(霊亀元) 元明が譲位して、元正が即位。
- 717年(霊亀2) 多治比県守、藤原宇合らを遣唐使として送る。
- 718年(養老2) 養老律令が完成。
- 720年(養老4) **舍人親王らが「日本書記」を奏上。藤原不比等没する。**
- 721年(養老5) 元明が没する。
- 724年(神亀元) 元正が譲位し、聖武が即位する。

追加年表

- 729年 長屋王の変
- 740年 藤原広嗣の乱。藤原広嗣が政権への不満から九州の大宰府で挙兵したが、官軍により鎮圧さる。
- 749年 東大寺の盧舎那仏像の鑄造が完了(長登銅山(山口県美祢市)より銅供給)
- 756年 橘奈良麻呂の乱
- 755-763年 唐で安祿山の乱
- 764年 藤原仲麻呂の乱

山背大兄王襲撃

皇極の御代になると、蘇我氏の専横が目立つようになる。蝦夷は入鹿を勝手に大臣にする。入鹿は舒明天皇を擁立して以来、蘇我氏と対立してきた聖徳太子の子、山背大兄王を斑鳩に襲撃した。王は一旦は逃れるものの、自分の挙兵によって戦が起き、人々が死ぬのは忍びないとして、斑鳩に戻り、妻子ともに自害して果てた。

この事件により蘇我氏の権勢はますます高まり、激化する横暴と若い入鹿の強硬な政治姿勢に次第に朝廷の中で孤立を深めていきました。

自害する山背大兄王一家



古事記・日本書記 西東社

高まる改革への期待

緊迫する東アジア情勢

- 唐の成立
- 朝鮮半島の動乱

国内の制度疲労

- 時代の変化とともに、伴造・部民制が行詰る



孤立する蘇我氏

蘇我氏の専横

- 祖廟を葛城の高宮に建てて、八佾の舞を行なった。
- 民を徴発して、蝦夷・入鹿の墓を造り、大陵・小陵と呼んだ。
- 甘樫丘に邸宅を建て、蝦夷の家を上宮門、入鹿の家を下宮門とした。
- 子どもたちを皇子と呼んだ。

国号「日本」制定(701年頃か)。第8回遣唐使(702年)で、外交上正式に「日本」を使用。「日本」は「任那」と同音・同義語！

天智(鎌足補佐)

乙巳の変

乙巳の変

乙巳の変(いっしのへん・おっしのへん)は中大兄皇子(天智天皇)、中臣鎌子、蘇我倉山田石川麻呂らが宮中で蘇我入鹿を暗殺して蘇我氏(蘇我本宗家)を滅ぼした飛鳥時代の政変。その後、中大兄皇子は体制を刷新して大化の改新と呼ばれる改革を断行した。

経過

蘇我氏の専横 推古天皇30年2月22日(622年)、朝廷の政を執っていた厩戸皇子(聖徳太子)が死去した。聖徳太子の死により大豪族蘇我氏を抑える者がいなくなり、蘇我氏の専横は甚だしいものになり、その権勢は天皇家を凌ぐほどになった。推古天皇34年5月20日(626年)、蘇我馬子が死に、子の蝦夷がかわって大臣となった。推古天皇36年3月7日(628年)、推古天皇が後嗣を指名することなく崩御した。

有力な皇位継承権者には田村皇子と山背大兄王(聖徳太子の子)がいた。血統的には山背大兄王の方が蘇我氏に近いが、山背大兄王の母は蝦夷の妹である、有能な山背大兄王が皇位につき上宮王家(聖徳太子の家系)が勢力を持つことを嫌った蝦夷は田村皇子を次期皇位に推した。蝦夷は山背大兄王を推す叔父の境部摩理勢を滅ぼして、田村皇子を即位させることを強行する。これが舒明天皇である。舒明天皇13年10月9日(641年)、舒明天皇は崩御し、皇后であった宝皇女が即位した(皇極天皇)。蘇我氏の専横は更に甚だしくなった。

皇極天皇元年(642年)、蝦夷とその子の入鹿は、自分達の陵墓の築造のために天下の民を動員、聖徳太子の一族の領民も動員されたため、太子の娘の大娘姫王はこれを嘆き抗議した。皇極天皇2年10月6日(643年11月22日)、蝦夷は病気を理由に朝廷の許しも得ず、紫冠を入鹿に授け大臣となした。

上宮王家の滅亡 皇極天皇2年11月1日(643年)、入鹿は蘇我氏の血をひく古人大兄皇子を皇極天皇の次期天皇に擁立しようと望んだ。そのためには有力な皇位継承権者である山背大兄王の存在が邪魔であると考えた。入鹿は巨勢徳多、土師娑婆連の軍勢をさしむけ、山背大兄王の住む斑鳩宮を攻めさせた。これに対し山背大兄王は、舎人数十人をもって必死に防戦して土師娑婆連を戦死させるが、持ちこたえられず生駒山へ逃れた。そこで側近の三輪文屋君からは東国へ逃れて再挙することを勧められるが、山背大兄王は民に苦しみを与えることになると採り上げなかった。山背大兄王は斑鳩寺に戻り、王子と共に自殺。このことによって聖徳太子の血を引く上宮王家は滅亡した。

蘇我入鹿暗殺 神祇を職とする一族の中臣鎌足は、蘇我氏の専横を憎み蘇我氏打倒の計画を密に進めた。鎌足はまず、軽皇子に接近するが、その器量に飽き足らず、クーデターの中心たりえる人物を探した。

法興寺の打毬で、中大兄皇子の皮鞋が脱げたのを鎌足が拾って中大兄皇子へ捧げた。これが縁となって2人は親しむようになった。中大兄皇子と鎌足は南淵請安の私塾で周孔の教えを学び、その往復の途上に蘇我氏打倒の密談を行ったとされる。鎌足は更に蘇我一族の長老・蘇我倉山田石川麻呂を同志に引き入れ、その娘を中大兄皇子の妃とした。

皇極天皇4年(645年)、三韓(新羅、百濟、高句麗)から進貢(三国の調)の使者が来日した。三国の調の儀式は朝廷で行われ、大臣の入鹿も必ず出席する。中大兄皇子と鎌足はこれを好機として暗殺の実行を決める(『大織冠伝』には三韓の使者の来日は入鹿をおびき寄せる偽りであったとされている)。

(つづく)



蘇我入鹿誅殺の場面 (「多武峰縁起絵巻」より)

(つづき)

皇極天皇4年6月12日(645年)、三国の調の儀式が行われ、皇極天皇が大極殿に出御し、古人大兄皇子が側に侍し、入鹿も入朝した。入鹿は猜疑心が強く日夜剣を手放さなかったが、俳優(道化)に言い含めて、剣を外させていた。中大兄皇子は衛門府に命じて宮門を閉じさせた。石川麻呂が上表文を読んだ。中大兄皇子は長槍を持って殿側に隠れ、鎌足は弓矢を取って潜んだ。海犬養勝麻呂に二振りの剣を運ばせ佐伯子麻呂と葛城稚犬養網田に与えた。

入鹿を斬る役目を任された2人は恐怖し、飯に水をかけて飲み込むが、たちまち吐き出すありさまだった。鎌足は2人を叱咤したが、石川麻呂が表文を読み進めても子麻呂らは現れない。恐怖のあまり全身汗にまみれ、声が乱れ、手が震えた。不審に思った入鹿が「なぜ震えるのか」と問うと、石川麻呂は「天皇のお近くが畏れ多く、汗が出るのです」と答えた。

中大兄皇子は子麻呂らが入鹿の威を恐れて進み出られないのだと判断し、自らおどり出た。子麻呂らも飛び出して入鹿の頭と肩を斬りつけた。入鹿が驚いて起き上がると、子麻呂が片脚を斬った。入鹿は倒れて天皇の御座へ叩頭し「私に何の罪があるのか。お裁き下さい」と言った。天皇は大いに驚き中大兄皇子に問うた。中大兄皇子は「入鹿は皇族を滅ぼして、皇位を奪おうとしました」と答えると、皇極天皇は直ちに殿中へ退いた。子麻呂と稚犬養網田は入鹿を斬り殺した。この日は大雨が降り、庭は水で溢れていた。入鹿の死体は庭に投げ出され、障子で覆いをかけられた。

蘇我本宗家の滅亡と大化の改新 古人大兄皇子は私宮へ逃げ帰った(この時皇子は「韓人(からひと)、鞍作(入鹿)を殺しつ」「韓人殺鞍作臣 吾心痛矣」と述べたという)。中大兄皇子は直ちに法興寺へ入り戦備を固め、諸皇子、諸豪族はみなこれに従った。帰化人の漢直の一族は蝦夷に味方しようと蘇我氏の館に集まったが、中大兄皇子が巨勢徳陀を派遣して説得(飛鳥寺での古人大兄皇子の出家を伝え、旗印を無くした蘇我氏の戦意喪失を図ったとする説もある)して立ち去り、蘇我家の軍衆はみな逃げ散ってしまった。

翌6月13日(7月11日)、蝦夷は館に火を放ち『天皇記』、『国記』、その他の珍宝を焼いて自殺した。船惠尺がこの内『国記』を火中から拾い出して中大兄皇子へ献上した。こうして長年にわたり強盛を誇った蘇我本宗家は滅びた。

翌6月14日(7月12日)、皇極天皇は軽皇子へ譲位した。孝徳天皇である。中大兄皇子は皇太子に立てられた。中大兄皇子は阿倍内麻呂を左大臣、蘇我倉山田石川麻呂を右大臣、中臣鎌足を内臣に任じ、後に「大化の改新」と呼ばれる改革を断行する。

(Wikipedia抜粋)

大化の改新

大化の改新(たいかのかいしん)は、飛鳥時代の孝徳天皇2年(大化2年)春正月甲子朔(西暦646年)に発布された改新の詔に基づく政治的改革。中大兄皇子(後の天智天皇)や中臣鎌足(後の藤原鎌足)らが蘇我入鹿を暗殺し蘇我蝦夷を自害させ、蘇我氏本宗家を滅ぼした乙巳の変の後に行われたとされる(ただし、蝦夷・入鹿暗殺の乙巳の変からとする場合もある)。天皇の宮を飛鳥から難波に移し、蘇我氏など飛鳥の豪族を中心とした政治から天皇中心の政治へと移り変わったとされる。

また「大化」は日本最初の元号である。

新政権の発足

皇極4年(645年)6月14日、乙巳の変の直後、皇極天皇は退位し、中大兄皇子に皇位を譲ろうとしたが、それでは天皇になりたいがためにクーデターをおこしたのかと思われるので中大兄と鎌足との相談の結果、皇弟・軽皇子が即位し孝徳天皇となり、中大兄皇子が皇太子になった。これは、推古天皇の時、聖徳太子が皇太子でありながら政治の実権を握っていたことに習おうとしたと推定されている。新たに左右の大臣2人と内臣を置いた。さらに唐の律令制度を実際に運営する知識として国博士を置いた。この政権交替は、蘇我氏に変わって権力を握ることではなく、東アジア情勢の流れに即応できる権力の集中と国政の改革であったと考えられている。

- ・天皇 孝徳天皇、皇太子 中大兄皇子
- ・左大臣 阿部内麻呂臣(あべのうちまろのおみ)、右大臣 蘇我倉山田石川麻呂、内臣 中臣鎌足
- ・国博士 高向玄理、国博士 旻

6月19日、孝徳天皇と中大兄皇子は群臣を大槻の樹に集めて「帝道は唯一である」「暴逆(蘇我氏)は誅した。これより後は君に二政なし、臣に二朝なし」と神々に誓った。そして、大化元年と初めて元号を定めた。

改新の概要

大化2年(646年)1月に改新の詔を出した。この改新の詔を以て大化の改新の始まりとする。ただし、昭和42年(1967年)12月、藤原京の北面外濠から「己亥年十月上秣国阿波評松里口」(己亥年は西暦699年)と書かれた木簡が掘り出され郡評論争に決着が付けられたとともに、改新の詔の文書は『日本書紀』編纂に際し書き替えられたことが明らかになり、大化の改新の諸政策は後世の潤色であることが判明した。この時代に改革に向けた動きがあったことは確かとはされているものの、律令国家建設と天皇への中央集権化は乙巳の変以前の推古天皇、聖徳太子・蘇我馬子の功績であり、書かれていることは史実ではないことに注意する必要がある。詔として出された主な内容は以下の四条である。

詳細は「改新の詔」を参照

- ・それまでの豪族の私地(田荘)や私民(部民)を公収して田地や民はすべて天皇のものとする。(公地公民制)
- ・初めて首都を定め、畿内の四至を確定させた。また今まであった国(くに)、県(あがた)、郡(こおり)などを整理し、令制国とそれに付随する郡に整備しなおした。国郡制度に関しては、旧来の豪族の勢力圏であった国や県(あがた)などを整備し直し、後の令制国の姿に整えられていった。実際にこの変化が始まるのは詔から出されてから数年後であった。
- ・戸籍と計帳を作成し、公地を公民に貸し与える。(班田収授の法)
- ・公民に税や労役を負担させる制度の改革。(租・庸・調)

その後

孝徳天皇と中大兄皇子は不和となり、白雉4年(653年)に中大兄皇子が難波宮を引き払って飛鳥へ戻り、群臣もこれに従い、孝徳天皇は全く孤立して翌年に憤死する事件が起きた。この不和の背景には、孝徳天皇と中大兄皇子の間の権力闘争とも外交政策の対立とも言われているが不明な点が多い。皇太子の中大兄皇子は即位せず、母にあたる皇極天皇が重祚して斉明天皇となった。

(Wikipedia抜粋)



奈良県「談山神社」。飛鳥時代に中臣鎌足と中大兄皇子が大化の改新について談合した場所として有名。(飛鳥時代の神社 談山神社 大化の改新じゃ!、Net)



『多武峯縁起絵巻』談合の図。右が中大兄皇子、次が鎌足。多武峯山中で大化改新の談合をする様子を描く。写真提供／談山神社

隋

隋(ずい、581年 - 618年)は、中国の王朝。魏晋南北朝時代の混乱を鎮め、西晋が滅んだ後分裂していた中国をおよそ300年ぶりに再統一した。しかし第2代煬帝の失政により滅亡し、その後は唐が中国を支配するようになる。都は大興城(長安、現在の中華人民共和国西安市)。国姓は楊。当時の日本である倭国からは遣隋使が送られた。

高句麗遠征

611年、煬帝は文帝がやりかけていた高句麗遠征を以後3度にわたって行なった。612年から本格的に開始された高句麗遠征は113万人の兵士が徴兵される大規模なものであり、来護児や宇文述らが指揮官として高句麗を攻めた。しかし1回目の遠征は大敗し、さらに兵糧不足もあって撤退する。613年には煬帝自身が軍を率いて高句麗を攻めるが結果は得られず、614年に行なわれた3度目の遠征では高句麗側も疲弊していた事もあって煬帝に恭順の意を示したが、煬帝が条件とした高句麗王の入朝は無視され、煬帝は4回目の遠征を計画する。

(Wikipedia抜粋)

遣隋使(けんずいし)とは、推古朝の時代、倭国(倭國)が技術や制度を学ぶために隋に派遣した朝貢使のことをいう。600年(推古8年)~618年(推古26年)の18年間に5回以上派遣されている。なお、日本という名称が使用されたのは遣唐使からである。

大阪の住吉大社近くの住吉津から出発し、住吉の細江(現・細江川)から大阪湾に出、難波津を経て瀬戸内海を筑紫(九州)那大津へ向かい、そこから玄界灘に出る。

倭の五王による南朝への奉獻以来約1世紀を経て再開された遣隋使の目的は、東アジアの中心国・先進国である隋の文化の摂取が主であるが、朝鮮半島での影響力維持の意図もあった。この外交方針は次の遣唐使の派遣にも引き継がれた。

第二回遣隋使は、『日本書紀』に記載されており、607年(推古15年)に小野妹子が大唐国に国書を持って派遣されたと記されている。

倭王から隋皇帝煬帝に宛てた国書が、『隋書』「東夷傳倭國傳」に「日出處天子致書日没處天子無恙云云」(日出ずる処の天子、書を日没する処の天子に致す。恙無しや、云々)と書き出されていた。これを見た煬帝は立腹し、外交担当官である鴻臚卿(こうろけい)に「蕃夷の書に無礼あらば、また以て聞するなかれ」(無礼な蕃夷の書は、今後自分に見せるな)と命じたという。なお、煬帝が立腹したのは倭王が「天子」を名乗ったことに対してであり、「日出處」「日没處」との記述に対してではない。

(Wikipedia抜粋)



(日本書紀・古事記、西東社)

飛鳥時代 隋

唐

唐（とう、618年 - 907年）は、中国の王朝である。李淵が隋を滅ぼして建国した。7世紀の最盛期には、中央アジアの砂漠地帯も支配する大帝国で、中央アジアや、東南アジア、北東アジア諸国、例えば朝鮮半島や渤海、日本などに、政制・文化などの面で多大な影響を与えた世界帝国である。日本の場合は遣唐使などを送り、894年（寛平6年）に菅原道真の意見で停止されるまで、積極的に交流を続けた。首都は長安に置かれた。
（Wikipedia抜粋）

遣唐使（けんとうし）とは、日本が唐に派遣した使節である。日本側の史料では唐の皇帝と対等に交易・外交をしていたとされるが、『旧唐書』や『新唐書』の記述においては、「倭国が唐に派遣した朝貢使」とされる。中国では618年に隋が滅び唐が建ったので、それまで派遣していた遣隋使に替えてこの名称となった。寛平6年（894年）に菅原道真の建議により停止された。遣唐使船には、多くの留学生が同行し往来して、政治家・官僚・僧にも多くの人材を供給した。留学生井真成の墓も中国で発見された。
（Wikipedia抜粋）



（上海万博に際し復元された遣唐使船、Wikipedia）



（日本書紀・古事記、西東社）

百済の役(百済滅亡から白村江の戦いでの敗戦)

660年、百済が唐軍(新羅も従軍)に敗れ、滅亡する。その後、鬼室福信らによって百済復興運動が展開し、救援を求められた倭国が663年に参戦し、白村江の戦いで敗戦する。この間の戦役を百済の役(くだらのえき)という。

百済滅亡

660年3月、新羅からの救援要請を受けて唐は軍を起し、蘇定方を神丘道行軍大総管に任命し、劉伯英将軍に水陸13万の軍を率いさせ、新羅にも従軍を命じた。唐軍は水上から、新羅は陸上から攻撃する水陸二方面作戦によって進軍した。唐13万・新羅5万の合計18万の大軍であった。

百済の将軍たちは奮闘し、階伯(かいぱく)将軍の決死隊5000兵が3つの陣を構えて待ちぶせた。新羅側は太子法敏(のちの文武王)、欽純(きんじゅん)将軍、品日(ひんじつ)将軍らが兵5万を3つにわけて黄山を突破しようとしたが、百済軍にはばまれた。7月9日の激戦黄山の戦いで階伯ら百済軍は新羅軍をはばみ四戦を勝ったが、敵の圧倒的な兵力を前に戦死した。唐軍は白江を越えたが、泥濘が酷く手間取ったが、柳の籬を敷いて上陸、熊津口の防衛線を破り王都(泗沘城)に迫った。7月12日、唐軍は王都を包囲。百済王族の投降希望者が多数だったが、唐側はこれを拒否した。7月13日、義慈王は熊津城に逃亡、太子隆が降伏し、7月18日に義慈王が降伏し、百済は滅亡した。

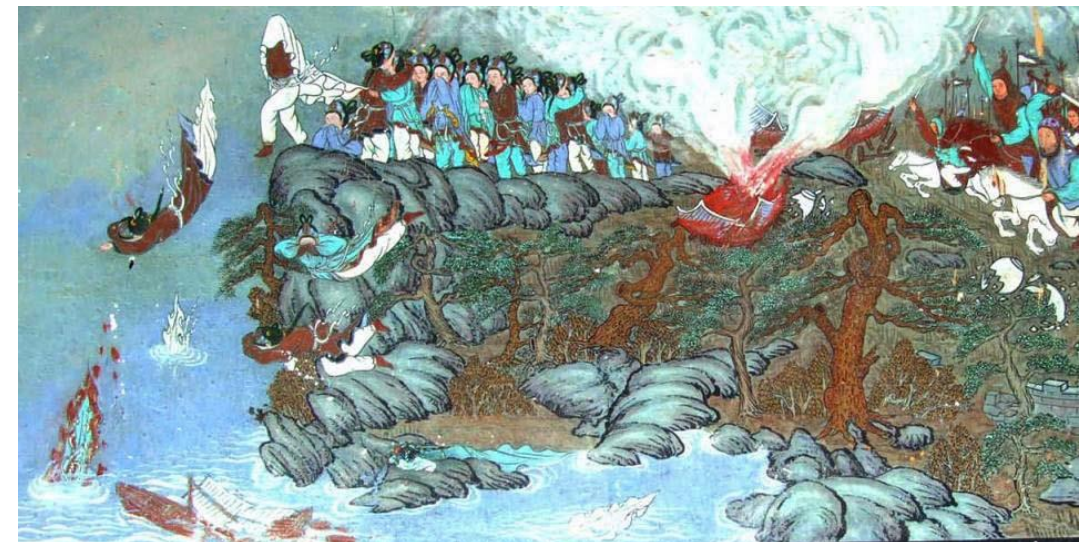
百済復興運動

唐の目標は高句麗征伐であり、百済討伐はその障害要因を除去する意味があり、唐軍の主力は高句麗に向かうと、百済遺民鬼室福信・黒齒常之らによる百済復興運動が起きた。8月2日には百済残党が小規模の反撃を開始し、8月26日には新羅軍から任存を防衛した。9月3日に劉仁願将軍が泗沘城に駐屯するが、百済残党が侵入を繰り返した。百済残党は撃退されるが、泗沘の南の山に4,5個の柵をつくり、駐屯し、侵入を繰り返した。こうした百済遺民に呼応して20余城が百済復興運動に応じた。唐軍本隊は高句麗に向かっていただけ救援できずに、新羅軍が百済残党の掃討を行う。10月9日に、ニレ城を攻撃、18日には攻略すると、百済の20余城は降伏した。10月30日には泗沘の南の山の百済駐屯軍を殲滅し、1500人を斬首した。しかし、百済遺臣の西武恩卒鬼室福信、僧侶道琛(どうちん)、黒齒常之らの任存城や、達率余自信の周留城(スルじょう)などが抵抗拠点であった。

(白村江の戦い・世界の窓、Net)



西暦660年、唐・新羅連合軍の百済侵攻



泗沘城の落城で落下岩から身投げする宮廷女官

白村江の戦い

倭国による百済救援

百済滅亡の後、百済の遺臣は鬼室福信・黒齒常之らを中心として百済復興の兵をあげ、倭国に滞在していた百済王の太子豊璋王を擁立しようと、倭国に救援を要請した。中大兄皇子はこれを承諾し、百済難民を受け入れるとともに、唐・新羅との対立を深めた。661年、齐明天皇は九州へ出兵するも邦の津にて急死した(暗殺説あり)。齐明天皇崩御にあたっては皇子は即位せずに称制し、朴市秦造田来津(造船の責任者)を司令官に任命して全面的に支援した。この後、倭国軍は三派に分かれて朝鮮半島南部に上陸した。

軍事力

唐軍-総兵力は不明であるが、森公章は総数不明として、660年の百済討伐の時の唐軍13万、新羅5万の兵力と相当するものだったと推定している。また唐軍は百済の役の際よりも増強された。当時の唐は四方で諸民族を征服しており、その勢力圏は広がった。この時参加した唐の水軍も、その主力は靺鞨で構成されていたという。日本書紀によれば、白村江の戦いの663年から666年にかけて、「唐国の使人郭務悰等六百人、送使沙宅孫登等千四百人、総合勢二千人が船四十七隻に乗りて俱に比知嶋に泊りて相謂りて曰わく、「今吾輩が人船、数衆し。忽然に彼に到らば、恐るらくは彼の防人驚きとよみて射戦はむといふ。乃ち道久等を遣して、預めやうやくに来朝る意を披き陳さしむ」とあり、合計2千人の唐兵や百済人が上陸した。

水軍7,000名、170余隻の水軍。指揮官は劉仁軌、杜爽、元百済太子の扶余隆。陸軍不明。陸軍指揮官は孫仁師、劉仁原、新羅王の金法敏(文武王)。

倭国軍-第一派:1万余人。船舶170余隻。指揮官は安曇比羅夫、狭井檳榔、朴市秦造田来津。第二派:2万7千人。軍主力。指揮官は上毛野君稚子、巨勢神前臣譯語、阿倍比羅夫(阿倍引田比羅夫)。第三派:1万余人。指揮官は廬原君臣(いおはらのきみおみ)。倭国軍の戦闘構想は、まず豊璋王を帰国させて百済復興軍の強化を図り、新羅軍を撃破した後、後続部隊の到着を待って唐軍と決戦することにあつた。661年5月、第一派倭国軍が出発。指揮官は安曇比羅夫、狭井檳榔、朴市秦造田来津。豊璋王を護送する先遣隊で、船舶170余隻、兵力1万余人だった。662年3月、主力部隊である第二派倭国軍が出発。指揮官は上毛野君稚子、巨勢神前臣譯語、阿倍比羅夫(阿倍引田比羅夫)。663年、豊璋王は福信と対立しこれを斬る事件を起こしたものの、倭国の援軍を得た百済復興軍は、百済南部に侵入した新羅軍を駆逐することに成功した。

百済の再起に対して唐は増援の劉仁軌率いる水軍7,000名を派遣した。唐・新羅軍は、水陸併進して、倭国・百済連合軍を一挙に撃滅することに決めた。陸上部隊は、唐の将、孫仁師、劉仁原及び新羅王の金法敏(文武王)が指揮した。劉仁軌、杜爽及び元百済太子の扶余隆が率いる170余隻の水軍は、熊津江に沿って下り、陸上部隊と会合して倭国軍を挟撃した。倭国・百済連合軍は、福信事件の影響により白村江への到着が10日遅れたため、唐・新羅軍のいる白村江河口に対して突撃し、海戦を行った。倭国軍は三軍編成をとり4度攻撃したと伝えられるが、多数の船を持っていたにもかかわらず、火計、干潮の時間差などにより、663年唐・新羅水軍に大敗した。

同時に陸上でも、唐・新羅の軍は倭国・百済の軍を破り、百済復興勢力は崩壊した。白村江に集結した1,000隻余りの倭船のうち400隻余りが炎上した。九州の豪族である筑紫君薩夜麻も唐軍に捕らえられて、8年間も捕虜として唐に抑留されたのちに帰国を許されたとの記録がある。白村江で大敗した倭国水軍は、各地で転戦中の倭国軍および亡命を望む百済遺民を船に乗せ、唐・新羅水軍に追われる中、やっこのことで帰国した。尚、百済からの遺民を漢人という。

この戦いは唐の勝利に終わった。大陸に大国である唐が出現し、東アジアの勢力図が大きく塗り変わる中で起きた戦役である。白村江の戦いでの敗北は、日本史上でも第二次世界大戦後のアメリカ合衆国による占領をのぞけば、日本が外国の占領下に入る危険性が最も高くなった敗戦であった。この敗戦により倭国は領土こそ取られなかったものの、朝鮮半島での権益を失い、国防体制・政治体制の変革がなされ、急速に国家体制が整備され、天智天皇のときには近江令法令群が策定、天武天皇のときは最初の律令法とされる飛鳥浄御原令の制定が命じられるなど、律令国家の建設が急ピッチで進み、倭国は「日本」へ国号を変えた。

高句麗滅亡

朝鮮半島では唐が666年から高句麗へ侵攻(唐の高句麗出兵)しており、3度の攻勢によって668年に滅ぼし安東都護府を置いた。白村江の戦いで国を失った百済の豊璋王は、高句麗へ亡命していたが、捕らえられ幽閉された。高句麗の滅亡によって、東アジアで唐に敵対するのは倭国のみとなった。698年に靺鞨の粟末部は高句麗遺民などと共に、満州南部で渤海国を建国した。渤海の建国当初は唐と対立していたが、後に唐から冊封を受け従った。また日本は、新羅との関係が悪化する中で、渤海からの朝貢を受ける形で遣渤海使をおこなうなど、渤海とは新潟や北陸などの日本海側沿岸での交流を深めていった。尚、高句麗からの遺民を高麗人という。

新羅による半島統一

戦後、唐は百済・高句麗の故地に羈縻州を置き、新羅にも羈縻州を設置する方針を示した。新羅は旧高句麗の遺臣らを使って、669年に唐に対して蜂起させた。670年、唐が西域で吐蕃と戦っている隙に、新羅は友好国である唐の熊津都督府を襲撃し、唐の官吏を多数殺害した。他方で唐へ使節を送って降伏を願い出るなど、硬軟両用で唐と対峙した。何度かの戦いの後、新羅は再び唐の冊封を受けて属国となる事を赦され、唐は現在の清川江以南の領土を新羅に管理させるという形式をとって両者の和睦が成立した。唐軍は675年に撤収し、新羅によって半島統一(現在の韓国と北朝鮮)がなされた。

(Wikipedia抜粋)



白村江の敗戦により、倭国は縄文時代前期以来の南朝鮮での勢力圏、拠点あるいは橋頭堡を失い、南朝鮮と倭国が分離された。とはいえ、かなりの倭人が倭国に戻ることなく南朝鮮に留まったと思われる。これ以来、朝鮮と日本は政治的・文化的・言語学的にもお互い独自の発展を遂げるようになった。(藤田)

白村江の敗北と鉄の供給

白村江の敗北により、大量の鉄(武器、武具や鎧)を百済で消費あるいは放棄することになり、さらにヤマト政権への最大の鉄の供給地である任那を失った。というわけで、ヤマト政権は極度に鉄の不足するようになり、その供給を国内に頼らざるを得なくなった。近江は湖西(比良山麓、和邇氏と関連)、湖北(伊吹山麓、息長氏と関係)、と湖南とかなりの鉄鉱石を産出してきたが、このころより瀬田丘陵が注目されヤマト政権に大量に鉄を供給するようになった。

鉄の供給とヤマト王権

古墳時代中期 4 世紀から 5 世紀にかけて朝鮮の加耶が鉄素材の供給基地として成長そこから鉄テイの形で大量に輸入された鉄は日本国内で数々の工具・武器・武具に鍛冶加工されて用いられた。日本では鉄素材の供給を加耶を中心とした朝鮮に頼らざるを得ず、国内諸勢力は朝鮮諸国との鉄供給をめぐる連携を進める一方、技術移転をベースに鉄自給の道が模索されてきた。この時期 中国・朝鮮も戦乱の時代であり、高句麗が勢力を伸ばし、南下してくると百済のみならず加耶諸国も圧迫され、鉄の供給も逼迫し、供給基地も変化する。また、新羅が順次勢力を伸ばし、6 世紀半ばには加耶がほろぶ。このような 5~7 世紀にかけての朝鮮半島の混乱は日本の諸国にも大きな影響を与え、鉄の覇権をめぐる朝鮮諸国との連携や大量の渡来人の流入が生じる中、北九州や大和連合等諸国が対立し、百済と結び鉄の覇権を握った大和が次第に日本諸国を統合して日本骨格を作ってゆく。また、大和は同時に渡来人の技術をいち早く吸収し、鉄の自給についても、早くから大規模精錬を開始し、この鉄の力をもって諸国を統一し、7世紀初頭には律令国家を作り上げ、飛鳥・奈良時代を作っていく。大和朝廷の勢力の源泉となったのが、朝鮮からの鉄の移入と同時にこの瀬田丘陵での鉄自給と考えられている。

日本での鉄の生産は 5 世紀末から 6 世紀初頭まで遡れると言われているが、この近江の国瀬田丘陵ではおそらく渡来人のもたらした技術による鉄鉱石による鉄製錬が 7 世紀にはスタートしている。

他の地域がやっとな鉄鉱石の代替原料として砂鉄を見つけ、これを用いた効率・品質でも劣る鉄精錬を開始している時にこの瀬田丘陵では大和国営の大規模な鉄生産がおこなわれ、次々と勢力を伸ばしていったと推定される。

まさに古墳から飛鳥・奈良時代にかけての日本骨格の誕生には朝鮮の鉄を巡る戦いそして日本での鉄自給の戦いが重要な役割を演じており、大和から朝鮮半島への幾重もの『Iron Road 和鉄の道』があり、近江の国はその重要な中心地として栄えたと考えられる。

この大和の繁栄を支えたのはこの近江国瀬田丘陵の鉄・吉備国の鉄であり、その後これに丹後や越の国の鉄が加わり、蝦夷地征伐の 8 世紀には今の福島県原町金沢地区の行方の製鉄基地が加わっていく。

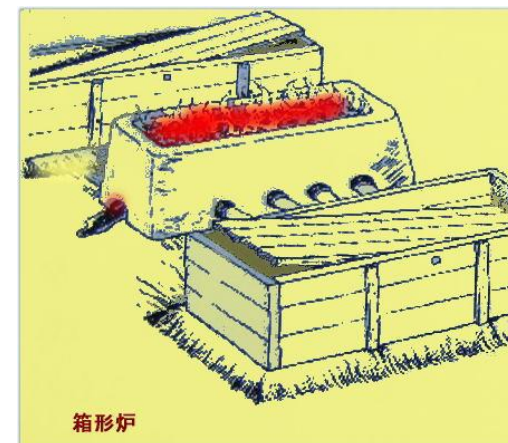
(近江国 瀬田丘陵の古代製鉄遺跡群、Net)

近江の古代製鉄について

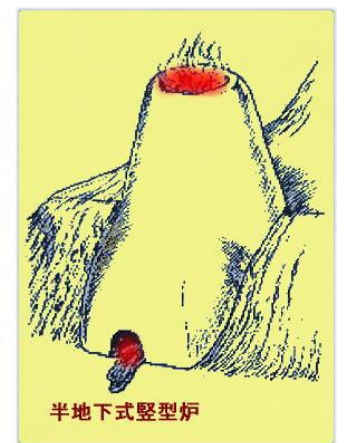
古くから「近江を制するものは天下を制する。」と言われ、権力者の争奪の的となった近江は、地政学上の好条件を備えた国であるばかりでなく、古代における近畿地方最大の鉄生産国でもありました。現在、滋賀県下には 60 箇所以上の製鉄遺跡が判っており、一つの遺跡が一つの炉とは限らないので、その製鉄炉となると相当な数にのぼります。

継体天皇といえ、6 世紀初頭、播磨王 N・朝の断絶に際して越前の武生から大和に進出する際、三尾氏、坂田氏、息長氏、和邇(ワニ)氏など近江の豪族達の女を妃に入れ、近江との結びつきを強固にして進出路を確保するとともに、その鉄資源の確保をねらっています。

(近江歴史回廊倶楽部、Net)



箱形炉



半地下式竖型炉

弥生時代に製鉄はあった、Net



2. たたら炉と操業 島根県仁多郡奥出雲町で現在も行われている「日刀保たたら」。



3. 鑄出し 「日刀保たたら」

(人はどのように鉄を作ってきたのか、永田和宏)

天武・持統 (不比等補佐)

壬申の乱

壬申の乱(じんしんのらん)は、天武天皇元年6月24日 - 7月23日、(ユリウス暦672年7月24日 - 8月21日)に起こった古代日本最大の内乱である。天智天皇の太子・大友皇子(弘文天皇の称号を追号)に対し、皇弟・大海人皇子(後の天武天皇)が地方豪族を味方に付けて反旗をひるがえしたものである。反乱者である大海人皇子が勝利するという、例の少ない内乱であった。名称の由来は、天武天皇元年が干支で壬申(じんしん、みずのえさる)にあたることによる。

乱の経過

660年代後半、都を近江宮へ移していた天智天皇は同母弟の大海人皇子を皇太子に立てていたが、天智天皇10年10月17日(671年)、自身の皇子である大友皇子を太政大臣につけて後継とする意思を見せはじめた。その後、天智天皇は病に臥せる。大海人皇子は大友皇子を皇太子として推挙し、自ら出家を申し出、吉野宮(奈良県吉野)に下った。天智天皇は大海人皇子の申し出を受け入れた。

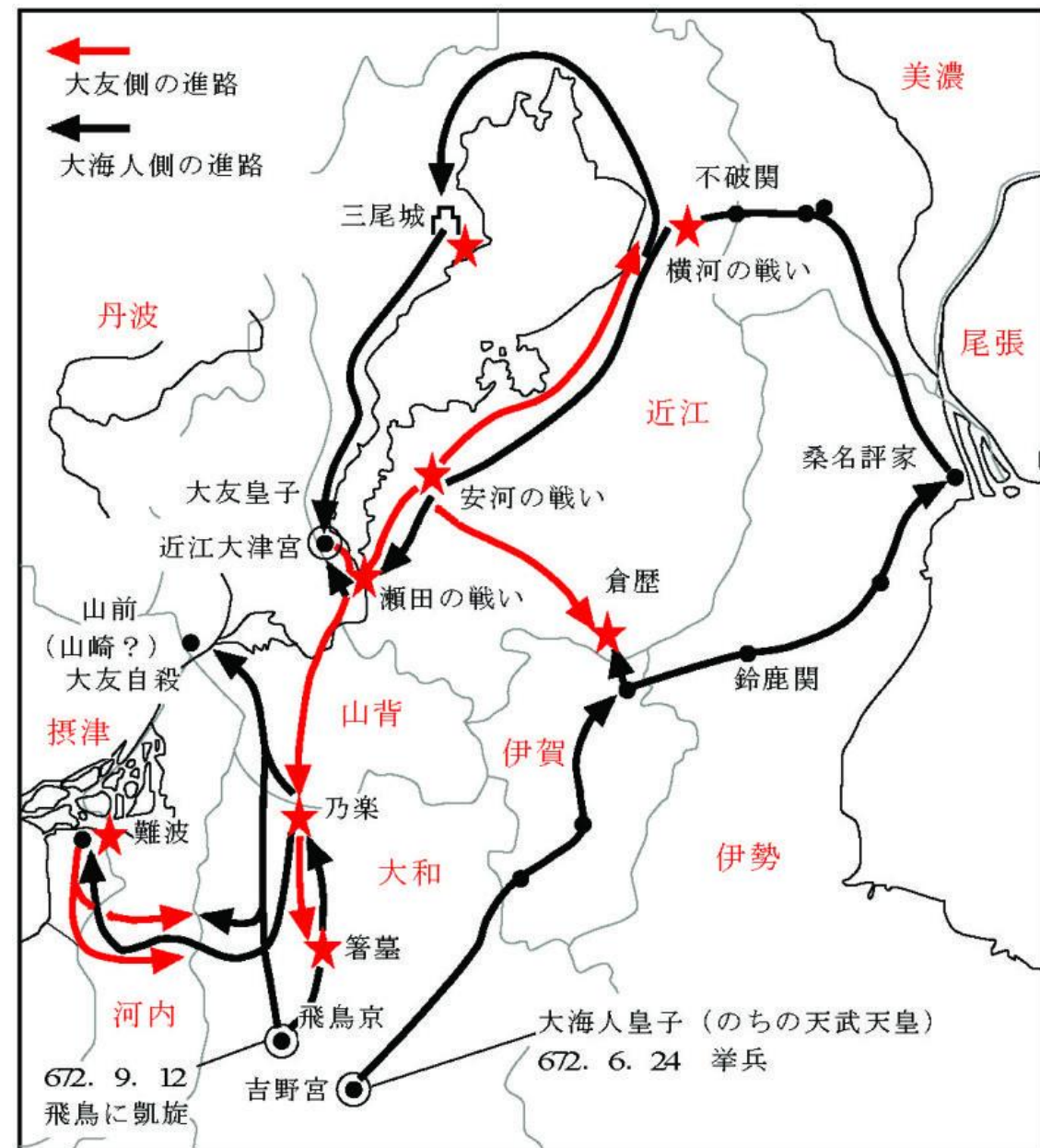
12月3日(672年)、近江宮の近隣山科において天智天皇が46歳で崩御した。大友皇子が跡を継ぐが、年齢はまだ24歳に過ぎなかった。大海人皇子は天武天皇元年6月24日に吉野を出立した。まず、名張に入り駅家を焼いたが、名張郡司は出兵を拒否した。大海人皇子は美濃、伊勢、伊賀、熊野やその他の豪族の信を得ることに成功した。続いて伊賀に入り、ここでは阿拝郡司(現在の伊賀市北部)が兵約500で参戦した。そして積殖(つみえ、現在の伊賀市柘植)で長男の高市皇子の軍と合流した。さらに伊勢国でも郡司の協力で兵を得ることに成功し、美濃へ向かった。美濃では大海人皇子の指示を受けて多品治が既に兵を興しており、不破の道を封鎖した。これにより皇子は東海道、東山道の諸国から兵を動員することができるようになった。美濃に入り、東国からの兵力を集めた大海人皇子は7月2日に軍勢を二手にわけて大和と近江の二方面に送り出した。

近江朝廷の大友皇子側は東国と吉備、筑紫(九州)に兵力動員を命じる使者を派遣したが、東国の使者は大海人皇子側の部隊に阻まれ、吉備と筑紫では現地の総領を動かすことができなかった。特に筑紫では、筑紫率の栗隈王が外国に備えることを理由に出兵を断ったのだが、大友皇子はあらかじめ使者の佐伯男に、断られた時は栗隈王を暗殺するよう命じていた。が、栗隈王の子の美努王、武家王が帯剣して傍にいたため、暗殺できなかった。それでも近江朝廷は、近い諸国から兵力を集めることができた。

大和では大海人皇子が去ったあと、近江朝が倭京(飛鳥の古い都)に兵を集めていたが、大伴吹負が挙兵してその部隊の指揮権を奪取した。吹負はこのあと西と北から来襲する近江朝の軍と激戦を繰り広げた。この方面では近江朝の方が優勢で、吹負の軍はたびたび敗走したが、吹負は繰り返し軍を再結集して敵を撃退した。やがて紀阿閉麻呂が指揮する美濃からの援軍が到着して、吹負の窮境を救った。

近江朝の軍は美濃にも向かったが、指導部の足並みの乱れから前進が滞った。村国男依らに率いられて直進した大海人皇子側の部隊は、7月7日に息長の横河で戦端を開き、以後連戦連勝して進撃を続けた。7月22日に瀬田橋の戦いで近江朝廷軍が大敗すると、翌7月23日に大友皇子が首を吊って自決し、乱は収束した。翌天武天皇2年(673年)2月、大海人皇子は飛鳥浄御原宮を造って即位した。

近江朝廷が滅び、再び都は飛鳥(奈良県高市郡明日香村)に移されることになった。また論功行賞と秩序回復のため、新たな制度の構築、すなわち服制の改定、八色の姓の制定、冠位制度の改定などが行われた。天武天皇は天智天皇よりもさらに中央集権制を進めていったのである。(Wikipedia抜粋)



(日本史の基本26 (5-3 壬申の乱) 日本史野島博之のグラサン日記、Net)

天武天皇の即位

壬申の乱で大友皇子を破った大海人皇子は、皇族の地位を高めた新しい制度の確立を目指した。

‘日本’の国号が初めてあらわれるのが10世紀成立の「旧唐書」、11世紀成立の「新唐書」にみられる倭国伝からである。したがって、倭王権が倭から日本に国号を変えたのは、唐代に入ってからと考えられる。朝鮮の古地名では、‘本’は‘那’で国邑を表す。また‘日’は(nit)であり、‘任’(nin)に音韻上重なるものである。大和王権は任那滅亡にともなう新しい時代に対応して、国家的自立と自負を表明するため、‘任那’の栄光の記憶を復活し、しかも‘日の御子’の治める国にふさわしく‘日本’という国号を立てたのではあるまいか。(古代日本異族伝説の謎、田中)

「天皇」と記す木簡
1998年に奈良県の飛鳥池工房遺跡から出土した木簡に、「天皇」と「丁丑年」と書かれたものがあった。丁丑年とは677年で、天武天皇の時代から天皇の名称が使われ始めたことを示す貴重な史料として注目されている。



- ①の木簡は「天皇祭露弘寅□」と記されており、「天皇」と記した最古の木簡である。「天皇、露を祭(あつめて)」と読めるが、意味は今のところ不明である。
- ②の木簡は「丁丑年十二月三野国刀支評次米」と記されている。丁丑年(677年)の新嘗祭(にいなめさい)で使われた「次米(すきのこめ)」が、三野(美濃)国(岐阜県南部)から納められた際の荷札の木簡である。

天武天皇は初めての「天皇」 大王(オオキミ)から天皇へ

「天皇」の号を最初に用いたのは天武天皇だといわれている。天武天皇は壬申の乱に勝利して強大な権力を獲得したことで、『万葉集』に「大君は神にしませば」とも歌われたように、なかば神格化された。そこで、自らの称号としてそれまでの「大王」に代わり、唐の皇帝・高宗が一時的に用いた「天皇」を選んだと考えられている。

「天皇」と並んで「日本」の国号を定めたのも天武天皇だとされる。もともと国内では「ヤマト」の名が使われ、対外的には「倭」の名称が使われていた。しかしこの「倭」は中国が東夷(東の異民族)である日本を侮蔑(あはれ)してつけたものでもあったため、律令国家として生まれ変わったことを対外的に示す意味からも、新しい国号「日本」が定められた。702年に久しぶりに遣唐使が唐へ派遣されたのは、この新しい国号を唐に認知させることが目的の一つだったといわれており、唐の皇帝にもすんなりと受け入れられたとみられている。

「日本」の国号

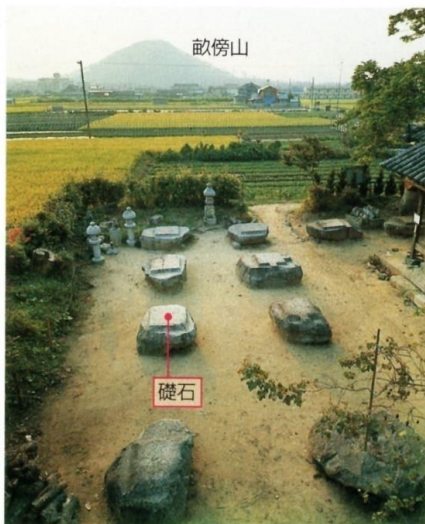
コラム

仏教文化が栄える 白鳳文化

7世紀後半から8世紀初頭にかけては、仏教が国家の統制・管理を受けて隆盛した。この国家仏教を中心とする文化を白鳳文化とよぶ。仏教を統制する機関として僧綱が置かれ、自由な布教が禁止される一方、天武・持統天皇の時代には薬師寺をはじめとする官立寺院が建てられた。また、中国やインドの影響を受けた高度な仏教美術が開花した。

本薬師寺跡

天武天皇が皇后(のちの持統天皇)の病氣平癒を祈願して建立した寺院。藤原京の中にあり、現在は礎石が残る。



薬師寺東塔

白鳳文化の代表的な建築。薬師寺で当時の姿を今に伝える唯一の建物。本薬師寺からの移築ともいわれているが、平城京での新築とする説が有力。国宝。



山田寺東回廊

山田寺は蘇我倉山石川麻呂の発願で7世紀中ごろに建てられた寺。東回廊の柱の一部などが倒壊したままの形で出土し、古代建築の貴重な資料となっている。

天武天皇

- ・672年 飛鳥浄御原宮への遷都
- ・673年 天武天皇が即位し、太政大臣・左右大臣を任命せず皇親政治を展開した。
- ・684年 八色の姓の制定(皇親氏族の真人を最上位)
この頃、飛鳥浄御原律令の編纂(「天皇」と「日本」号の使用)と『日本書記』の編纂開始
- ・686年 天武天皇崩御



大津皇子の変、草壁皇子の病死



持統天皇

- ・689年 飛鳥浄御原令の施行・庚寅年籍の作成
持統天皇即位(高市皇子を太政大臣)
- ・694年 藤原京が完成・遷都
- ・696年 高市皇子死亡
- ・697年 軽皇子に譲位、文武天皇即位

藤原不比等(『大宝律令』と『日本書記』の編纂に関与)

齐明天皇5年(659年) 誕生。
 天智天皇8年(669年) 父鎌足死去
 文武天皇元年(697年) 娘・宮子を入内
 大宝元年(701年) 正三位大納言に昇進、外孫、首皇子(聖武天皇)誕生
 和銅元年(708年) 正二位、右大臣
 712年 古事記、太朝臣安萬侶によって献上
 養老4年(720年) 死去、贈正一位太政大臣 文忠公、淡海公を贈諡。『日本書記』完成

天武天皇が打ち出した改革

【官僚制度】

年号	階級	天皇	階級制度							
603年	12階	推古天皇		大 <small>とく</small> 徳	小 <small>じん</small> 仁	大 <small>らい</small> 礼	小 <small>しん</small> 信	大 <small>ぎ</small> 義	小 <small>ち</small> 智	
647年	13階	孝徳天皇	大 <small>しよく</small> 織 大 <small>しよく</small> 織 大 <small>しよく</small> 織	大 <small>きん</small> 錦	小 <small>きん</small> 錦	大 <small>しょう</small> 青	小 <small>しょう</small> 青	大 <small>こく</small> 黒	小 <small>こく</small> 黒	建武 <small>けんむ</small>
649年	19階		大 <small>しよく</small> 織 大 <small>しよく</small> 織 大 <small>しよく</small> 織	大 <small>か</small> 花 <small>か</small> 上 <small>か</small> 下 <small>か</small>	小 <small>か</small> 花 <small>か</small> 上 <small>か</small> 下 <small>か</small>	大 <small>せん</small> 山 <small>せん</small> 上 <small>せん</small> 下 <small>せん</small>	小 <small>せん</small> 山 <small>せん</small> 上 <small>せん</small> 下 <small>せん</small>	大 <small>おつ</small> 乙 <small>おつ</small> 上 <small>おつ</small> 下 <small>おつ</small>	小 <small>おつ</small> 乙 <small>おつ</small> 上 <small>おつ</small> 下 <small>おつ</small>	立身 <small>りゅうしん</small>
664年	26階	中大兄称制	大 <small>しよく</small> 織 大 <small>しよく</small> 織 大 <small>しよく</small> 織	上中下 <small>おほ</small> 大 <small>おほ</small> 錦	上中下 <small>おほ</small> 小 <small>おほ</small> 錦	上中下 <small>おほ</small> 大 <small>おほ</small> 山	上中下 <small>おほ</small> 小 <small>おほ</small> 山	上中下 <small>おほ</small> 大 <small>おほ</small> 乙	上中下 <small>おほ</small> 小 <small>おほ</small> 乙	大 <small>こん</small> 建 <small>こん</small>
685年	48階	天武天皇	8 <small>しょう</small> 階級 <small>しょう</small> 正	8 <small>じき</small> 階級 <small>じき</small> 直	8 <small>こん</small> 階級 <small>こん</small> 勤	8 <small>む</small> 階級 <small>む</small> 務	8 <small>つい</small> 階級 <small>つい</small> 追	8 <small>しん</small> 階級 <small>しん</small> 進		

【身分制度】

旧豪族の没落により
大王の権威増強

大王=神

「天皇」号の採用

	甲子の宣	おもな旧姓	氏族名
真人		公 (天皇の近親者)	守山、路、高橋、三国
朝臣	大氏	臣	大三輪、阿倍、巨勢、膳
宿禰	小氏	連	大伴、佐伯、阿曇、忌部
忌寸	伴造らの氏	直	大倭、葛城、凡川内、山背
道師 臣 連 稻置			(賜姓の例なし)
			(賜姓の例なし)

【法令の編集】

律令の制定

【史書の編集】

『日本書紀』の編纂を命じる

【新都建設】

藤原京の建設を企画

(日本書記・古事記、西東社)

大宝律令の完成

飛鳥時代 大宝律令の完成

白村江の戦いで敗北した日本では、国内体制の整備が急務となった。天智天皇は最初の法令として近江令を制定し、また最初の戸籍とされる庚午年籍を作成した。その後689年持統天皇のもとで飛鳥浄御原令が施行され、701年に文武天皇のもとで大宝律令が制定された。これは現存していないが刑罰を定める律と統治のしくみを定める令がそろった日本で最初の律令である。律令制の確立により、日本は天皇を頂点とする中央集権国家となり、官僚機構も整備されていった。(藤田)

古代の官僚機構が完成 律令と中央政府

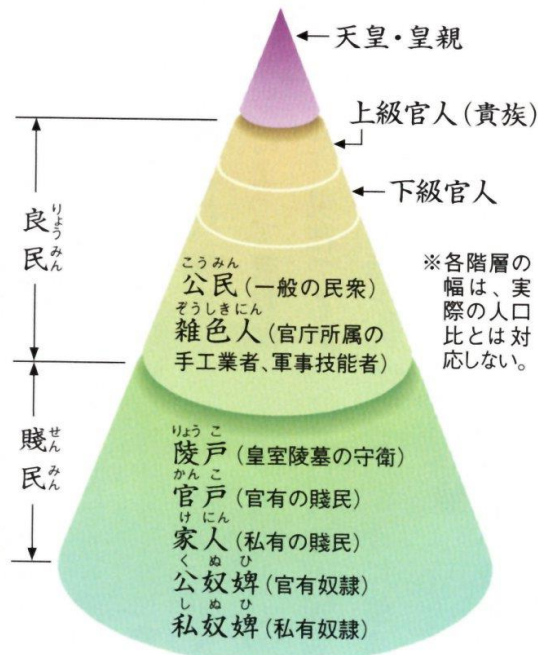
律令国家の成立期に出された律令は近江令、飛鳥浄御原令、大宝律令、養老律令の4つがあるが、近江令と飛鳥浄御原令は令のみで、律は制定されなかったとみられている。律令国家は整然とした官僚機構を備え、公卿を中心とする太政官の下に8つの省が置かれ、政務を分担した。

飛鳥・奈良期の律令一覧				
名称	近江令	飛鳥浄御原令	大宝律令	養老律令
制定年	668年?	不明	701年	718年
施行年	671年?	689年	701~702年	757年
制定時の天皇	天智天皇	天武天皇?	文武天皇	元正天皇
編者	中臣(藤原)鎌足ほか	草壁皇子ほか	刑部親王・藤原不比等ほか	藤原不比等ほか
	現存せず(存在を否定する説あり)	現存せず	現存せず(『令集解(りょうのぎげ)』『令集解』などにより一部復元)	令はほぼ伝存(『令義解(りょうのぎげ)』『令集解』などによる)律は一部現存

すでに奴隷制度が存在した

身分制度

律令国家における身分制度は、まず貴族から一般民衆までを含む良民と、それ以外の賤民とに分けられた。賤民は5種類に分けられ(五色の賤)、奴婢とよばれる奴隷が存在した。また、良民と賤民の通婚は禁止されていた。

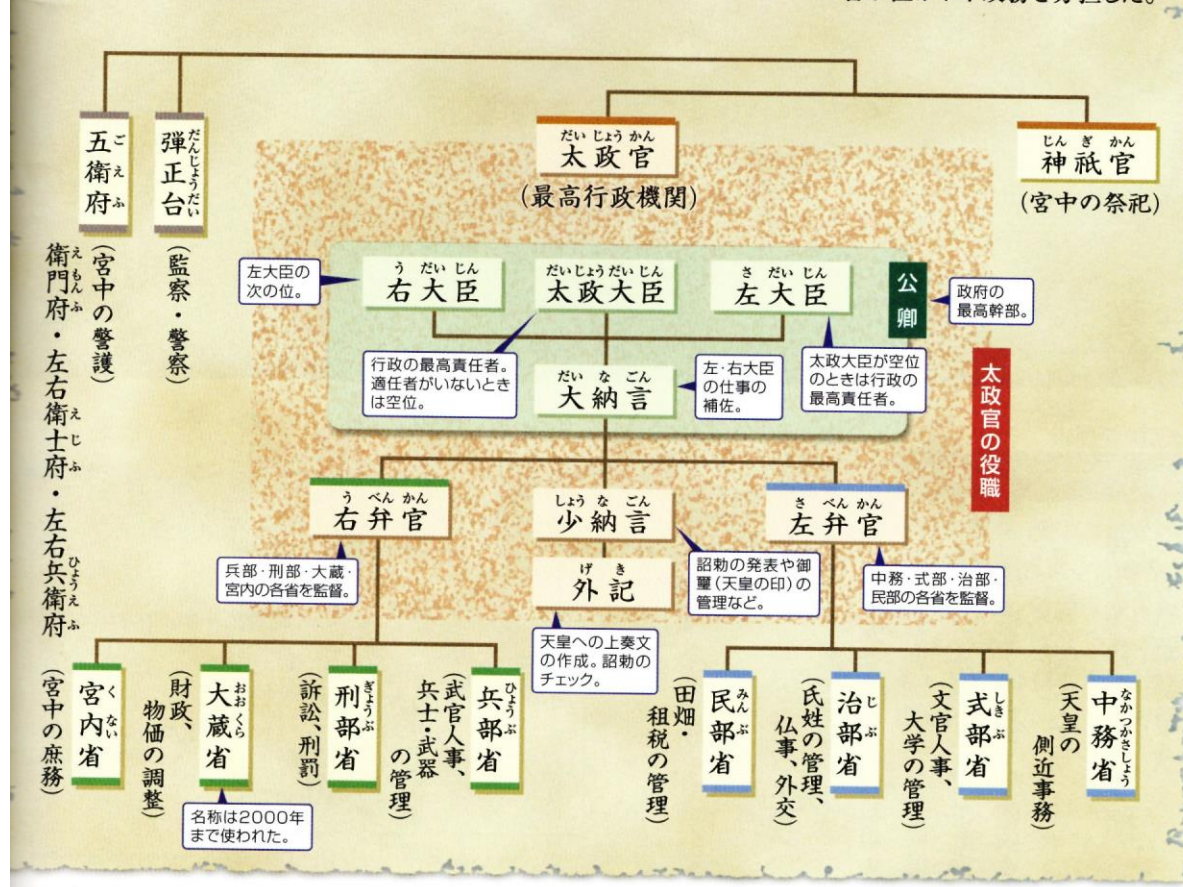


律令国家の身分ピラミッド

律令国家における身分秩序を概略的に示した。上級官人以上の高位者の子孫は、自動的に一定以上の位に叙位された(蔭位の制)。また、皇室陵墓の守衛を務める陵戸が賤民にされているのは、死を忌み嫌うケガレの思想から。

日本という国号

天武天皇の御代、689年に「飛鳥浄御原令」、さらにつづいて701年には「大宝律令」が制定され、それによって国号も「日本」に定められたと考えられています。日本国内にのこる史料ではいつから「日本」とよばれるようになったのか、明確な記録がのこされていません。ただ中国の史料によると、「唐」を「周」という国号に改めた則天武后(そくてんぶこう、623頃-705)に面謁した日本の使者(遣唐使)が「702年」に、自分たちの国が唐(周)の中国側が呼ぶ『倭』ではなく『日本』であると名乗っている。(Net)



(図説 古代史、成美堂出版)

律令税制・土地制度・貨幣

飛鳥時代

律令税制・土地制度・貨幣

戸籍中の表記

〈漢数字〉
壹 貳 參 肆 伍 陸 柒 捌 玖 拾
一 二 三 四 五 六 七 八 九 十

〈年齢呼称*〉 (大宝令)

年齢	3歳以下	4~16歳	17~20歳	21~60歳	61~65歳	66歳以上
男	緑子 見	小子	少丁	正丁	老丁	耆老
女	緑女	小女	少女	正女	老女	耆女

個人情報を管理するための台帳

戸籍

律令国家は、全国のすみずみにその支配を行き渡らせるため、戸籍を作成し、戸を単位として戸主とその構成員(家族・親族)の姓名、年齢、続柄などの個人情報を記録した。戸籍の作成は6年ごとに行われ、身分の確定、班田取授、税の徴収、労役や兵役への徴発の際に基本台帳として使われた。下の写真は、702年に作成された筑前国(福岡県)嶋郡川辺里の戸籍の断簡で、現存する最古の戸籍の一つである。

*下の写真に記された「老夫」「丁妻」という年齢呼称は、「老丁」「正女」の別称と推定される

古代の税は米と布と労役が主だった

公民の税負担

律令制下における公民は、国家に対してさまざまな形で租税を納める義務を負った。それらは大きく分けて、①米を中心とする穀物の徴収(租、義倉など)、②繊維製品や特産物など穀物以外の生産物の徴収(調、庸など)、③土木工事などへの労役や対外防衛の兵役(雑徭、防人など)の3つである。



律令制における税

税の種類	正丁 21~60歳の男子	老丁 61~65歳の男子	少丁 17~20歳の男子
庸(布)	2丈6尺(約8m)	正丁の1/2	—
調(繊維製品・特産物)	絹布8尺5寸(約2.8m)、糸8両(300g)などから1つ	正丁の1/2	正丁の1/4
雑徭(労役)	年間60日以内	正丁の1/2	正丁の1/4
兵役(軍団・防人など)	3人に1人を徴発	—	—
仕丁(中央での労役)	50戸あたり2人を3年間徴発	—	—
調副物	塩・漆・紫・紅などのうち1つ納入	—	—
租(稲)	男女とも田1段につき稲2束2把		
義倉(食糧備蓄)	親王を除く全戸が貧富に応じて雑穀を納める		
出挙	稲などを貸付け、秋の収穫から利息つきで回収		

以上はすべて男性にのみ賦課された。

荷札の木簡

京まで運ぶ調や庸の荷物につけられた木簡。平城京や藤原京の跡から出土している。右の木簡には「尾張国海部郡魚鱈三斗六升」と記されており、尾張国(現在の愛知県)から都まで鱈(なれずし)が送られていたことがわかる。



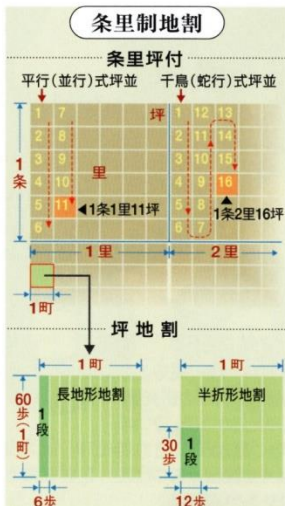
その遺構が今も各地に残る

条里制

班田取授法を実施するにあたり、政府は田地を整然と区画した。これを条里制といい、律令国家の支配がおよんだほぼ全国で行われた。地割りの方法は、まず1辺360歩(約648m)の正方形に区画し、その南北を1条、東西を1里として、この1区画を里と名づける。これを36等分した1区画を坪とよび、さらに10等分して班田の単位とした(坪地割)。



奈良盆地には今も、条里制の名残をとどめる区画が多く残る(写真は田原本町付近)。



重労働だった税の運搬
公民が負担する税のうち、調と庸は公民が都まで運ばなければならなかった。この運搬をする人夫を運脚といい、都から離れた地方に住む者にとっては非常に大きな負担となっていた。地方によっては都まで50日以上かかるにもかわからず、公民は官道沿いの駅家を利用できず、しかも食糧は自弁だったので、帰路に餓死する者も多かったといわれる。

地方から都(平安京)までの運脚日数

出発地(現在の都道府県)	運脚日数(日)
越前(福井)	7
信濃(長野)	21
長門(山口)	21
武蔵(埼玉)	29
越後(新潟)	34
土佐(高知)	35
出羽(山形)	47
陸奥(福島)	50



和同開珎
708年5月に銀銭(右写真)がつくられ、8月に銅銭(左写真)の鑄造が始まった。銅銭がある程度流通すると銀銭は廃止された。

(図説 古代史、成美堂出版)

高松塚古墳・キトラ古墳

畿内では7世紀末から8世紀初頭で古墳文化は終焉したとみられる。この古墳文化の終末期を飾る二つの古墳が高松塚古墳とキトラ古墳である。高松塚古墳は4人の女子を描いた壁画で有名であり、キトラ古墳は世界最古といわれる天文図で有名である。両者は古墳の形態やつくりが似通っており、四神や天文図が描かれるなど、中国や朝鮮の影響を色濃く見て取ることができる。

天文学の専門家がキトラ古墳の天文図を分析したところ、キトラ古墳が造られる数百年前に観測された天文図の可能性があるとのこと。詳しくは西暦400年ごろに観測されたものと推測されています。また、観測された場所は北緯34度付近と推測され、当時そこには洛陽や長安が存在。当時の技術水準から古代中国の主要都市で制作され、その後明日香村に渡ってきた可能性があるとのこと。
(Net ほほう。キトラ古墳に描かれた天文図は西暦400年頃の星空の可能性)

(図説 古代史、成美堂出版)

飛鳥時代

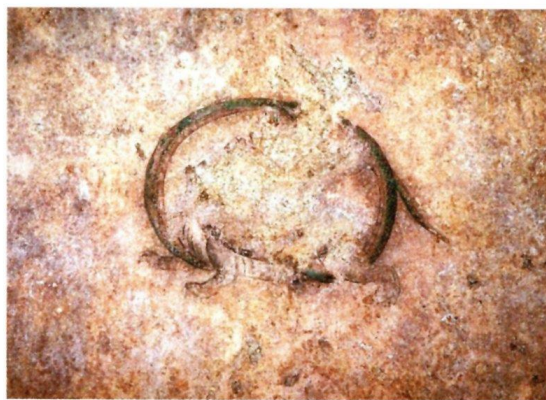
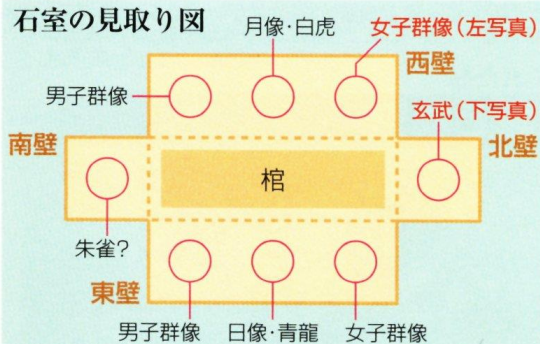
高松塚古墳・キトラ古墳



女子群像の壁画であまりに有名

高松塚古墳

高松塚古墳は1972年に発掘調査が行われ、鮮やかな彩色壁画(国宝)が発見されたことで知られる。つくられた年代は藤原京の時期ではないかとみられ、被葬者は天武天皇の皇子など諸説ある。石室内部は東西南北および天井に壁画が描かれ、なかでも西壁の女子群像は有名。壁画の劣化が著しくなったため、石室ごと取り出して修復作業が行われた。



玄武

中国古来の四神の一つで、北方の守護神。足の長い龜に蛇が巻きついた姿で描かれる。高松塚古墳では北壁に描かれ、ほかの3つの神(東壁・青龍、南壁・朱雀、西壁・白虎)とともに、石室におさめられた棺を守る。

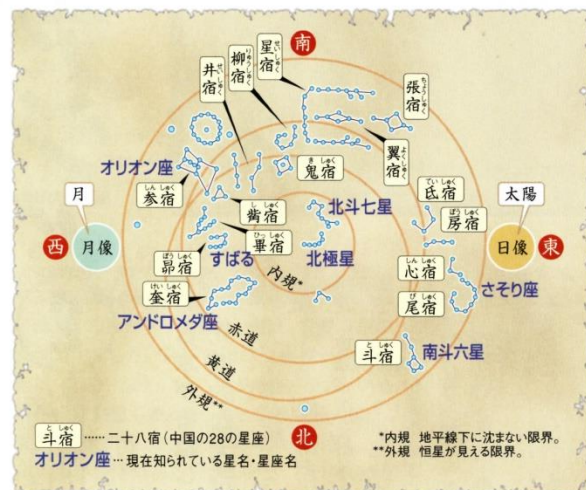


西壁女子群像

有名な西壁の女子群像には4人が描かれており、朝賀の儀式か葬送の儀式を描いたものといわれている。上写真は模写。左写真はカビによる損傷・劣化が進んだ修復前の壁画。



キトラ古墳の石室天井(下が北)。丸い金箔を貼りつけて朱色の線で結んだ星座と、星の軌道、黄道、赤道、および太陽と月を描いた天文図が描かれている。



天井の天文図(略図)

約350個の星が描かれ、68の星座をなしていることが判明している。オリオン座やさそり座など、現在でもおなじみの星座もみられる。

白虎 中国の四神の一つ。西方の守護神で、石室の西壁に描かれている。

世界最古ともいわれる天文図を今に伝える

キトラ古墳

キトラ古墳は高松塚古墳の1kmほど南にある。つくられた年代は高松塚とほぼ同年代と推定され、被葬者は天武天皇の皇子か側近の人物ではないかとみられている。高松塚同様、カビなどによる壁画の劣化が著しく、修復・保存のため、壁画は剥ぎ取られた。





飛鳥浄御原宮の北端とみられる大規模な石組み溝—6日、奈良県明日香村

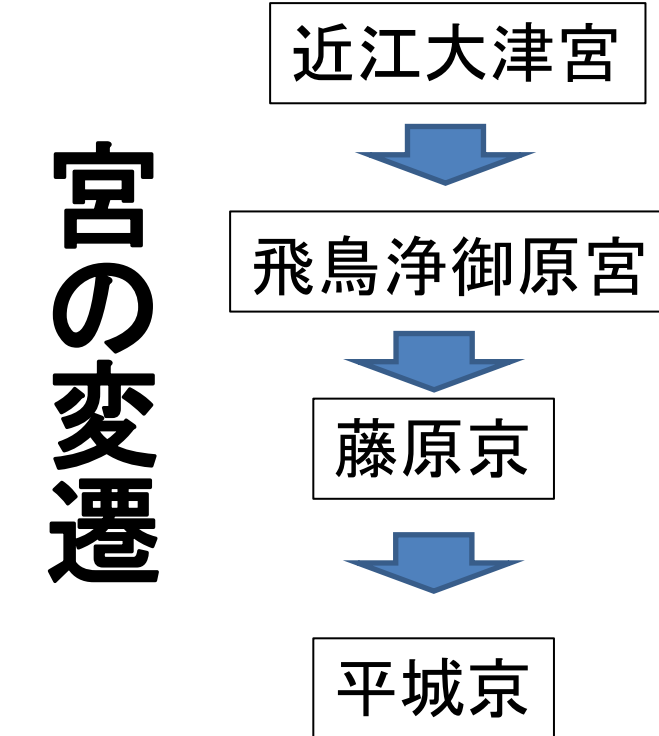


現在は水田が広がる飛鳥浄御原宮の推定位置。手前が北端とみられる石組み溝、中央奥に正殿があったとみられる。奈良県明日香村(本社へりから)

やはり狭かった？ 飛鳥浄御原宮

天皇中心の中央集権国家を築いた天武天皇(在位673-686年)が造営した「飛鳥浄御原宮」があったとされる奈良県明日香村の飛鳥京跡で、過去最大級の飛鳥時代(7世紀後半)の石組み溝が見つかり、県立権原考古学研究所が6日、発表した。飛鳥浄御原宮の北限を区切る溝の可能性もあるという。北限の溝であれば、飛鳥浄御原宮は南北約800

北限の石組み溝か



飛鳥浄御原宮中枢部の復原模型
天武天皇・持統天皇の二代にわたる皇宮となった飛鳥浄御原宮は、斉明天皇が建てた後飛鳥岡本宮を整備し、拡張した宮殿と考えられる。飛鳥浄御原宮の北西には広大な苑池が作られており、華やかな宮廷生活の一端がしのばれる。
<https://www.nabunken.go.jp/contents/fujiwara/tenmu/2-4.html>

遷都とほぼ同時期の7世紀末に埋められたという。大型溝より北側には、飛鳥浄御原宮の時代の建築物は確認されず、約1000以北には、蘇我入鹿の祖父、馬子が建立した最古の御廟・飛鳥寺がある。同研究所は「飛鳥浄御原宮の北端の可能性はあるが、宮の内外を区切る堀は見つかっておらず、さらに慎重に調査したい」としている。現地説明会は11日正午から午後4時。近鉄権原神宮前駅からバスで飛鳥大仏前下車、徒歩5分。入鹿邸とみられる石垣が見つかった甘樫丘東麓遺跡跡は、すぐ南西に位置し、見学会も同時刻に行われる。和田琴江京都教育大教授(古代史)の話 「飛鳥浄御原宮は飛鳥寺より南にあったと考えられ、今回見つかった溝が宮の北限の可能性が高い。宮は周囲が川や丘に囲まれていて、国家体制の整備につれて拡張するのが困難になったため、藤原京へ遷都したのだ」と

藤原京 (Wikipedia抜粋) ; 藤原京は平城京より大きい

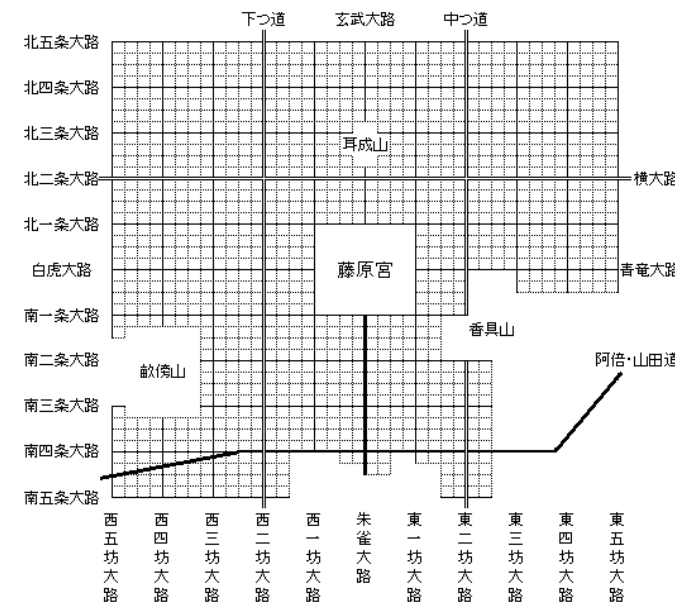
藤原京(ふじわらきょう)は、飛鳥京の西北部、奈良県橿原市と明日香村にかかる地域にあった飛鳥時代の都城。日本史上で最初の条坊制を布いた本格的な唐風都城でもある。平城京に遷都されるまでの日本の首都とされた。

概要

694年(持統8年)から710年(和銅3年)までの16年間、都城制を敷いた初めての都で、日本で初めて国家体制が確立された大化の改新(645年)以後、その新しい国家の首都として造営された日本で最初の都市である。持統天皇4年(690年)に着工し、4年後に飛鳥浄御原宮から宮を遷したとある。それまで、天皇ごと、あるいは一代の天皇に数度の遷宮が行われていた慣例から3代の天皇(持統・文武・元明)に続けて使用された宮となったことは大きな特徴としてあげられる。この時代は、刑罰規定の律、行政規定の令という日本における古代国家の基本法を、飛鳥浄御原(あすかきよみはら)令、さらに大宝律令で初めて敷いた重要な時期と重なっている。政治機構の拡充とともに壮麗な都城の建設は、国の内外に律令国家の成立を宣するために必要だったと考えられ、この宮を中心に据え条坊を備えた最初の宮都建設となった。実際の建設は、その後の研究により、すでに676年(天武天皇5年)には開始され(これを倭京と呼ぶ)、宮都が完成したのは遷宮から10年も経った704年(慶雲元年)とも言われ、着工から28年が経過したことになる。以来、宮にはの三代にわたって居住したが、完成から4年後の708年(和銅元年)に元明天皇より遷都の勅が下り、710年(和銅3年)に平城京に遷都された。その翌年の711年(和銅4年)に、宮が焼けたとされている(『扶桑略記』、藤原宮焼亡説参照)。

藤原京の範囲

藤原京は当初、大和三山(北に耳成山、西に畝傍山、東に天香久山)の内側にあると想像され、東西1.1km、南北3.2km程度とみられていた。しかし1990年代の東西の京極大路の発見により、規模は、5.3km(10里)四方、少なくとも25km²はあり、平安京(23km²)や平城京(24km²)をしのぎ、古代最大の都となることがわかり、発見当時は「大藤原京」と呼んでいた。この広大な京域は、南側が旧来の飛鳥にかかっており、「倭京」の整備に伴って北西部に新たに造営された地域を加え、持統天皇期に条坊制の整備に伴う京極の確立とともに倭京から独立した空間として認識されたとみられている。



飛鳥時代
藤原京



最大の都・藤原京

従来、藤原京は大和三山よりも内側の1帯を都市域としていたと考えられていたが、2004年の発掘調査で藤原京北端の大路の跡が見つかり、従来よりもはるかに広い都市域をもっていたことが明らかにされた。右の地図に示した範囲がそれで、面積は平城京や平安京を上回る25km²で、日本の古代の宮都では最大の面積をもっていたとみられる。

宮都の大きさ	面積
・藤原京	25km ²
・平城京	24km ²
・平安京	23km ²
・長安城(中国)	84km ²

藤原京のトイレ問題 ~歴史DEエコ シリーズ②~ - ゆーくんはどこ ...
 Yahoo!ブログ - Yahoo! JAPAN-749 x 450-画像で検索
 694年に飛鳥浄御原宮から遷都した「藤原京」です



藤原京

旗竿穴7カ所 「続日本紀」記述を裏付け
毎日新聞2016年9月29日 東京朝刊



ムーンライトイン藤原京2008 2008/10/04 (Sat)

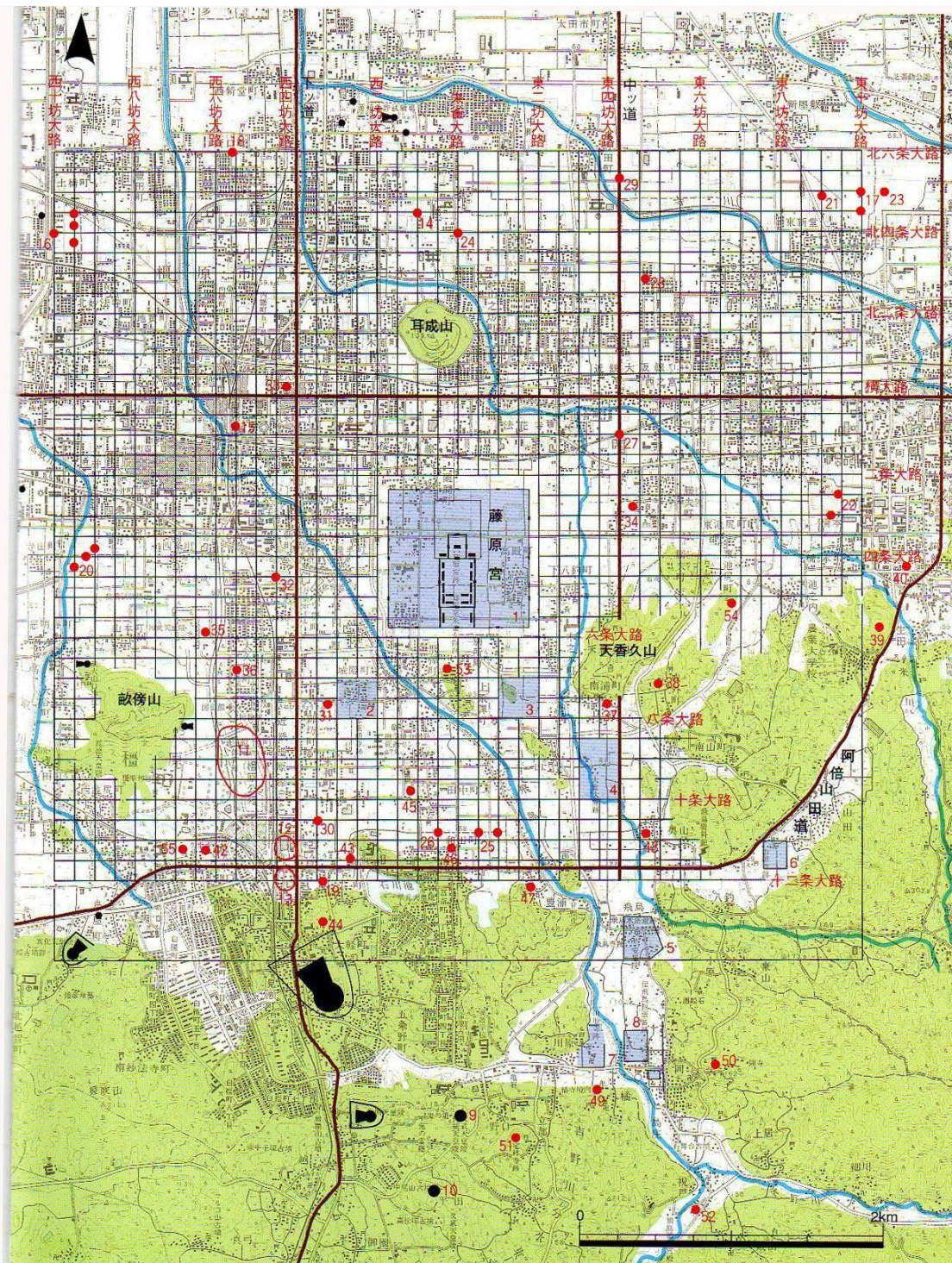


図1 藤原京とその周辺 (S=1/30000、展示に関する遺跡、番号は左に対応、●は墳丘を残す古墳)

- 1. 藤原宮 2. 本薬師寺 3. 小山廃寺(紀寺) 4. 大官大寺 5. 飛鳥寺 6. 山田寺 7. 川原寺 8. 飛鳥宮
- 9. 天武・持統天皇陵 10. 中尾山古墳 11. 橿原遺跡 12. 丈六北遺跡 13. 丈六南遺跡
- 14. 下明寺遺跡(西一坊大路、北五条間路) 15. 院上遺跡(西六坊間路)
- 16. 土橋遺跡(西十坊大路、西十坊間路、北五条間路、北四条大路)
- 17. 上之庄遺跡第4、10次(東十坊大路、北五条大路南側溝)
- 18. 右京北六条六坊(北六条大路) 19. 右京十二条四坊(十二条大路北側溝)
- 20. 四条シナノ遺跡(西九坊大路、西十坊間路、四条大路) 21. 大藤原京関連遺跡第46次(東九坊大路)
- 22. 吉備池廃寺(三条間路南側溝、三条大路北側溝) 23. 上之庄遺跡第5次
- 24. 左京北四・五条一坊(朱雀大路東側溝、北四条大路) 25. 左京十一條一・二坊(東一坊間路、東一坊大路)
- 26. 右京十一條一坊(西一坊間路) 27. 左京一・二条四・五坊(中ッ道・東四坊大路、一条大路) 28. 大福遺跡
- 29. 東竹田遺跡 30. 右京十一條四坊第5、7、9次 31. 木殿(現、城殿町、井戸2基) 32. 四条池(井戸3基)
- 33. 八木廃寺 34. 膳夫寺 35. 塔垣内廃寺 36. 大窪寺 37. 日向寺 38. 興善寺 39. 青木廃寺 40. 安倍寺 41. 高田廃寺
- 42. 久米寺 43. 石川廃寺 44. 軽寺 45. 田中廃寺 46. 和田廃寺 47. 豊浦寺 48. 奥山廃寺 49. 橋寺 50. 岡寺
- 51. 立部寺 52. 坂田寺 53. 日高山瓦窯 54. 三堂山瓦窯 55. 久米寺瓦窯

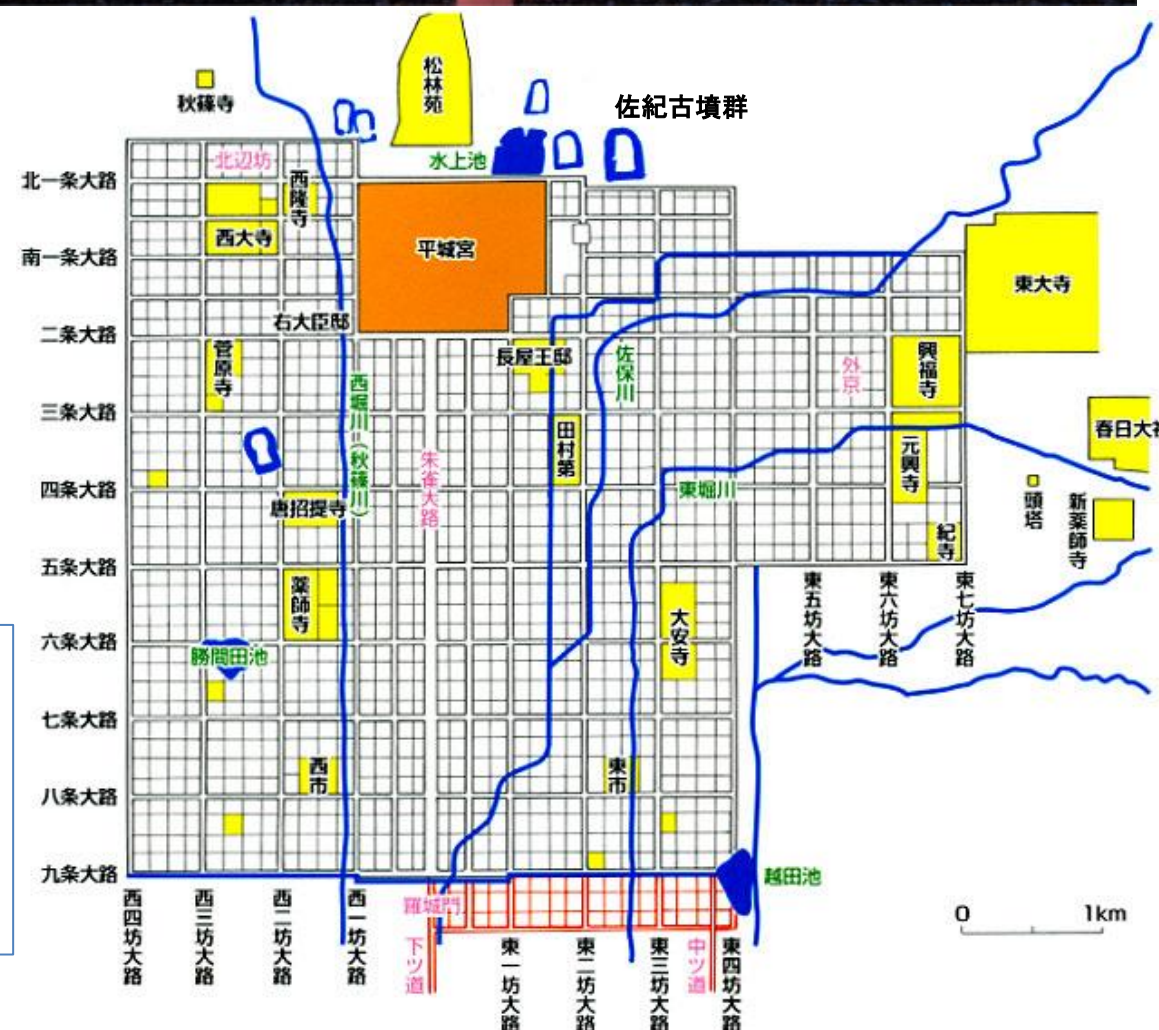
権者研特別陳列「藤原京の実態-持統・文武・元明三代の都」(平成20年2月9日-3月23日)の展示解説書

平城京

藤原京から平城京への遷都は文武天皇在世中の707年(慶雲4年)に審議が始まり、708年(和銅元年)には元明天皇により遷都の詔が出された。しかし、710年(和銅3年)3月10日(旧暦)に遷都された時には、内裏と大極殿、その他の官舎が整備された程度と考えられており、寺院や邸宅は、山城国の長岡京に遷都するまでの間に、段階的に造営されていったと考えられている。740年(天平12年)、恭仁京や難波京への遷都によって平城京は一時的に放棄されるが、745年(天平17年)には、再び平城京に遷都され、その後784年(延暦3年)、長岡京に遷都されるまで政治の中心地であった。山城国に遷都したのは南都(なんと)とも呼ばれた。(Wikipedia抜粋)



平城京のメインストリートは、京の南門である羅城門から北にまっすぐのびる幅約74mの朱雀大路です。朱雀大路をはさんで西側を右京、東側を左京といいます。左京に北の方で東にさらに張り出しがありました。平城京は大小の直線道路によって、碁盤の目のように整然と区画された宅地にわけられてます。平城京の住民は4~5万人とも10万人ともいわれますが、天皇、皇族や貴族はごく少数の百数十人程度で、大多数は下級役人や一般庶民たちでした。(シルクロードオアシス 大宮通り商工振興会、平城京、Net)



下三橋遺跡第1次発掘調査. Net
平城京条坊復元図(朱線は今回発見の条坊遺構を元に復元)

難波宮

前期難波宮

乙巳の変ののち、645年に孝徳天皇は難波(難波長柄豊崎宮)に遷都し、宮殿は652年に完成した。元号の始まりである大化の改新とよばれる革新政治はこの宮でおこなわれた。この宮は建物がすべて掘立柱建物から成り、草葺屋根であった。『日本書紀』には「その宮殿の状、殫(ことごとくに)諭(い)ふべからず」と記されており、ことばでは言い尽くせないほどの偉容をほこる宮殿であった。

孝徳天皇を残し飛鳥(現在の奈良県)に戻っていた皇祖母尊(皇極天皇)は、天皇が没した後、655年1月に飛鳥板蓋宮で再び即位(重祚)し斉明天皇となった。

683年(天武12年)には天武天皇が複都制の詔により、飛鳥とともに難波を都としたが、686年(朱鳥元)正月に難波の宮室が全焼してしまった。

後期難波宮

奈良時代の神亀3年(726年)に聖武天皇が藤原宇合を知造難波宮事に任命して難波京の造営に着手させ、平城京の副都とした。中国の技法である礎石建、瓦葺屋根の宮殿が造られた。

その後、聖武天皇は平城京から恭仁京へ遷都を行っているが、天平16年(744年)に入ると難波京への再遷都を考えるようになる。この年の閏1月11日、聖武天皇は行幸を名目に難波宮に入り、2月26日に難波京への遷都の詔が正式に発表された。もともと、その2日前に聖武天皇は再々遷都を視野に入れて紫香楽宮に行幸しており、難波宮には元正上皇と左大臣橘諸兄が残された。このため、聖武天皇と元正上皇との間の政治的対立を想定する説や難波遷都は紫香楽宮の都城設備が完成するまでの一時的な措置であったとする説もある。

最終的に翌天平17年1月1日、難波京から紫香楽宮へ遷都が正式に発表された。難波遷都も紫香楽遷都も聖武天皇の意向であったと考えられ、短期間での方針変更が混乱を招いたと言えよう。

784年、桓武天皇により長岡京に遷都[7]された際、大極殿などの建物が長岡京に移築された。

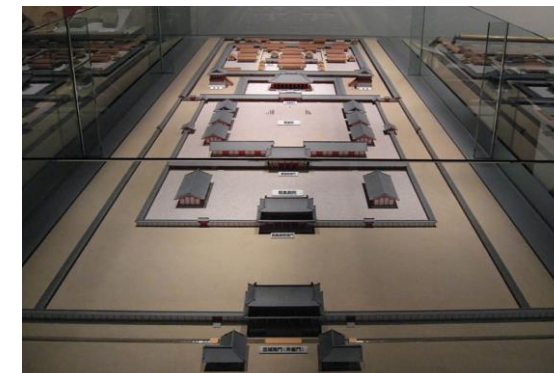
(Wikipedia抜粋)



幻の都・難波宮-あおもりのなんやかんや、Net



前期難波宮、Wikipedia



後期難波宮、Wikipedia

律令国家の地方制度

律令国家では、地方のすみずみにまで中央の支配を行きわたらせるべく、行政区画などを含めた地方の強制組織全体を編成し直す必要が生じた。そのため、全国は国、郡、里の3ランクの行政組織ないしは区画に整理され、それぞれ国司、郡司、里長により管轄統治されることとなった。現在でも地方などに残る旧国名は、その殆どがこの時期に生まれたものである。

国司は中央から派遣され、数年おきに交替して各国の支配に当たった。一方、郡司は在地の有力者(豪族)が務め、終身で世襲も認められていた。また、里長は有力農民のなかから選ばれ、行政の末端で徴税などの業務を行った。

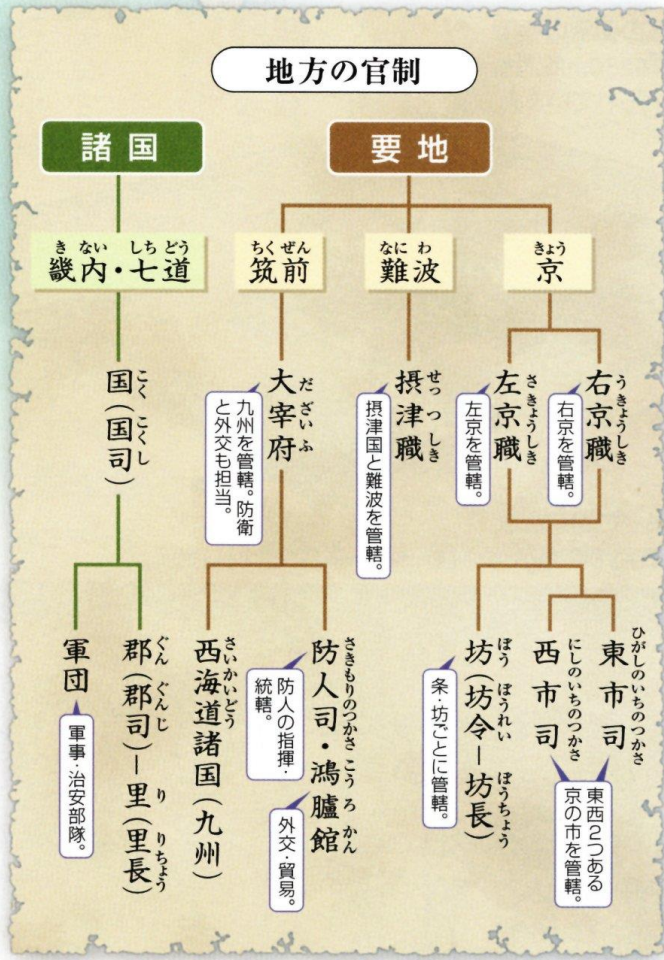
幹線道路としての官道の整備も進められた。諸国は官道沿いに畿内・七道にまとめられ、対外的に最も重要な筑前国には大宰府が置かれた。また、畿内から東国への出口には3つの関所(不破の関、愛発(あらしの)関、鈴鹿の関)が設置された。

(図解 古代史、成美堂出版)

3つの要地とその他の諸国

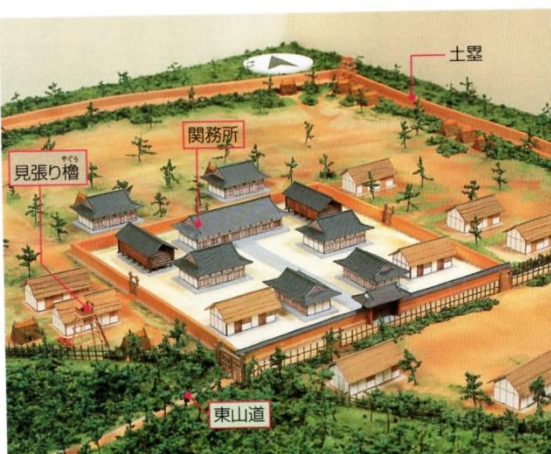
地方支配のしくみ

律令国家の地方支配は、京・難波・筑前の要地とそれ以外の諸国とにまず分けられた。3つの要地はそれぞれ左・右京職、摂津職、大宰府が担当したが、摂津職は難波宮の廃止(793年)とともに廃止された。畿内と七道の諸国は国司が受けもった。



畿内
当初、畿内は大倭(大和)、河内、摂津、山背(山城)の4カ国であったが、奈良時代の中ごろに河内から和泉が分割され、5カ国となった。

不破関
不破関は東山道の関所で、現在の岐阜県関ヶ原町にあった。東海道の鈴鹿関、北陸道の愛発関とあわせて三関とよばれ、これより東を東国とした。反乱の際には東国と遮断する「固関」が行われた、京を守る防衛拠点であった。写真は不破関の復元模型(不破関資料館)。



地方政治の中心となった建物

地方の政庁

国や郡において政務が執り行われた政庁を国府、郡家とよぶ。国府の中心をなす国府は、建物のつくりがどこも似通っており、南に正門をもち、塙で囲われた方形の区画の中に正殿や脇殿を配する。



大宰府政庁
大宰府は九州支配の中心で、外交の窓口でもあったから、建物もほかの地方政庁より立派な作りだった。写真は平安時代中期の大宰府政庁の復元模型(九州国立博物館)。

(図説 古代史、成美堂出版)

五畿七道

古代の行政区分

天武天皇により、日本および天皇の称号が決められ、古代の道名や国名の命名に関わった。図のように近江を畿内から外し、山陽と山陰を併せて中国とし、山陽を高天原を示すと思われ、山陰は黄泉の国に近いイメージであろう。

畿内をなした五国は、山城、大和、河内、和泉、摂津であり、ツングース諸族や扶余系民族の場合のように、東西南北中の5部制に由来するもので、河内が中心となる。
(古代日本異族伝説の謎、田中勝也)

五畿七道（天武天皇の時代に成立）

五畿七道は、畿内（山城、大和、河内、和泉、摂津）と東海道、東山道、西海道、南海道、北陸道、山陽道、山陰道の七道からなる。これを東西南北に分ければ、東海道と東山道が「東国」、西海道が「西国」、南海道が「南国」、北陸道が「北国」という分類になる。七道のうち、「東西南北」の文字が含まれていない「山陽道と山陰道」は、中心の国を意味する「中国」と呼ぶ。

中国の山陽道の「陽」は、「日＝太陽＝天道」にほかならない。これに対して、山陰は同じ中国でも、まったく正反対の陽のあたらない日陰の山の意味が与えられている。したがって、山陽道の名付け方が高天原に近いというなら山陰道のイメージは黄泉の国に近いといえる。そして、古代の山陽を代表する国はのちに備前、備中、備後、美作に分類された大国の吉備であり、五畿七道は吉備を中心において設定されたと考えられる。

(大国主対物部氏、藤井)

古代にも国道の整備が進められた

道路の整備

律令国家は道路の建設や整備も進めた。行政区画にもなっている七道は、都から地方へ通じる7つの官道の名称であり、官道沿いには約16kmごとに駅家が設置されて、出張する官人に宿や馬を提供した。

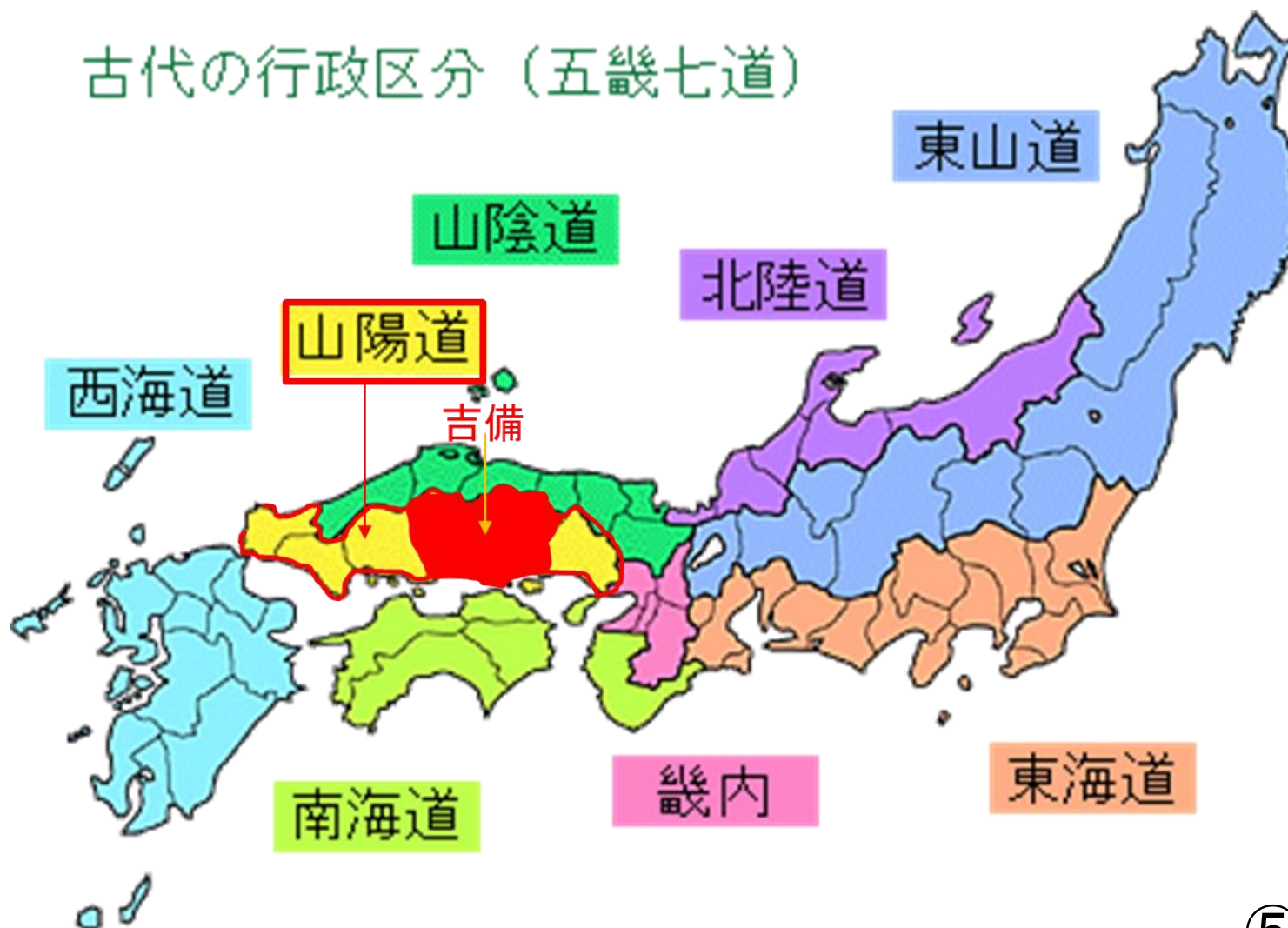


東山道武蔵路遺構

東山道武蔵路は、上野国国府（現在の群馬県前橋市）と武蔵国国府（現在の東京都府中市）を結んだ官道。上写真の遺構は埼玉県所沢市で発掘されたもので、道幅は約12mもあった。

(図説 古代史、成美堂出版)

古代の行政区分（五畿七道）



東北平定

飛鳥時代 東北平定



7世紀後半の東北平定

主に日本海側で進められた。太平洋側(現在の岩手県以北)の平定が進むのは8世紀後半以降である。



羊蹄山
 阿倍比羅夫が遠征したともいわれる北海道南部には、比羅夫にちなんだ地名がいくつかみられる。羊蹄山は後方羊蹄山ともいい、「日本書紀」の阿倍比羅夫遠征に関する記述に出てくる地名「後方羊蹄」にちなむ。

日本領が北へ北へと拡大 東北地方への進出

大化改新が進められた7世紀後半には、対外的な緊張が高まったこともあり、政府は国防体制の整備だけでなく、支配領域の拡大も積極的に進めた。当時まだ蝦夷とよばれる人びとが居住していた東北地方の征服・平定が始まり、現在の新潟県に湊足柵や磐舟柵が設置された。さらに、阿倍比羅夫率いる水軍が現在の秋田・青森県から北海道南部にかけて遠征し、蝦夷のほか粛慎(民族系統不明)を討つたと『日本書紀』に記録されている。

太平洋側の平定 坂上田村麻呂

田村麻呂が若年の頃から陸奥国では蝦夷との戦争が激化しており(蝦夷征討)、延暦8年(789年)には紀古佐美の率いる官軍が阿豆流為の率いる蝦夷軍に大敗した。田村麻呂はその次の征討軍の準備に加わり、延暦11年(792年)に大伴弟麻呂を補佐する征東副使に任じられ、翌延暦12年(793年)に軍を進発させた。この戦役については『類聚国史』に「征東副將軍坂上大宿禰田村磨已下蝦夷を征す」とだけあり、田村麻呂は4人の副使(副將軍)の1人ながら中心的な役割を果たしたとされる。(Wikipedia抜粋)

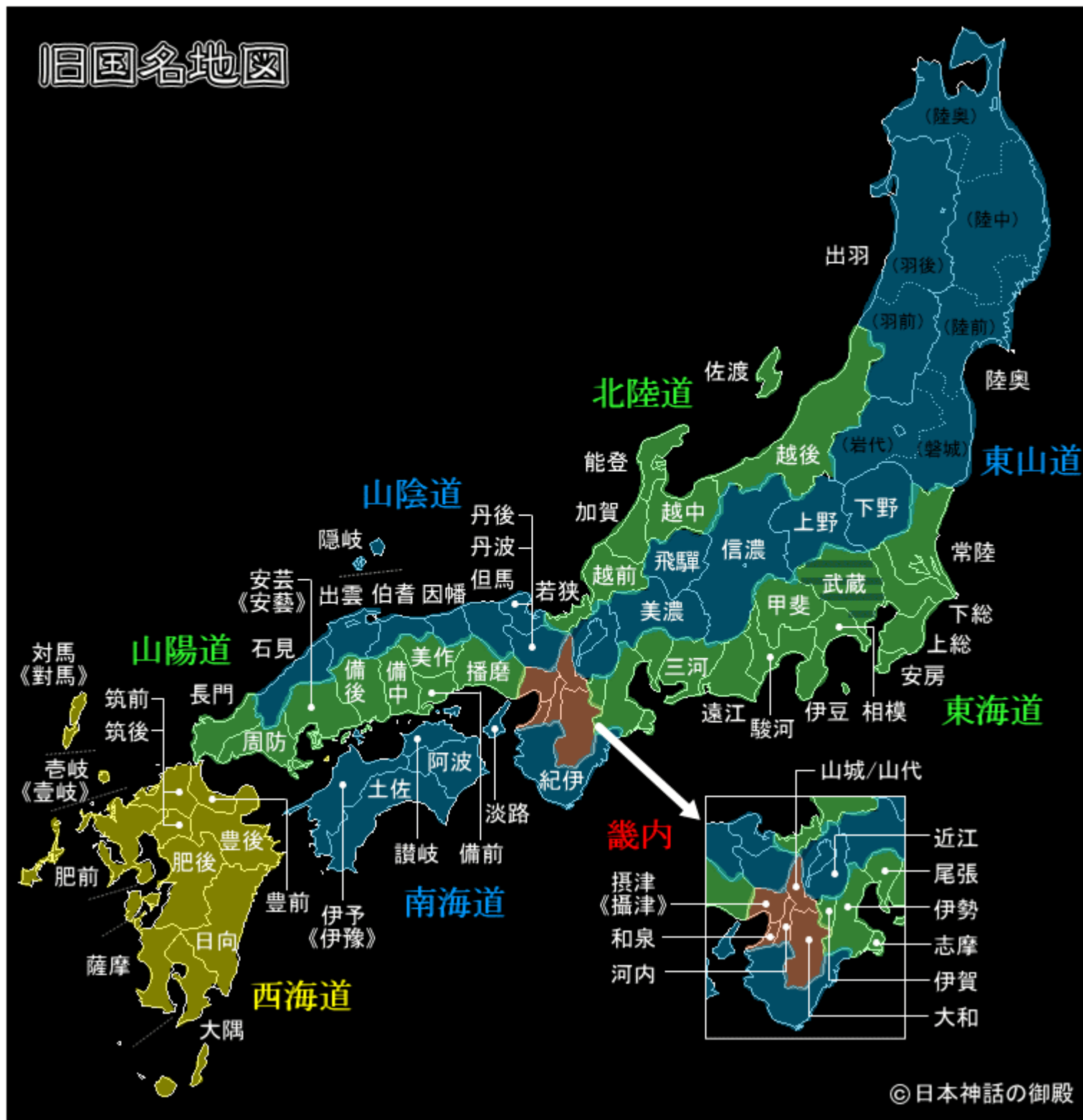


古四王神社
 秋田市にある神社で、阿倍比羅夫が遠征した折に創建したとされる。秋田県や山形県、新潟県には、漢字表記は異なりながらも同じ「こしおう」の名をもつ神社が多い。

109

(図説 古代史、成美堂出版)

旧国名地図



- 畿内**
- 山城国 やましろ(山州)
- 河内国 かわち(河州)
- 和泉国 いずみ(泉州)
- 摂津国 せっつ(摂州)
- 東海道**
- 伊賀国 いが(伊州)
- 伊勢国 いせ(勢州)
- 志摩国 しま(志州)
- 尾張国 おわり(尾州)
- 三河国 みかわ(三州)
- 遠江国 とおとうみ(遠州)
- 駿河国 するが(駿州)
- 伊豆国 いず(豆州)
- 甲斐国 かい(甲州)
- 相模国 さがみ(相州)
- 武蔵国 むさし(武州)
- 安房国 あわ(房州)
- 上総国 かずさ(総州)
- 下総国 しもうさ(総州)
- 常陸国 ひたち(常州)
- 東山道**
- 近江国 おうみ(江州)
- 美濃国 みの(濃州)
- 飛騨国 ひだ(飛州)
- 信濃国 しなの(信州)
- 上野国 こうずけ(上州)
- 下野国 しもつけ(野州)
- 陸奥国 みちのく(奥州)
- 出羽国 でわ(羽州)
- 北陸道**
- 若狭国 わかさ(若州)
- 越前国 えちぜん(越州)
- 加賀国 かが(加州)
- 能登国 のと(能州)
- 越中国 えっちゅう(越州)
- 越後国 えちご(越州)
- 佐渡国 さど(佐州)
- 山陰道**
- 丹波国 たんば(丹州)
- 丹後国 たんご(丹州)
- 但馬国 たじま(但州)
- 因幡国 いなば(因州)
- 伯耆国 ほうき(伯州)
- 出雲国 いずも(雲州)
- 石見国 いわみ(石州)
- 隠岐国 おき(隠州)

- 畿内**
- 山陽道**
- 播磨国 はりま(播州)
- 美作国 みまさか(作州)
- 備前国 びぜん(備州)
- 備中国 びच्चゅう(備州)
- 備後国 びんご(備州)
- 安芸国 あき(芸州)
- 周防国 すおう(防州)
- 長門国 ながと(長州)
- 南海道**
- 紀伊国 きい(紀州)
- 淡路国 あわじ(淡州)
- 阿波国 あわ(阿州)
- 讃岐国 さぬき(讃州)
- 伊予国 いよ(予州)
- 土佐国 とさ(土州)
- 西海道**
- 筑前国 ちくぜん(筑州)
- 筑後国 ちくご(筑州)
- 豊前国 ぶぜん(豊州)
- 豊後国 ぶんご(豊州)
- 肥前国 ひぜん(肥州)
- 肥後国 ひご(肥州)
- 日向国 ひゅうが(日州)
- 薩摩国 さつま(薩州)
- 壱岐国 いき(壱州)
- 対馬国 つしま(対州)

©日本神話の御殿

余談1

幻の富士山—『記紀』に全く記述されていない。

「富士山が現在のような形状になったのは縄文時代のことで、縄文人は、畏敬の念を抱いて見上げていたようだ。富士山本宮浅間大社のある静岡県富士宮市の台地に、縄文中期の環状列石が見つかっていて(千居=せんご=遺跡)、中央部に富士山をかたどった石が祀られている。他にも、山梨県都留市の牛石遺跡など、富士山周辺には複数の縄文遺跡が存在し、富士山を意識していたことが、遺物から読み取れる。弥生時代に水稻が列島に広がったとき、稲作に最後まで頑固に抵抗したのが富士周縁と考えられ、この地域に縄文文化をかたくなに守る大きな集団がいた。この集団が後の狗奴国の中核のひとつとなったため、ヤマト王権から無視されるようになった。4世紀の中旬ヤマトタケルの東征があり、『古事記』は相模で、『日本書紀』は駿河で火攻めに遭遇して草薙剣で焼き払って窮地を脱する。その後、東征の帰りに伊吹山で山の神の崇られ敗死する。富士山周縁での苦戦と伊吹山での敗死は、4世紀まで残存していた、狗奴国勢力ではないか。この狗奴国勢力は成務天皇時世に滅びたと思われる。富士山は東国のまつろわぬ勢力の象徴となったため、ヤマト政権から忌み嫌われたのではないか。

また、『日本書紀』を記した8世紀の朝廷が、なぜか不破関(関ヶ原)の東側を敵視し、警戒し、無視していたことも事実なのだ。この時代の朝廷は、都で不穏な動きがあると、必ず不破関など東に向かう道を封鎖した(三関=さんげん=固守)。西側に対してこのような処置が執られたことはなく、東国だけを警戒していたことがわかる。ここに、東国と富士山をめぐる大きな謎が隠されている。

『日本書紀』編纂時の権力者藤原氏は、蘇我氏ら旧豪族を蹴落としての上がった。しかも藤原氏の政敵の多くは、東国と深くつながり、後押しを受けていた。特に蘇我氏は、東国の軍団とつながっていた。だから藤原氏と東国との間には、埋めようのない深い溝が横たわっていたはずなのだ。

東北蝦夷征討は藤原政権下で始まったが、それはなぜかといえば、東国の軍事力を東北に振り向けることで、反藤原派の力を削ぐためだったのだろう。これが、蝦夷征討の隠された目的と思われる。

『日本書紀』は、蘇我氏を大悪人に仕立て上げることに成功した。そして、蘇我氏を後押ししていた東国のイメージダウンも狙ったのだ。だからこそ、東国人が愛してやまない富士山を、抹殺してしまったのだろう。東国人にとって、富士山は心の拠り所であり、畏敬の念を抱き続けてきた山だからだ。日本を代表する霊山が東国にあることを、『日本書紀』は記録できず、秘匿してしまったのだ。

(歴史作家・関裕二、Net 富士山周辺遺跡一覧／なぜ『記紀』は富士を無視したか?、富士山2,200年の秘密 戸矢 学)



幻の富士王朝—宮下文書

宮下文書は阿祖山太神宮(富士太神宮)の大宮司を代々つとめてきたという富士山麓(富士吉田市大明見)宮下家に保存されている古代文書であることからの名称である。この文書は、所謂、古史古伝の一つとされ偽書と断じられている。宮下文書は秦から渡来した徐福によって編纂され、弥生時代中期・後期に富士王朝があったという。富士王朝は高千穂王朝と対立したとされるがその存在の真偽は不明である。

(謎の宮下文書、佐治芳彦)

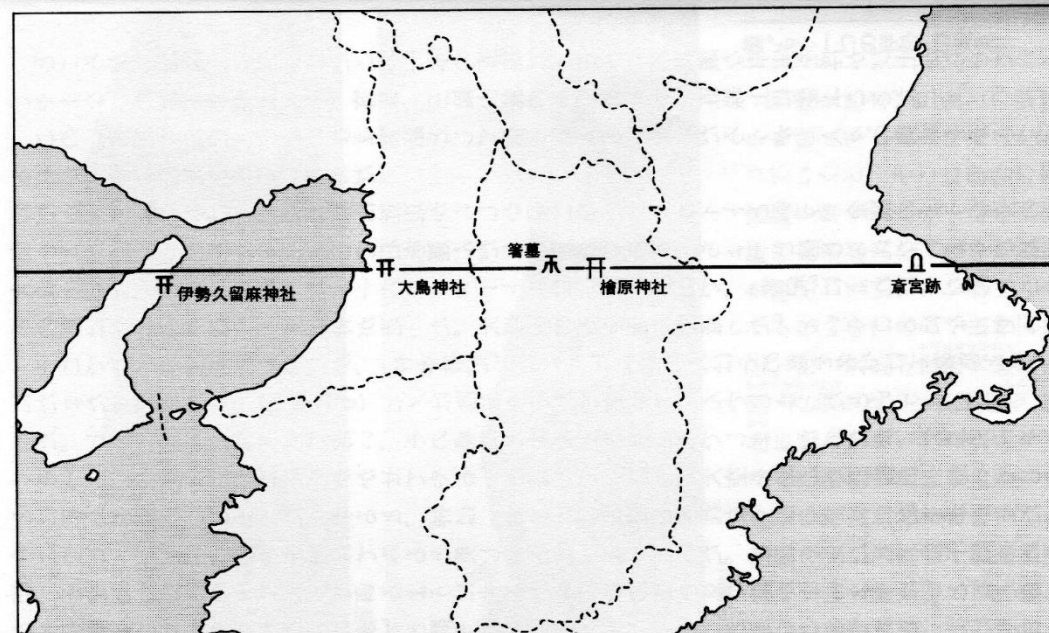
余談2

『記紀』説話と「太陽の道」

大和盆地を中心として山頂、神社、古墳、寺などが直線状に配備されているという。そのなかでももっとも有名なのは、NHKで放送された「太陽の道」(1980)であろう。これは、写真家の小川光三氏が発見した東西線で、北緯34度32分上、東の伊勢から淡路島までの、都合150キロメートル間に、神社・寺などが直線状に配置されているというものである。この直線が引かれたのは3世紀ごろと推定されている。というのは、この線上に我が国最古の古墳といわれ、3世紀ごろに築造されたと考えられる箸墓がのってくるからだ。箸墓は大阪山の石を運んで作ったといわれ、実際箸墓からは、大阪山近辺からしか産しないサヌカイトという、金属のような音のする石が実際に発見されている。人々の興味をかきたててやまないのは、この大阪山、箸墓、三輪山麓の檜原神社が一直線上に並ぶことである。

天照大神を伊勢に祀った倭姫はヤマトタケルの叔母である。ヤマトタケルは東征の帰り、伊吹山の悪鬼に崇られ、敗死する。タケルの屍は八尋白千鳥に化身し大空に舞い上がり、西へ西へと飛び立ってゆくのである。ヤマトタケルを祭神としている大鳥神社が、この東西線上に乗ってくる、倭姫とヤマトタケルは「太陽の道」陸地の両端に位置している。この一致が与える印象は強烈であり、偶然の一致とかならずけてしまえない何かをもっている。

(日本古代遺跡の謎と驚異、太田 明)



■[第11図]太陽の道(水谷慶一「知られざる古代」日本放送出版協会より)



檜原神社は大神神社の摂社であり、「天照大神」が宮中から遷された最初の地は「倭の笠縫の邑」と記されていますが、「倭の笠縫の邑」として推測されるいくつかの候補地の中で一番有力視されているのが、ここ檜原神社です。(檜原神社(奈良県桜井市)、Net)



(伊勢久留麻神社
兵庫県神社庁、Net)

伊勢久留麻神社は遠く伊勢ノ国久留真より勧請せるものと云われ、祭神は大日靈貴尊と称され、敏達天皇の頃(572年~85年)と云われ、延喜式(927年完成)には、淡路十三社の三番目に明記されている。そのため淡路イザナギ神宮を一の宮とし、この神社は三の宮と云う。

昭和55年2月11日、建国の日、NHKテレビが特別番組として「知られざる古代・謎の北緯34度32分を行く」で西のお伊勢さんとして紹介したので俄然全国的にも有名となったものである。(伊勢久留麻神社、Net)

余談3 シリウスミステリー

ドゴン族のシリウス神話

西アフリカのマリ共和国に住むドゴン族は、なんとシリウス星人が地球にやって来たと思われる神話を保有している。彼らの宇宙創世神話の中心にはシリウスが位置しており、かつてシリウスからやって来た「水の主」ノモが人類の祖となったというのである。

ドゴン族のこの神話を最初に調査したのは、M・グリオールとG・ディテルランというふたりのフランス人の人類学者で、1930年代から20年間にもわたり、彼らはドゴン族ほか3部族と一緒に生活するなどして、住民からの信頼を獲得し、神話の奥義に接することができた。

グリオールとディテルランは1950年、その報告書を「スーダンのシリウス星系」というタイトルで、フランスの人類学関係の雑誌に発表した。その後、『青い狐』（1965・邦訳1986）という著書で、さらに詳しく報告している。

問題は、彼らの報告に含まれていたドゴン族が持っていた驚くべき知識である。シリウスが主星と伴星からなる連星であることや、シリウス伴星の周期が50年であること、またシリウス伴星は白色矮星であることを、ドゴン族は知っていたというのだ。

今日の天文学の知識では、全天で一番明るい恒星シリウスは約8.6光年の距離にあり、シリウスA(主星)、シリウスB(伴星)というふたつの星からなる連星であることを、我々は知っている。シリウス伴星の存在については、1844年、ドイツの天文学者ベッセルが、シリウスの軌道の波打ち運動から、伴星があることを予測し、この伴星の周期は50年で、非常に重い物質でできていると推定していた。しかし、観測で確認されたのは1862年のことで、アメリカ人のA・クラークによる屈折望遠鏡の発明によって、やっと人間の目でシリウス伴星を見ることができたのである。シリウスBは、半径は地球ほどだが、質量は太陽ほどもある。これは1立方センチの重さが1トンとも、10トンともいわれる地球には存在しない物質でできているからだといわれる。こうした伴星の天文学的な性質が確認され、最初の白色矮星とされたのは1925年のことだ。

一方、ドゴン族のシリウス神話によれば、主星シリウスAのことを、彼らは「シギ・トロ(シギの星)」とか、「ヤシギ・トロ」と呼ぶ。60年ごとに行われるシギの祭礼の儀式と深く関係している。しかし、この星はシリウス星系の根本ではなく、シリウスAを焦点にして、50年周期で楕円軌道を描いてまわる別の星を、彼らは宇宙の中心に置いている。この星が宇宙におけるあらゆる創造の出発点だという。ドゴン族はこの星を「デジタルリア」、または「ポ・トロ(小さな星)」と呼んでいる。

デジタルリアは天空の中でいちばん小さい星だが、いちばん重い星だという。「サガラ」という地球上のすべての生物が集まっても持ち上げられない重い物質でできており、「地上のすべての鉄に匹敵する」重さの物質だという。これが伴星のシリウスBのことで、まさに、白色矮星であることを知っていたかのようなのである。未開と思われるドゴン族が、なぜ、こんな知識を持っていたのだろうか？

ドゴン族の知識には、ほかにも地球は太陽のまわりを運行しているとか、土星にはリングがあること、あるいは、木星には4つの衛星がある、などというものがある。月は「乾燥し、乾ききった血のように死に絶えている」ともいう。もちろん、こうした知識は、人間の肉眼で獲得できるようなものではない。ドゴン族はまた、人体についても高い知識を持っており、血液が空気(酸素)を取り込んで、体内の臓器を循環していることや、赤血球と白血球の違いも知っていたという。このような医学的知識は、私たちの歴史では近代から現代に相当する。要するに、ドゴン族の知識は私たちの文明史の枠に収まらないのである。

しかし、グリオールとディテルランは、ドゴン族の不可解な知識については学究的な姿勢を貫き、問題提起するよりも、事実を報告するだけに留めた。もちろん、シリウス星人が地球を訪れたなどは、ひと言も述べていない。それを最初に主張したのは、イギリスの作家ロバート・テンプルである(『知の起源』並木伸一郎訳)。

(アトランティス幻想 第9話 ドゴン族のシリウス伝説、Net抜粋、倉橋日出夫)

ニネヴェ定数

紀元前7～8世紀に現在のイラクに実在していた古代アッシリアの首都ニネヴェの図書館の遺跡から発掘されたシュメールの粘土板には、聖書のノア伝説の元ネタになったギルガメッシュ叙事詩などと共に、謎の数値が多数刻み残されているが、ほとんどの科学者はその意味を見出せずに放置しておいた。

これらの粘土板群の中から、モーリス・シャトランがこのニネヴェ定数と名付けられた195兆9552億という数の意味を解読した。太陽系の惑星・衛星・彗星などの諸天体からシリウスなどの恒星までも含む公転周期・会合周期の整数倍であり、それら全てが同一の出発点に回帰する超大循環周期だったのだ。

この 70×60^7 でもある195兆9552億を1日の秒数(86400秒)で割った数が2,268,000,000(22億6800万)であり、さらに1年の日数(365.2422日)で割った数が6,209,578.19224(620万9578.19224)である。つまり太陽系の全天体は22億6800万日(約620万年)の周期で元の配置に戻るということである。

現在の私たちの科学的な世界観によれば、銀河系は2億2680万年で一巡りすると考えられている。また私たちの太陽系は、恒星シリウス周辺を中心にして80万年かけて公転している。そしてさらにその公転の中心もまた、銀河の中心に対してこの2億2680万年という長い周期で公転していると計算されている。私たちの銀河の回転周期はニネヴェ定数のぴったり36倍である。またこの銀河の1回転の間にシリウス周期78万7500年はちょうど288回収まっている。

$$\begin{aligned} 226800000 \text{年} &= \text{銀河系の1回転} \\ &= 36 \text{ニネヴェ定数周期} (6300000 \times 36) \\ &= 288 \text{シリウス周期} (787500 \times 288) \end{aligned}$$

(ニネヴェ定数と銀河の1回転、Net)

シリウス星人が古代エジプトとシュメール文明に叡智をもたらしたとの「シリウスミステリー」は、『知の起源』(ロバート・テンプル<著>、並木伸一郎<訳>1998)に詳しい。さらに、アッシリアの首都ニネヴェの図書館の遺跡から発掘されたシュメール粘土板には、聖書のノア伝説の元ネタになったギルガメッシュ叙事詩などと共に、謎の数値(ニネヴェ定数=太陽・シリウス系の超大循環周期)や高度な天文学的知識が刻み残されていた。この「シリウスミステリー」を目にしたときは、大きな驚愕とともにその真実性への疑念を禁じえなかった。シリウスに関する高度な知識はフランスの宣教師によってドゴン族にもたらされたとの説がある。メソポタミア文明の高度な天文学的知識はシュメール人によってもたらされた。彼らの知識である太陽系の惑星の公転・会合周期は60を基数としている、さらに、月の周期28日は 4×7 で7を基数としている。ニネヴェ定数 70×60^7 はこの60と7を基数としている。この定数の36倍が銀河系の1回転周期であるということも銀河が太陽系などの恒星系から成り立っていることからニネヴェ定数に関連付けすることが可能であろう。これらの天文学の高度な知識はシュメール人自らの長期にわたる星の動きの観測から得たものかあるいはシリウス星人に代表される異星人から得たものかは議論の分かれる所である。「シリウスミステリー」は現在でも筆者の抱く最大のミステリーの一つである。

(藤田)

余談4 シュメール語と岩刻文字

シュメール文明ーメソポタミア文明の起源

紀元前5千年頃、後にメソポタミアと呼ばれるユーフラテス河の沿岸地帯に、ある農耕民族が住み着いた。彼らの住み着いた土地は、耕作や放牧に適しており、近くの湿地帯では、魚と鳥が常に豊富に得られるという生活するには理想的な環境だった。その農耕民族は、ウバイド人と呼ばれ、その後、千年以上もそこに住み着き、泥でレンガをつくって街や神殿をつくり、その後のメソポタミア文明の基礎をつくることになった民族である。彼らの有能で進取性に富んだ気性は、まもなく、この地を中近東で最も繁栄した地帯に押し上げていった。ただ、彼らは、文字を持たなかったため、詳しい記録を残すことはなかった。

ところが、紀元前3800年頃、どこからかシュメール人と呼ばれる民族がやって来ると、信じられない大変化が起こった。文明の一大ブレイクとも言える現象が起きたのである。メソポタミアの地は、わずかの間に、前例のない大繁栄を記録した。そして、空前とも言える政治権力が打ち立てられたのである。それは、ことに天文と暦を始め、美術、建築、宗教は言うに及ばず、社会機構、日常の細かな慣習から楔形文字の発明に至るまで、それらは、すべて、彼らシュメール人の成せる画期的偉業であった。世界最初と言われる船や車輪つき戦車なども、この頃、シュメール人によってつくられたのである。

しかしながら、4380年前にシュメール都市国家にセム族が侵入。セム族がアッカド建国。4200年前にはシュメールが再び奪い返すが、4000年前にはセム族がバビロニア建国。メソポタミアのシュメール人は絶滅した。敗北したシュメール人は、海洋民族になり世界各地に拡散していったと言われている。(謎多きシュメール人！メソポタミア文明の起源ーNeverまとめ、Net、藤田)

岩刻文字

ペトログラフィ(岩刻文字)

シュメール人は6500年前に突如シュメール文化を興したが、4000年前頃にアッカド人によって滅ぼされ海洋民族となり南北アメリカから日本を含む広大な環太平洋地域にシュメール文化を伝搬した。後年、紀元前10世紀にフェニキアはイスラエル王のソロモンと共同で紅海の貿易に進出する。紀元前600年ごろ、フェニキア人は、紅海から出港し、喜望峰を経て、時計回りにアフリカ大陸を一周し、3年目にエジプトに帰ってきたという。このように、フェニキア人は極めて優れた航海術を有しており日本にも達していたと考えられている。フェニキア文字はシュメールの楔形文字を起源とし、アルファベットの基になったと考えられている。

シュメールとフェニキア文字の特徴を備えたペトログラフィ(岩刻文字)が環太平洋地域で見ついている。日本のペトログラフィ(岩刻文字)の所在地は海の民(海人族安曇氏など、Y-DNAハプログループC1)に関わり、大体、海岸に近いところにある(図の彦島①や角島②のペテログラフィ)。近年は古い神社(古社)の神域で多くのペテログラフィが見ついている。(日本のペテログラフィ、日本の歴史と日本人のルーツ、Net、藤田)

シュメールが滅びたのは地球の気候の寒冷化が始まる4000年前で、縄文時代後期にあたる。また、フェニキアがインド洋に進出したのは気候の寒冷化が本格化する紀元前1000年の縄文時代晩期である。海洋民族となったシュメール人や海洋民族のフェニキア人が日本に達していたのとの痕跡は、ペテログラフィのみならず海底遺跡などにみられる。それがどれほど「古の日本(倭)の歴史」に影響を与えたかは全く不明である。(藤田)

シュメール語

シュメール語と同系統と考えられる言語はこれまでのところ発見されていない。日本語と同じ膠着語という点ではウラル語族、アルタイ語族と類似する。興味深いことに、『古事記』は部分的にシュメール語で読めると言う。また、天皇の古語は、シュメール語で解釈できる。例えば、天皇を「スメラ」と言う。それは古代バビロニアの「Sumer(スメル)」と似ているだけでなく、シュメールと発音されていた。ちなみに「スメラギ」はSumerの複数形である。さらに、「ミコト」や「ミカド」は「Migut(ミグ)」が訛ったもので「天降る(天孫降臨か)開拓者」の意で「神」を意味する。これらの指摘は単なる言葉の遊びとも考えられるが、完全に無視するものだろうか。(藤田)

①下関市の彦島八幡宮のペテログラフィ



②下関市の角島のペテログラフィ岩



改訂版
古の日本(倭)の
歴史

参考資料
(著作、図説、その他)

あとがき

藤田泰太郎

参考著作

- 赤塚次郎 2009 『幻の王国・狗奴国を旅する 卑弥呼に抗った謎の国へ』
風媒社
- 足立倫行 2012 『倭人伝、古事記の正体 卑弥呼と古代王権のルーツ』
朝日新聞出版 朝日新書372
- アダム・ラザフォード 2017 『ゲノムが語る人類全史』(垂水雄二[訳]
篠田謙一[解説]) 文藝春秋
- 安藤達朗 2016 いっきに学び直す日本史 古代・中世・近世 教養編
東洋経済新報社
- 井沢元彦 1993 『逆説の日本史 古代黎明編 封印された「倭」の謎』
小学館
- 井沢元彦 1995 『〔古代史大推理〕縄文都市国家の謎 驚異の
「三内丸山遺跡」全解説』(考古の森研究会[編・著])スコラ
- 石川日出志 2010 『農耕社会の成立 シリーズ日本の古代史①』
岩波新書1271
- 石野博信 2008 『邪馬台国の候補地 纏向遺跡』シリーズ
「遺跡を学ぶ」051 新泉社
- 石野博信(編)2015『石野博信討論集 倭国の乱とは何か「クニ」への胎動』
新泉社
- 石野博信・石崎善久・小山田宏一・杉原和雄・瀬戸谷皓・高野陽子・
山本三郎(奈良県香芝市二上山博物館 編)
『邪馬台国時代の丹波・丹後・但馬・大和』学生社
- 石野博信・高島忠平・西谷正・吉村武彦 2011『研究最前線 邪馬台国
いま、なにが、どこまでいえるのか』朝日新聞出版
朝日選書878
- 一 然著/金訳 1997 『完訳 三国遺事』 明石書店
- 井上秀雄 2004 『古代朝鮮』 講談社学術文庫1678
- 上田正昭 2012 『私の日本古代史(上)天皇とは何ものか—
縄文から倭の五王まで』新潮社 新潮選書
- 上田正昭 2012 『私の日本古代史(下)古事記は偽書か—継体朝から
律令国家成立まで』新潮社 新潮選書
- 上田正昭 2013 『渡来の古代史 国のかたちをつくったのは誰か』
角川学芸出版 角川新書526
- 宇治谷 孟 1988 『日本書記(上)全現代語訳』講談社学術文庫833
- 宇治谷 孟 1988 『日本書記(下)全現代語訳』講談社学術文庫834
- 宇野正美 1992 『古代ユダヤは日本に封印された』日本文芸社
- 梅原 猛 2010 『葬られた王朝 古代出雲の謎を解く』新潮社

- 梅原 猛 2011 『海人と天皇(上)日本とはなにか』朝日新聞出版 朝日文庫
- 梅原 猛 2011 『海人と天皇(中)日本とはなにか』朝日新聞出版 朝日文庫
- 梅原 猛 2011 『海人と天皇(下)日本とはなにか』朝日新聞出版 朝日文庫
- 梅原 猛 2013 『縄文の神秘』学研パブリッシング 学研M文庫
- 太田 明 1992 『日本古代遺跡の謎と驚異—遺跡ネットワークが語る壮大な
「地球幾何学」の驚異!』ラクダブックス 日本文芸社
- 大谷光雄 1976 『古代の歴史』雄山閣出版
- 大津 透 2017 『天皇の歴史① 神話から歴史へ』講談社学術文庫 2481
- 大塚初重 2012 『「考古学」最新講義 古墳と被葬者の謎にせまる』祥伝社
- 大橋信弥 1984 『日本古代国家の成立と息長氏』吉川弘文館
- 大平 裕 2013 『知っていますか、任那日本府 韓国がけっして教えない
歴史』PHP研究所
- 貝田禎造 1985 『古代天皇長寿の謎—日本書記の謎を解く—』
ロッコウブックス
- 岡村秀典 2017 『鏡が語る古代史』岩波新書1664
- 岡谷公二 2016 『伊勢と出雲 韓神と鉄』平凡社新書821
- 萩原千鶴 1999 『出雲国風土記』全訳注 講談社学術文庫
- 鹿島 昇(訳) 1982 『桓壇古記 シルクロード興亡史』新國民社
(歴史と現代社)
- 加藤鎌吉・仁藤敦史・設楽博己 『NHKさかのぼり日本史外交編 [10]
飛鳥～縄文こうして国が生まれた—なぜ、列島に「日本」
という国ができたか』NHK出版
- 加藤鎌吉 2017 『渡来氏族の謎』祥伝社新書510
- 門脇禎二 1976 『出雲の古代史』NHKブックス268
- 門脇禎二 2000 『葛城と古代国家』講談社学術文庫1429
- 蒲池明弘 2017 『火山で読み解く古事記の謎』文春新書1122
- 川端祐人、海部陽介 2017 『我々はなぜ我々だけなのか
アジアから消えた多様な「人類」たち』講談社
BLU BACKS B-2037
- 河内春人 2018 『倭の五王 王位継承と五世紀の東アジア』中公新書2470
- 菊池山哉 1967 『蝦夷と天ノ朝の研究』東京史談会 1966
- 木下正史 2013 『日本古代の歴史① 倭国のなりたち』吉川弘文館
- 金 容雲 2009 『日本語の正体 倭の大王は百済語で話す』三五館
- 金 達寿 1985 『日本古代史と朝鮮』講談社学術文庫702
- 金 達寿 1986 『古代朝鮮と日本文化 神々のふるさと』
講談社学術文庫1986
- 日下雅義 2012 『地形からみた歴史 古代景観を復元する』
講談社学術文庫2143
- 倉本一宏 2017 藤原氏—権力中枢の一族 中公新書2464
- 後藤 明 2017 世界神話学入門 講談社現代新書2457

3

- 後藤聡一 2010 『邪馬台国近江説－纏向遺跡「箸墓＝卑弥呼の墓」説への疑問』淡海文庫45 サンライズ出版
- 小路田泰直 2011 『邪馬台国と「鉄の道」日本の原形を探求する』歴史新書 洋泉社
- 佐藤洋一郎 2016 『食の人類史』中公新書2367
- 佐藤洋一郎 2019 『稲の日本史』角川ソフィア文庫
- 斎木雲州 2007 『出雲と大和のあけぼの－丹後風土記の世界』大元出版
- 斎藤成也 2017 『日本人の源流－核DNA解析でたどる』河出書房新社
- 斎藤成也、関野吉晴、片山一道、武光誠 2019 『大論争 日本人の起源』宝島社新書
- 斎藤成也(編)2020 河合洋介、木村亮介、松波雅俊、鈴木留美子 『最新DNA研究が解き明かす。日本人誕生論』秀和システム
- 坂靖・青柳泰介 2011 『葛城の王都・南郷遺跡群』シリーズ「遺跡を学ぶ」079 新泉社
- 坂本政道 2013 『出雲王朝の隠された秘密』ベールを脱いだ日本古代史Ⅲ ハート出版
- 澤井良介 2010 『邪馬台国近江説 古代近江の点と線』幻冬舎ルネッサンス
- 崎谷満 2008 『DNAでたどる日本人10万年の旅』昭和堂
- 佐治芳彦 1984 『謎の宮下文書』徳間書店
- 篠田謙一 2005 『DNAで語る日本人起源論』岩波現代全書073
- 篠田謙一 2007 『日本人になった祖先たち－DNAから解明するその多元的構造』NHK Books 1078, NHK出版
- 篠田謙一 2016 「ホモサピエンスの本質をゲノムで探る」『現代思想(特集 人類の起源と進化)』2016年5月号
- 篠田謙一 2017 『ホモサピエンスの誕生と拡散』歴史新書、洋泉社
- 篠田謙一 2019 『新版 日本人になった祖先たち－DNAが解明する多元的構造』NHK Books 1255, NHK出版
- 司馬遼太郎 2005 『街道をゆくNo.02 湖西のみち 近江散歩』朝日ビジュアルシリーズ(週刊)、朝日新聞社
- 白石太一郎 1999 『古墳とヤマト政権－古代国家はいかに形成されたか』文春新書036
- 白石太一郎他 2012 『天皇陵古墳をかながえる』学生社
- 関裕二 2002 『消された王権・物部氏の謎 オニの系譜から解く古代史』PHP研究所 PHP文庫514
- 関裕二 2006 『物部氏の正体 大豪族消滅に秘められた古代史最大のトリック』東京書籍
- 関裕二 2013 『ヤマト王権と十大豪族の正体』PHP研究所 PHP文庫648

4

- 関裕二 2014 『古代史で読み解く桃太郎伝説の謎』祥伝社黄金文庫645
- 大地舜 1999 『沈黙の神殿』PHP研究所
- 高田貴太 2017 『海の向こうから見た倭国』講談社現代新書2414
- 多田元 2014 『オールカラーでわかりやすい! 古事記・日本書記』西東社
- 新谷尚紀 2009 『伊勢神宮と出雲大社 「日本」と「天皇」の誕生』講談社選書メチエ434
- 高山貴久子 2013 『姫神の来歴 古代史を覆す国つ神の系図』新潮社
- 武澤秀一 2011 『伊勢神宮の謎を解く－アマテラスと天皇の「発明」』ちくま新書895
- 武澤秀一 2013 『伊勢神宮と天皇の謎』文春新書908
- 谷川健一 1995 『青銅の神の足跡』小学館ライブラリー69
- 谷川健一 1999 『日本の神々』岩波新書618
- 武光誠 2006 『「古代日本」誕生の謎 大和朝廷から統一国家へ』PHP研究所 PHP文庫
- 武光誠 2013 『出雲王国の正体 日本最古の神政国家』PHP研究所 PHP文庫
- 千城央 2014 『近江にいた弥生の大魔王 水稻伝来から邪馬台国まで』サンライズ出版 別冊淡海文庫23
- 田中勝也 1988 『古代日本異族伝説の謎』大和書房
- 田中勝也 1986 『異端日本古代史書の謎』大和書房
- 堤隆 2004 『黒曜石3万年の旅』日本放送出版協会 NHKブックス1015
- 遠山美都男 2007 『古代の皇位継承 天武系皇統は実在したか』吉川弘文館
- 寺沢薫 2008 『王権誕生』日本の歴史02(講談社学術文庫)
- 都出比呂志 2011 『古代国家はいつ成立したか』岩波新書1325
- 出羽弘明 2004 『新羅の神々と古代日本－新羅神社の語る世界』同成社
- 出村政彬 2021 『ヤポネシア 日本人の起源』日経サイエンス 2021, 8, 30-37 (協力:大橋順, 篠田謙一, 藤尾慎一郎, 斎藤成也)
- 鳥越憲三郎 1992 『古代朝鮮と倭族 神話解読と現地踏査』中央公論新社 中公新書1085
- 鳥越健三郎 1994 『弥生の王国 北九州古代国家と奴国の王都』中央公論社 中公新書1994
- 戸矢学 2012 『三種の神器〔玉・鏡・剣〕が示す天皇の起源』河出書房新社
- 戸矢学 2016 『ニギハヤヒ「先代旧事本記」から探る物部氏の祖神(増補新版)』河出書房新書
- 戸矢学 2014 『富士山、2200年の秘密 なぜ日本最大の霊山は古事記に無視されたのか』かざひの文庫
- 中井均[編著] 2013 『滋賀県謎解き散歩』新人物文庫 中経出版

5

- 中川 毅 2017 『人類と気候の10万年史 過去に何が起きたのか、これから何が起こるのか』BLUE BACKS B-2004 講談社
- 中橋孝博 2015 『倭人への道 人骨の謎を追って』吉川弘文館
歴史文化ライブラリー402
- 中堀 豊 2005 『Y染色体からみた日本人』岩波科学ライブラリー110
岩波書店
- 長野正孝 2015 『古代史の謎は「海路」で解ける 卑弥呼や「倭の五王」の海に漕ぎ出す』PHP研究所 PHP新書968
- 長野正孝 2015 『古代史の謎は「鉄」で解ける 前方後円墳や「倭国大乱」の実像』PHP研究所 PHP新書1012
- 長野正孝 2017 『古代の技術を知れば「日本書紀」の謎が解ける』PHP研究所 PHP新書1115
- 永田和宏 2017 『人はどのように鉄を作ってきたか 4000年の歴史と製鉄の原理』ブルーバックスB-2017 講談社
- 長浜浩明 2010 『日本人のルーツの謎を解く 縄文人は日本人と韓国人の祖先だった!』展転社
- 長浜浩明 2014 『韓国人は何処から来たか』展転社
- 長浜浩明 2015 『国民のための日本建国史—すっきり分かる日本の国のはじまりと成り立ち』アイバス出版
- 長浜浩明 2019 『日本の誕生—皇室と日本人のルーツ』ワック
- 西谷 正 2014 『市民の考古学③ 古代日本と朝鮮半島との交流史』同成社
- 橋本輝彦・白石太一郎・坂井秀哉 2014 『邪馬台国からヤマト王権へ』奈良大ブックレット04 ナカニシヤ出版
- 橋口達也 2007 『弥生時代の戦い』(株)雄山閣
- 原田常治 1976 『記紀以前の資料による 古代日本正史』同志社
- 原田 幹 2013 『東西弥生文化の結節点・朝日遺跡』シリーズ「遺跡を学ぶ」088 新泉社
- 伴とし子 2004 『前ヤマトを創った大丹波王国 国宝「海部系図」が解く 真実の古代史』新人物往来社
- 伴とし子 2007 『禁断の秘史ついに開く 卑弥呼の孫トヨはアマテラスだった』明星出版
- 広瀬和雄 2010 『前方後円墳の世界』岩波新書1264
- 朴 炳植 1988 『スサノオの来た道』毎日新聞社
- 福永伸哉 2001 『邪馬台国から大和政権へ』大阪大学新世紀セミナー大阪大学出版会
- 藤井耕一郎 2011 『大国主対物部氏 はるかな古代、出雲は近江だった』河出書房新社

6

- 藤井耕一郎 2012 『竹内宿禰の正体 古代史最もあやしい謎の存在』河出書房新社
- 藤井耕一郎 2015 『サルタヒコの謎を解く』河出書房新社
- 藤堂明保・竹田昇・影山輝國 [全訳注] 『倭国伝 中国正史に描かれた日本』講談社学術文庫2010
- 平林章仁 2013 『謎の古代豪族 葛城氏』祥伝社新書326
- 平林章仁 2017 『蘇我氏と馬飼集団の謎』祥伝社新書513
- 宝賀寿男 2008 『越と出雲の夜明け—日本海沿岸地域の創世史』法令出版
- 宝賀寿男 2012 『古代氏族の研究① 和珥氏—中国江南から来た海神族の流れ』青垣出版
- 宝賀寿男 2013 『古代氏族の研究④ 大伴氏—列島現住民の流れを汲む名門武門』青垣出版
- 宝賀寿男 2014 『古代氏族の研究⑥ 息長氏—大王を輩出した鍛冶氏族』青垣出版
- 宝賀寿男 2016 『古代氏族の研究⑧ 物部氏—剣神奉斎の軍事大族』青垣出版
- 宝賀寿男 2017 『「神武東征」の原像<新装版>』青垣出版
- 松本 昭 2017 『古代天皇史探訪 天皇家の祖先・息長水依姫を追って』アールズ出版
- 真弓常忠 1997 『古代の鉄と神々』(改訂新版)学生社
- みしまる湊耳 2022 『小女神 ヤタガラスの娘』幻冬舎
- 三浦佑之 2002 『口語訳 古事記(完全版)』文藝春秋
- 三浦佑之 2016 『風土記の世界』岩波新書1604
- 水谷千秋 2011 『謎の大王 継体天皇』文春新書192
- 水谷千秋 2013 『継体天皇と朝鮮半島の謎』文春新書925
- 水谷慶一 1980 『謎の北緯34度32分をゆく知られざる古代』日本放送出版協会
- 水野 祐 [監修] 1992 『イラスト・チャートでわかる 逆説の日本古代史』KKベストセラーズ
- 溝口睦子 2009 『アマテラスの誕生—古代王権の源流を探る』岩波新書1171
- 村井康彦 2013 『出雲と大和』岩波新書1405
- 室谷克美 2010 『日韓がタブーにする半島の歴史』新潮新書360
- 森 紘一 2013 『敗者の古代史』中経出版
- 森 紘一 2013 『日本の古代(1) 倭人の登場』中公文庫
- 茂在寅男 1992 『古代日本の航海術』小学館ライブラリー33
- 山崎春雄・久保純子 2017 『日本列島100万年史 大地に刻まれた壮大な物語』BLUE BACKS B2000 講談社
- 八幡和郎 2015 『最終解答 日本古代史 神武東征から邪馬台国、日韓関係の起源まで』PHP研究所 PHP文庫700

7

- ユージン・E・ハリス 2016『ゲノム革命ーヒト起源の真実ー』(水谷 淳 [訳])
早川書房
- ロバート・テンブル 1998『知の起源』(並木伸一郎[訳])角川春樹事務所
- 吉田大洋 1980『謎の出雲帝国 天孫一族に虐殺された出雲神族の怒り』
徳間書店
- 吉村作治 1990『<グラフィティ・歴史謎事典>⑭ 古代文明
天文と巨石の謎』光文社文庫
- 吉村武彦 2010『大和王権 シリーズ日本古代史②』岩波新書1272
- 渡部雅史 2012『大和朝廷成立の謎ー古代出雲王国から邪馬台国へ』
幻冬舎ルネッサンス

図 説

- 『最新世界史図説 タペストリー 最新版』帝国書院編集部(川北 稔、
桃木至朗 [監修]) 帝国書院
- 『図解 古代史 旧石器時代～律令国家成立まで写真と地図で解説』
成美堂出版編集部(東京都歴史教育研究会 [監修])
成美堂出版 SEIBIDO MOOK
- 『別冊宝島2283 日朝古代史 嘘の起源』
(株)はる製作室(編集)(室谷克実 [監修]) 宝島社
- 『別冊宝島2151 日本神話の地図帳 地図とイラストで読む「古事記」
「日本書紀」』武光 誠(編著)宝島社
- 『別冊宝島2163 神社と日本人 神社は何を祀り、人を導いてきたのか?』
島田裕巳 [監修] 宝島社
- 『古代豪族 古代史研究の最前線』洋泉社編集部(編) 洋泉社
- 『ここまでわかった! 邪馬台国』2011「歴史読本」編集部(編)
新人物文庫667
- 『ここまでわかった! 古代豪族のルーツと末裔たち』2011
「歴史読本」編集部(編) 新人物文庫714
- 『ここまでわかった! 「古代」謎の4世紀』2014「歴史読本」編集部(編)
新人物文庫750
- 『図説 滋賀県の歴史』河出書房新社(責任編集 木村至宏)

8

その他

「古の日本(倭)の歴史」の論説の展開に、上述の著作の他、インターネット情報も大いに参考にした。とくに、「縄文・弥生時代を通して稲作の伝搬・展開」および「日本語の起源」に関する論説は、『日本人の起源』(伊藤俊幸氏のインターネット論文) <http://www.geocities.jp/ikoh12/>に依るところが大である。また、個々の事象の説明には、インターネット百科事典であるウィキペディア(Wikipedia)の記述の多くを引用させて頂いた。

『日本人の起源』(伊藤俊幸氏のインターネット論文)の掲載されていた、Yahoo!ジオシティーズ (geoties)は、2019年3月末をもってサービス終了されています。移行先、不明。

「日本人の成り立ち」に関連した知見のいくつかは、「科研費 新学術領域研究 ヤポネシアゲノム 季刊誌(2019~2023)」から得た。

最新版

古の日本(倭)の歴史

あとがき

筆者は、近江商人の里(五個荘)で生まれ、優麗な三上山を対岸に眺められる湖族の浦(堅田)で育ち、生来の歴史好きで謎に満ちた近江の古代史に興味を抱いていた。明治時代に三上山の麓の大岩山古墳から国内最大級の銅鐸が多数見つかかり、また20世紀末には、守山市で弥生時代後期の伊勢遺跡という我が国最大級の大規模遺跡が見つかった。伊勢遺跡は、大己貴の国(玉牆の内つ国)の都ではないか？ 卑弥呼は伊勢遺跡より邪馬台国の纏向遺跡に遷った。さらに、2016年、彦根市で大規模集落跡の稲部(いなべ)遺跡が見つかった。この遺跡は、纏向遺跡を都とする邪馬台国に対抗した狗奴国の都ではないか？ これらの古墳や遺跡は、近江が『古の日本(倭)の歴史』の主な舞台だったことを示唆する。

筆者は、ゲノム科学の素養があったので、最近急速に発展した旧石器人、新石器人さらには古代人のゲノム解析に大いに興味をもち、その成果を漁ったところ、人類学・考古学はもはやゲノム解析がなければなり立たなくなっていることを知るに至った。このことがきっかけで、生来の興味の対象であった『古の日本(倭)の歴史』に還暦の頃から入り込んでいった。古希を過ぎるころには我田引水ながらも旧石器時代から飛時代に至る筆者なりの倭の歴史を構築できるようになった。喜寿を迎えている本年、自分で一応満足できる完成版(最新版)を公表するに至った。

『古の日本(倭)の歴史』を拝読して頂ければわかるように、文献学、考古学さらには太古人・古代人のゲノム解析を含む広範な知見を鑑み、かつ先人の日本古代史研究に敬意を払いつつ、筆者独自の古代日本史観を提示できた。まず、近年のゲノム学の進展により明白にされた「日本人の成立のモデル」を提唱した。さらに、瓊瓊杵や彦火明の天孫降臨は1世紀半ばの出来事であることを論証し、紀元前1世紀から4世紀までの日本古代史を皇統を軸にして再構成した。

弥生時代の倭国の主人公は大国主であり、2世紀初めに近畿を中心とする大己貴の国(玉牆の内つ国)を建てた。2世紀半ばの饒速日の東征、さらに3世紀初めの邪馬台国建国により、大己貴の国は解体され、饒速日の邪馬台国と大国主の玉牆の内つ国の後継国の狗奴国に分裂した。3世紀末の崇神東征(神武東征の主要部分)により邪馬台国内の大国主勢力が一掃され、大和にヤマト王権(崇神王朝)が建てられた。この倭の歴史の構築で、『記紀』では殆ど無視されている近江の古代史を浮かび上がらせた。日本の古代史の先人方にとってとても受け入れられない筆者の特異な見解が多々あると思う。老齡のゲノム科学者が15年に亘って推敲を重ねて纏めた古代史にも新規な見解や洞察があり、今後の日本の古代史の展開への指標・道標になろうかと考えている。

令和5年6月 藤田泰太郎